

第4章 公立高校に在学する外国出身生徒の 現状と進路をめぐって

— 神奈川県における質問紙調査と聞き取り調査から —
(趙 衛国 東京大学大学院教育学研究科)

1. はじめに

日本で育つ外国人の子どもについての研究は、歴史的事情と民族集団の規模の大きさから在日韓国・朝鮮人の教育を中心になされてきたが、ニューカマー^{注①}の子どもたちの教育に関する研究は歴史的にまだ浅い。1980年代からニューカマーの増加によって、政府による大規模な基本調査^{注②}と、研究グループや研究者の個人による質問紙調査や実証研究等が盛んに行われるようになってきた。特に、1990年代以降、彼らの教育のあり方に焦点をあてた報告、調査や質的研究などが急速に増加している。就学前の幼児の保育・教育現状や問題から義務教育、進学・就労および高等教育機関への進学における現状や問題が、徐々に指摘され、解明されつつある^{注③}。

しかし、これまでの研究は、主に義務教育段階の小中学生のニューカマーを研究対象に検討されてきた。このため、青年期^{注④}の発達途上にある高校生を研究対象とするものは非常に少ない。この状況に至った背景を考えるには、2つのことが挙げられる。まずひとつは、90年代以降来日したニューカマーの子どもたちは、当時まだ乳幼児や小中学生のほうが多く、高校生の年齢に達した人が少なかったということ。いまひとつは、中国帰国生を受け入れるために、多くの高校に特別に制度が設けられているのに対して、他のニューカマーの子どもたちはそういった恩恵はなく、厳しい高校受験に耐える学力を身に付けていなければ、狭き高校の門をくぐることもできず、門前払いをされてきた現実がある^{注⑤}。

そういった厳しい現状であるにもかかわらず、在日外国人の長期滞在者の増加と、高等学校の外国人生徒の受入れ校が大幅に増えたこと^{注⑥}により、近年ニューカマーの高校生が著しく増えてきている。文部科学省調査^{注⑦}によると、高等学校がはじめて調査対象となった1995年度では、ニューカマーの高校生はわずか264人だったが、2004年3月公表された調査によると、2003年度では4倍増の1,143人に達している(表1)^{注⑧}。

表1 高等学校におけるニューカマー在籍者数の推移

95年度	97年度	99年度	00年度	01年度	02年度	03年度
264人	461人	901人	917人	1024人	1131人	1143人

「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」(1995年度～2003年度)より作成

しかしながら、入学率が年々高くなってきたものの、退学者も続出することが指摘されている(志賀、1992; 鍛冶、2000)。かれらの学校適応の実態と、学業不振や退学に至った原因等を究明することが早急の課題として浮上してきている。そこで、このプロジェクトの調査を通して、外国出身生徒、主に中国出身高校生の教育問題にスポットライトをあて、かれらが直面する問題を在学状況(現状)と進路、特に退学者の実態を中心に調査を行っ

た。退学者の実態を知ることが在学者への対応を改善することや、今後退学者自身への長期的な視野での支援を考える上で必要であると考えている。また、この結果を他の在日外国人生徒にも拡大適用するという形になるよう願っている。

2. 問題

2-1 社会背景

神奈川県の場合、1973年から1988年まで「高校百校新設計画」で高校の絶対数が増えたため、様々な生徒を受け入れてきた。しかし、1999年10月ごろから、都道府県教育委員会が競うようにして、2000年度から10ヵ年の間に実施する公立高校の改革計画の目標と内容が明確に書かれている「都立高校改革推進計画」や「県立改革推進計画」などを発表している。その背景として、国際化や情報化の進展、産業・就業構造の変化などに伴った日本社会の変化や生徒の多様化、少子化の進行などが挙げられているが、一番注目されるのは、高校生活に意義を見出すことができず、中途退学する生徒が増えていることである。その対応として、個が生きる多様な教育を提供するために、「単位制による普通科高校」「総合学科高校」「専門コース設置校」「フレキシブルスクール」「専門高校・専門学科」という新しいタイプの高校を設置するとしている。

しかし、県立高校改革が進む中、公立高校での外国人子弟の教育に関してわずかに触れているものの、かれらが抱える問題点と困難について詳しくは展開されていない。果たして改革を推進している全国各地の公立高校で、外国人子弟がいかなる問題に直面しているのか、不明な点ばかりである。彼らが置かれている状況を調査することが急務となっていると考えられる。

2-2 公表された調査結果から見た神奈川県の状況

まず、文部科学省の調査から神奈川県の公立学校における外国出身自動・生徒の在籍者状況を把握してみよう。2004年3月公表されたデータによると、2003年9月現在日本全国公立学校に在籍する日本語指導が必要な外国人の児童・生徒の数は19,042人で、母語別では63言語にわたっている。高等学校だけに注目すると、中国語を母語とする生徒は625人で、63言語の高等学校在籍者のうち最も多く、全体の54.3%を占めている(表2)。

表2 母語別児童生徒(63言語のうち上位3言語)と各学校種における全体比

	小学校	中学校	高等学校	母語別合計☆
ポルトガル語	4,955(39.6%)	1,658(31.2%)	144(12.6%)	6,772(35.6%)
中国語	2,373(18.9%)	1,909(35.9%)	625(54.3%)	4,913(25.8%)
スペイン語	1,854(14.8%)	669(12.6%)	131(11.5%)	2,665(14.0%)
63言語の合計☆	12,523	5,317	1,143	19,042

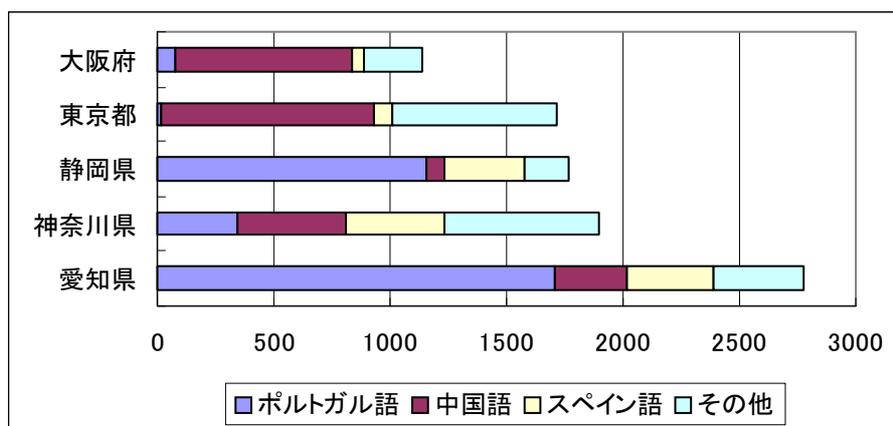
☆ 表2、表3及び図1では、合計の中には中等教育学校、盲・聾・養護学校が含まれる。単位：人。いずれも2004年3月24日付け発表された「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成15年度)」により抜粋

下記の表3は「都道府県在籍者数(上位5府県)と各府県の合計に占める学校種別割合」を示したもので、図1は「都道府県(母語別)児童生徒数(上位5都府県)」を示したものである。

表3 都道府県在籍者数(上位5府県)と各府県の合計に占める学校種別割合

	小学校	中学校	高等学校	合計☆
愛知県	2032(73.2%)	672(24.2%)	67(2.4%)	2776
神奈川県	1125(59.3%)	529(27.9%)	240(12.7%)	1897
静岡県	1359(76.9%)	400(22.6%)	8(0.45%)	1767
東京都	883(51.5%)	614(35.8%)	213(12.4%)	1716
大阪府	615(54.2%)	326(28.7%)	187(16.5%)	1134

図1 都道府県(母語別)児童生徒数(上位5都府県)



データから神奈川県の上在籍者状況には2つの特徴が浮き彫りになった。

第1に、表3から在籍者数上位5府県は愛知県、神奈川県、静岡県、東京都、大阪府の順になっているが、高等学校に注目すると、神奈川県がトップに上がり、次いで東京都、大阪府、愛知県、静岡県の順に変わっている。

第2に、図1では、大阪府と東京都には中国語母語話者、静岡県と愛知県にはポルトガル語母語話者がそれぞれ占める割合が高いのに対して、神奈川県の場合は、ポルトガル語、中国語とスペイン語母語話者が同じぐらいの割合で、均衡を保っている。これは教育現場に反映すると、1つの学校もしくは1つの学級には異なる国の出身生徒が複数在籍している可能性が非常に高いと考えられる。そのため、問題も多く存在し、教育関係者の対応の多様性が必要とされているであろう。

次に神奈川県内での調査データから在籍状況を把握してみる。高校の教職員組合に「民族差別と人権」問題小委員会があり、それに属する「滞日外国人の子どもたちの教育を考える」小委員会が2004年5月に調査を実施した（以下ではこの調査を「高教組調査」と略す）。その調査結果はやや長いが、外国出身生徒の現状を詳しく調査した報告であるために、原文を引用しておく（『教研ニュース No114 特集第47次教研集会研究誌』pp13-14）。

① 外国出身生徒が全県的に在籍している。調査に答えた62分会のうち、在籍者がいる学校は42校で、該当者がいない学校は20校である。42校で合計398人の生徒は在県外国人枠がある学校以外に、課題集中校、定時制に集中する傾向がある。

② 国籍が多様化しているなか、中国籍生徒が全体の1/4で増えており、しかも、その多くは在県外国人枠校に在学している。一方、韓国・朝鮮出身が判明されたのはわずか38人で、実態よりも少ないと推測できる。言い換えれば、より見えない存在になりつつある。

③ さらに、日本籍、外国にルーツを持つ生徒が見えない存在になっている。42校のうち、日本籍で日本語を母語としない生徒は25名がいるが、その他、外国にルーツを持つ生徒は26名である。（2002年度横浜市教委在籍調査によると、外国籍児童生徒総数は2310名で、外国につながる日本国籍者は1669名もいる）

④ 課題が山積みしている。

- ・ 入学選抜→在県枠の基準からはずれる外国出身生徒への選抜上の配慮など
- ・ 日本語指導→効果的な指導方法、時間割編成上の課題など
- ・ 教科指導→学習言語の難しさ、取り出し授業に対する非常勤時間数の確保など
- ・ 家庭との連絡→保護者との意思疎通が取れない現実など
- ・ 進路指導→就職に対する組織的な対応が不十分、経済的に苦しい家庭など

①について、さらに「在日外国人生徒および日本語を母語としない生徒についての状況

調査（集計）」(pp15-16)の一覧表によると、同じ学校に在籍者数が5人を超えた学校数は18校で、そのうち、横浜北地区に位置しているM高校の在籍者が一番多く、94人もいる。そのM校では外国出身生徒が全校生徒の14%を上回っている。

2-3 今回の調査目的と意義

先に紹介した「高教組調査」の結果から外国出身生徒の現状がいかにかげしいものであるかが明確となっている一方、何らかの原因で学校からいなくなった、いわゆる退学者の状況について触れられていない。学校を離れている退学者はどんな状況にいるかを調べるには、学校内に限定した調査方法に限界があると思われる。

退学者は学校を離れる前に、校則破りや学業不振といった具体的な問題を抱え、学校という場においては見えやすい存在となっている。しかし、いざ退学すると、地域や社会に「溶け込み」、抽象的で、曖昧な存在になるわけである。学校から離れていても、日本を離れることではない。学校で問題を抱えている生徒が、地域や社会に戻ると、何らかの問題、例えば、社会雇用や滞在資格の問題、発達途中にある青年期ならではの悩み等、そういった問題を抱える青年になるわけで、決して看過できることではない。場合によっては、彼らが日本社会にいながら、日本社会に忘れられている存在となり、いざ犯罪や何か社会問題が起きると、外国人による犯罪だと短絡的に片付けられ、彼らへのサポートを何もしていない点を反省した言論は見当たらない。このように彼らの問題がいろいろあると予想され、事の重大さも様々な方面から指摘できる。しかし、退学者に対する調査はまだなされていないのが現状である。

ここで、本調査の意義を以下の3点に要約する。第一、当事者の口から退学に至った経緯を語ってもらい、在学者—その中に退学者の予備軍とでも言える生徒もいる—への対応の改善を提案できる。第二、社会保障の面から考えても、退学者の実情を知る意義が大きい。第三、調査活動を通して、社会と退学者および学校へのネットワークを再構築できることが期待できよう。

3. 調査の方法

3-1 対象者

退学者の状況を調査するために、まず学校関係者あてに、県立高校に在学している(いた)外国出身生徒の在籍状況と進路を調査する質問紙を作成した。詳しくは資料1「滞日外国出身高校生の在籍状況および進路状況」に関する調査票を参照されたい。学校関係者を主

に外国出身生徒の学習指導や生活指導、進路指導に携わる教師（非常勤を含め）と限定した。なお、調査を実施する中、学校から許可を得た上で、在学している生徒にインタビュー調査も併用した。

3-2 方法

3-2-1 質問紙調査と調査方法

2004年9月、検討を重ねて作られた質問調査紙を、「滞日外国人の子どもたちの教育を考える」小委員会のメンバーを経由し、各学校関係者に協力を求めた。回答結果は郵送や後日取りに行く形や、電子メールの利用等多様な方法で受けることにした。2004年10月末までに、計26校から回答を得たが、集計してみると、在籍者数に関する記述は前述した「高教組調査」で得た各校のデータと同じもので、生徒の進路をめぐる質問項目への回答はほとんど未記入のままで戻された。中には「生徒個人情報を保護するため、お答えできません」との趣旨を書いたメモや手紙が同封されたものもある。

3-2-2 聞き取り調査と調査方法

質問紙調査を通して、在籍者数だけが分かったが、入手したデータのうち、特に退学者に関する部分は未回答が目立ち、調査の目的から言うと、失敗に終わったと言わざるを得ない。大規模な質問紙調査を用いて外国人生徒の進路を調査するのにかなり限界があることも思い知らされた。

それがいいきっかけとなり、質問紙調査実施後に電子メールや手紙で礼状を送り、再度学校訪問を懇願した。そのやり取りを通して、各校の教育関係者と徐々にラポールが取れるようになり、その結果、学校訪問やインタビューに応じてくれる協力者が学校数で言うと15校もあった。そこで質問紙調査で分かった在籍者数によって、それぞれの学校状況にあう質問項目を用意し、聞き取り調査に切り替えた。なお、実施する際に、事前に設定した質問項目に拘束されずに聞き取りをする半構造化インタビューを用いたことを強調したい。

聞き取り調査時期：2004年11月8日～2005年2月18日。

(1) 各校を回り、取り出し授業を見学することが許可された場合、授業後に生徒と講師へのグループインタビューをしたり、見学の許可が得られなかった場合、学校の一室で筆者と教員1人といった堅苦しいインタビューをしたりするなど、多種多様である。一校を訪問する時間は最短35分間から最長4時間までまちまちである。

(2) 筆者の知っている退学者と、在学中の生徒に紹介された退学者にインタビュー、そ

の後「いもづる式」で他の退学者をみつけ、調査に協力してもらった。インタビューの場所はゲームセンターや中国人が経営するインターネットカフェ、レストラン、カラオケ店などそれぞれ異なっている。一人あたりの調査時間は1時間から5時間まで協力者の都合によって違っていた。

2005年2月18日現在、調査終了時点で、合計51人がインタビューに応じてくれた。各調査協力者のプロフィールは3章と4章の「調査の結果」をご覧にいただきたいが、その協力者リストの内訳を下記の表4に示した。

表4 調査協力者リスト

①教育関係者		② 在学者	③退学者		合計
専任講師	非常勤講師		高校中退者	進学先中退者★	
12人	12人	10人	9人	8人	51人

★高校を卒業して、いったん進学できたものの、進学先（専門学校や大学）で退学した青年のことを「進学先中退者」と名づけた。

4. 調査の結果(1) — 外国出身生徒の現状

4-1 データから見る外国出身生徒がいる学校の取り組み状況

インタビューに協力してくれた教育関係者24人全員が外国出身生徒の教育問題に熱心に取り込んでいる教員である。専任講師の中に、それぞれの学校で外国人生徒委員会や人権委員会のメンバーである人が多く、彼らは放課後でも多忙な仕事に追われていながら、熱心に外国出身生徒の学習を指導している。非常勤講師の12人は全員が取り出し授業の担当で、言い換えれば、外国人生徒のために特別に雇用された加配教員である。つまり、協力者たちは日々外国出身生徒の生活、学習、進路の指導に携わり、外国出身生徒の教育状況を一番知っている教員集団である。「表5 調査協力者プロフィール①：教育関係者」に非常勤か専任かに分けて、性別、担当教科、年齢、外国出身生徒に指導を携わった指導歴を示してある。

表5 調査協力者プロフィール①：教育関係者

NO	勤務状態	性別	担当教科	年齢	外国出身生徒に指導歴(教職歴)★
T1	非常勤	F	日本語	50代	12年
T2	非常勤	F	日本語	50代	8年
T3	非常勤	F	日本語	50代	8年
T4	非常勤	F	日本語	50代	10年
T5	非常勤	F	日本語	50代	5年
T6	非常勤	F	日本語	50代	5年
T7	非常勤	F	日本語	50代	6年
T8	非常勤	F	日本語	50代	6年
T9	非常勤	F	日本語	50代	7年
T10	非常勤	F	日本語	40代	3年
T11	非常勤	F	日本語	40代	1年
T12	非常勤	M	日本語	30代	3年
T13	専任	F	英語	50代	12年(25年)
T14	専任	F	英語	30代	3年(8年)
T15	専任	F	理科	30代	6年(8年)
T16	専任	M	社会	40代	12年(18年)
T17	専任	M	社会	40代	10年(19年)
T18	専任	M	理科	50代	6年(20年)
T19	専任	M	英語	30代	1年(12年)
T20	専任	M	国語	40代	9年(17年)
T21	専任	M	社会	50代	11年(21年)
T22	専任	M	社会	50代	8年(18年)
T23	専任	M	社会	40代	5年(16年)
T24	専任	M	社会	50代	8年(20年)

24人のデータから県立高校で外国出身生徒に指導を与える教師集団はどんな特徴を持っているか、指導の現状はどうであるかについて、結論を出すのは性急であるが、少なくとも一部の、特に課題集中校や、改革によって改編された新校において、どんな状況であるかを明らかにすることができるであろう。

まず、性別から専任教師と非常勤講師を比較してみると、大きな違いが認められる。それは女性の非常勤講師が圧倒的に多く、それに対して、専任教員は男性のほうが多いことが分かる。さらに非常勤講師に職歴を尋ねてみると、小学校や中学校、高校の国語教諭の

資格を持っている人が多く、結婚や出産を機に元の教職を辞め、家庭に戻った。子育てが一段落して、教職に復帰した時、新たに日本語教育能力試験を通った人もいれば、県教育委員会や諸大学が主催する日本語教育研修を3ヶ月から1年間受けて、今の日本語指導の非常勤という職に就いた人もいる。そういった背景があって、女性非常勤講師は40代後半から50代の占める割合が高い。

次は担当教科から見ると、非常に興味深いことがある。それは非常勤講師が日本語の取り出し授業だけを担当しているのに対して、専任教員は社会科(6人)を始め、英語(3人)、理科(2人)、国語(1人)といった多教科にわたって、指導を行っている。言い換えれば、現場では日本語と国語の指導が違っていることが広範囲に認識され、日本語指導のスキルを持たない専任教員に当てるより、日本語教育能力の高い非常勤講師に任せられている状況であると言えよう。学校によって答えが違っているが、「外国出身生徒が『お客さん』『お荷物』のような存在で、専任教員の時間を無駄にしないために、われわれ非常勤講師に任せることになった」と答えた非常勤講師もいる。

総じてみれば、教育現場では、①日本語取り出し授業が日本語教育能力を持つ非常勤講師に任せられ、②外国出身生徒が抱えている学習困難は広範囲で認識されて、取り出し授業は日本語だけでなく、「社会科」「英語」「理科」の各教科も始められている、という2点にまとめることができるだろう。

本節の冒頭で紹介したように、インタビューに答えてくれた教師24人は全員外国出身生徒のことを熱心に指導する教師であり、外国出身生徒が置かれている状況がよく分かっている教師集団である。非常勤講師からは主に外国出身生徒の日本語学習の困難や取り組みの問題を中心に語られ、専任教員からは各担当教科学習の困難に止まらず、外国出身生徒の受け入れや入学後の対応に関する他の教員の考え方ややり方も話されている。15校の取り組みはそれぞれ異なっているが、大きく2点が共通しているのではないかと思われる。1つは学習の問題であり、1つは受け入れの問題である。次にはそれぞれの節で調査結果を詳しく報告する。

4-2 学習の問題^{注⑨}

まず1つ目の学習の問題であるが、主に4つの方面から語られている。

①高校生向けの日本語教材の不足。

これについてほとんどの日本語取り出し授業の教師から指摘されている。中国語やポルトガル語、スペイン語で書かれている日本語教材に比べ、フィリピン出身生徒への母語で書かれている教材がないと嘆く教師もいた。フィリピンから来ている生徒の場合、「タガログ語」(フィリピン語)や「英語」が通じると思う人が多いが、実際上もっと複雑なようである。1人の教師が私に次のように語ってくれた。

「うちの学校に来日3年未満の外国人出身生徒のために特別な受け入れ枠を設けている。そのお陰でフィリピンから来ている子が受かったんです。日本語で簡単な挨拶とかはできるが、ちょっと難しくなると、もうお手あげです。タガログ語を使っているとわれわれが思い込んで、面談の時タガログ語の通訳に来てもらった。話してみると、その子の第一言語がタガログ語ではないことが判明した。どうサポートしていけばいいか本当に悩んでいる。どこか外国語大学と連携を取れたらなあと思い、幾つかのところを当たってみたが、やはり難しいですね。」

②日本語の指導よりも母語指導の必要性を強く感じている。特に高校3年生に進学や就職に向けて、小論文を書かせる練習をするなかで、母国語指導の重要性が感じられている。これについてインタビュー記録から引用して説明する。

「私は3年生の日本語の取り出し授業を担当している。進学しようとする中国から来た生徒がいるが、受験のために小論文を書かせる練習が欠かせません。しかし、本人が一生懸命書いた作文はほとんど漢語や四字熟語の羅列です。学力はとても高いと思うが、日本語学習に母語による干渉がかなり大きいようです。日本語と中国語を対照しながら、日本語を指導したほうがその子に合う指導法ですが、なかなか日本語教育能力を持つ母語指導者が見つからない。私自身はスペイン語でペルーから来ている子に指導して、その子の日本語が短い期間に上達できたことを経験しているので、中国人生徒にも中国語で指導できたらなあといつも残念に思っている。」

③日本語取り出し授業がどこまで他の教科学習に役に立つのか。外国語学習は非常に時間がかかることが理解されているが、実際の生徒の学習成果になると、日本語取り出し授業の有効性を疑う声も聞かれる。次のインタビューはその気持ちの現れである。

「うちの学校は外国出身生徒を受け入れてもう13年も経っている。日本語の取り出し授業を週に6時間を受けて、試験になると、5段階評価で4や5を取った生徒が、社会科や家庭科、理科、保健体育など他の教科になると、かろうじて合格できたことや、あるいは赤点を付けられて補習を受けてやっと合格できたとかっていう現状です。日本語取り出し授業は本当に他の教科学習に役立っているのか。最近社会科も取り出し授業を始めたんだが、漢字にルビを付けるだけで、取り出しとなるのか。日本語取り出し授業の担当者は各教科の教育能力に欠けて、われわれ教科担当者は日本語指導能力に欠けている。どちらでも専門性が必要とされ、1人で幾つかの教科に関する教育能力を持つのが難しいから、今後の指導はやはり日本語と教科の統合学習が有効になるだろう。」

④生徒の学習意欲をどうすれば引き出せるか。この問題は外国出身生徒を受け入れて10年以上の「経験校」でも、ようやく受け入れ始めた「新受け入れ校」でも、大きいようで、たくさん語られている。

「うちの教職員の中に、一部の管理職を含めて、外国出身生徒を受け入れたがらないですよ。ようやく受け入れ始めて、最初はおとなしい生徒で、まだ良かったが、徐々に受け入れた生徒の数が増えると、よく勉強する子もいれば、授業中騒ぎ出す子もいる。せっかく高校に入れたのだから、もっと勉強しなくちゃいけないのに、勉強もしないし、規則も守らないし、いろんな問題を起す。勉強になると、プリントもなくすやら、シャーペンも持たずに教室に入るやら、母語を使って大声でおしゃべりするやら、傍若無人な態度にいつも腹が立つんです。日本で生活していくならもっと日本語を勉強しなくちゃいけないのに。どうやって彼らの学習意欲を引き出せるか、いつも悩まされている。」

4-3 受け入れの問題—「逆差別」と「平等」

外国出身生徒のために受け入れの門戸を開くかどうかの段階から受け入れた後の対応をめぐり、どの学校でも全ての教職員が必ずしも同じように暖かく歓迎する態度ではないことを、次の2つのインタビューから明らかにされた。

「うちの学校は外国出身生徒を受け入れ始めてまだ2年ですが、未だに外国出身生徒を受け入れるべきかどうか職員会議の時議論される。受け入れに反対する教員は外国出身生徒を3人受け入れたら、3人の日本人の子が落とされるということを意味すると主張している。『これは逆差別じゃないの?』と受け入れに強く反対して、そうなることを非常に危惧しているようですよ。」

「来日3年未満の外国人生徒を受け入れるために、うちの学校では在県外国人枠が設置されたんです。設置するに当たって、それほど明確に反対する意見はなかったが、何人を入れるかを決める時、たくさん議論をしました。5人ぐらいまでと主張する教員から『5人以上を受け入れると、その数に相当する日本人の子が入れないことになるんですよ。日本人生徒の学習権利も保護しなければなりません。まったく考慮せずに、外国出身生徒であれば、全入すると、結果として日本人生徒だけに競争させることになる恐れがある。それは逆差別じゃないか』と強く反対された。それで、外国出身生徒をもっと入れるべきだと主張する教員はその後発言する時、『逆差別の状態にならないよう気をつけなければならない』と決まり文句みたいなことを前提として出してから、その後外国出身生徒の置かれ

ている状況からやはり多く受け入れるべきだと自分の考えを出す。『逆差別』がかなり敏感に受け止められているから、それに勝てる言葉がないんですね。そういった雰囲気の中で、来日して3年を越えた子は一番問題が大きいんですね。試験問題にルビを付けることと、受験時間を少し延長するといったことが考慮されているが、結果からみると、そういった考慮はあまり効き目がないです。他は何もかも日本人の子と同じように競争しなければならないですから。また来日して3年1ヶ月と2年11ヶ月の間にわずか2ヶ月の時間差があるが、日本語力に反映すると両者の差はどれほど開いているのか。3年未満の枠といった理不尽な基準で、3年1ヶ月の生徒が受験に失敗する結果になったんです。そもそも3年というボーダーラインを決めるには何の基準であるかも不明ですよ。外国出身生徒を全入させるか特例措置を設定するか、来日3年未満ではなく、6年未満とさらに期間を拡大するか、それは私の持論です。」

外国出身生徒を受け入れてからの対応について、もう1つ「平等」という言葉が良く使われている。

「私は今担任をしていると同時に、休み時間にクラスの外国出身生徒に教科学習を指導しているんです。とても真面目な子で、日本語さえ上手になればもっと成長するだろうと思うからです。学級教科会議の時、みんなに特別に学習支援をするよと呼びかけたら、『学力の低い日本人の子もいっぱいいるよ。なんで特別に外国出身の子だけを支援しなければならないか。不平等じゃないか。国籍と関係なく、平等に指導しなければいけないよ。日本人の子も一緒に宜しく頼むよ』と逆に注文を付けられた。そういう発言をする人こそ『平等』っていう言葉の響きだけに拘るんです。逆に積極的にやっている人が非難されるんですよ。」

つまり、現場では外国出身生徒を含め、「指導に手がかかる生徒」が他の生徒と同じように「平等」に扱われており、受け入れ段階においても社会的文化的背景を考慮しない「平等」に競争させ、そうしなければ、「逆差別」が生じると危惧する教員が多く存在している。それこそ外国出身生徒の抱える困難を生み出す源ではなかろうか。

5. 調査の結果(2)－退学者が置かれている現状

外国出身生徒のドロップアウトの問題が多く研究者によって様々な方面から指摘されつつも、退学者に対する実態調査は今の段階で見当たらない。研究対象者を探し、協力を求めることが彼らに精神的なプレッシャーを与えてしまうからであると考えられる。本

調査はこういった面で細心の注意をはらった。例えば、フルネーム、住所をあえて尋ねない。退学する前の学校名や来日経緯を語る時に触れた具体的な人名、退学してからのアルバイト先の店名などという固有名を全て仮名にすること。インタビューテープを起した後、記録を本人に見せ、公表に当たって同意を得ることなどである。ちなみに、本報告書で取り上げた事例と「資料 2『女子生徒退学者の語り』インタビュー記録：紅さんと緑さんのケース」はいずれも当事者の同意を得たものである。

1人、また1人、協力者探しかで、大変骨が折れる過程であった。同じ中国というルーツを持ち、同じ中国語が話せるだけで、17人のうち、15人が筆者と初対面であるにもかかわらず、快くインタビューに答えてくれた。記録を見せるために2回目に会った時、筆者からのしつこい質問や追加インタビューにも丁寧に答えてくれた。心から深く感謝する。

5-1 データから見た退学者の状況

インタビューに答えてくれた17人の青年はいずれも17歳から21歳の間で、平均して18.8歳で、在日年数は3年から7年の間、平均して4.4年余である。協力者は2つのグループに分けられ、表6は高校を中退した「高校中退者」で、表7は高校を卒業した後、一旦大学や専門学校に進学できたが、半年足らずで進学先を中退した「進学先中退者」を表すものである。

表6 協力者プロフィール②：高校中退者

NO	年齢	性別	出身地	在日年数 (total)*	出身校タイプ	退学した時期	現在のバイト先
H1	18	F	福建省	3年	単位制総合A校	高2の一学期(5月)	居酒屋+コンビニ
H2	19	M	福建省	4年	全日制普通科B校	2回目の高1二学期(10月)	洋菓子製作問屋
H3	18	F	福建省	4年	定時制C校	高1の2学期(10月)	中華料理屋
H4	18	M	四川省	4年	定時制C校	高1の前期(9月)	無職
H5	19	M	福建省	7年	定時制C校	高1の1学期(9月)	中華料理屋
H6	20	F	吉林省	4年	単位制総合D校	高1の後期(10月)	中華料理屋
H7	17	F	黒竜江省	3年	全日制普通科E校	高1の2学期(10月)	中華料理屋
H8	20	M	北京	6年	定時制F校	高1の2学期(10月)	無職
H9	21	M	上海	6年	定時制F校	高1の2学期(10月)	無職

★H6、H7、H9は初来日年と在日年数(total)が異なっている。なお、H1からH9の番号にしたのが高校(high school)を中退したからである。

中学校を卒業した外国出身生徒の高校進学率が低いことは幾つかの調査によって明らかにされている。例えば、神奈川県教育庁の調べでは、1999年における神奈川県に在住する外国出身生徒の高校進学率は40%程度に止まっている（宮島、2002）が、日本人生徒の高校進学率は2004年度では100%に近い^{注⑩}。特別措置が適用されている中国帰国者生徒にしても、高校進学率は、大阪府では1990年以降の10年間において50%前後である（鍛冶、2000）。こうした厳しい状況に置かれていながら、ようやく県立高校進学に成功した「表6 協力者プロフィール②：高校中退者」の9人は、何故退学に至ったのか、その原因を明らかにする必要がある。

また、9人中8人も高校1年生に在学中の10月までに、退学手続きをしたという。なぜこの時期に中退者が多く出ているのかと協力者に尋ねると、後期または2学期^{注⑩}の授業料が、銀行による自動振込みの日の前に退学手続きをすれば、2学期あるいは後期の授業料が引き落とされないからである。

表7 協力者のプロフィール③：進学先中退者

NO	年齢	性別	出身地	在日年数★	出身校タイプ	退学した時期	バイト先
S1	19	F	上海	5年	私立G大学	大学1年前期	中華料理屋
S2	20	M	福建省	6年	私立H専門学校	1年前期	中華料理屋
S3	18	M	黒竜江省	4年	私立I専門学校	1年前期	中華料理屋
S4	18	M	遼寧省	6年	私立J大学	大学1年前期	中華料理屋
S5	19	M	広西省	3年	私立K大学	大学1年前期	中華雑貨店
S6	20	F	福建省	4年	私立L専門学校	1年前期	中華料理屋
S7	18	F	湖北省	3年	私立M専門学校	1年前期	中華料理屋
S8	20	M	黒竜江省	3年	私立N専門学校	1年前期	焼肉屋

★S1～S8は全員初来日年と在日年数が同じであるから、(total)を付加せず、「在日年数」だけと表示した。つまり、インタビューを実施した時期2004年11月～2005年2月現在から遡り計算すればそれぞれの初来日年となる。なお、S1～S9の番号にしたのが専門学校や大学を退学した student と見なしているからである。

ここで、まず「表7 協力者のプロフィール③：進学先中退者」を本調査で取り扱う理由について説明したい。ひと言でいうと、それは留学のビザで直接に日本に来ている留学生（以下は「直接来日」と略す）と大きく異なっている点があるからである。「直接来日」留学生は一人て明確な留学の目的を持って日本に来たのに対して、「進学先中退者」たちは先に来日した親ないし国際（再）結婚した親の呼び寄せで、あるいは家族全員と同時期に来日した経緯があり、高校にいた頃、「家族滞在」の在留資格で在学している。高校卒業後、彼らは専門学校や大学に進学してから、入管法や各教育機関の規定によって在留資格を「家

族滞在」から「留学」に変更しなければならぬ。そうすることによって、「直接来日」留学生と在留資格上では区別されなくなるが、退学を選んだ後の在留身分では大きく異なっている。「直接来日」留学生の場合は、もしなんらかの理由で専門学校や大学を中退したならば、持っている留学ビザの更新ができなくなり、在日有効期限が切れた後、日本にいられなくなって、中国に戻るかそのまま不法滞在になるか、明暗がはっきり分かれている。しかし、表7のような協力者たちは中退しても、家族が日本にいる限り、家族滞在の在留資格に戻れる。つまり、日本に滞在し続けたいなら、法的な在留問題を犯さずに済むのである。

一見して、在留資格による心配がないように思われがちだが、実際上もっと深刻な問題を抱えている面もある。特に「技能」のビザを持っている父親の心理的なストレスが大きいことを注意したい。一 가족が日本に居続けられるかどうかすべて父親のビザの有効期限の更新にかかってくることになる。そのため、父親たちが厳しい労働条件に置かれて、長時間低賃金の仕事をやらなければならない。福建省福清や長楽、平潭出身者のなかに、ビザの有効期限の更新時になると、家族人数分の手数料を雇い主に支払わないと、入管に出す証明書類がもらえないというケースもあることが調査によって明らかになった。逆に、経済面でも精神面でも莫大なストレスを抱えているのが現状である。親が長時間労働をしなければならないことで、子どもの教育に関わるどころか、コミュニケーションすら取れなくなることも協力者から聞かされている。

さらに、表7のS1～S9は、高校を卒業し、様々な困難を乗り越えて、やっと進学を果たした、いわゆる成功した外国出身生徒と思われる存在であるが、どういう原因で進学先で中退の道を選んだのか、しかも、専門学校や大学を辞めてから、彼らがどのように暮らしているのか、これからの人生をどう送るか、すなわち、過去、現在と将来について不明な点ばかりである。当事者の語りを通して、学校や日本社会、エスニック・コミュニティはどのように彼らを支援しているか、あるいは支援をしていないのかという状況を明らかにしたい。なぜならば、彼らは表6のような高校中退者と同じように、学校を離れても日本の社会を離れるわけではないことから、日本社会でどう位置づけられているかが本人にとっても日本社会にとっても決して軽視できないからである。

次節では、4つの事例を通してこれらの問題の核心に迫っていききたい。

5-2 事例1—高校中退者Aの場合：学校不適応と家庭の貧困による退学

表5で示した協力者の出身地を見てみると、6つの地方から来日したことが分かるが、一番多いのが福建省出身の生徒で4人もいる。学校訪問を許可されたM校では中国出身生徒が34人もいて、そのうち半分近くが福建省出身の生徒である。ここで紹介する事例1の生徒A（番号H2）は実際そのM校を退学したものである。次の記述はインタビュー記

録から引用したものである。

来日から高校受験するまで

A君は2001年2月（中学2年生の3学期）に、弟と一緒に、2年前に来日した両親の呼び寄せで日本に来た。彼は中国で中学3年生だったが、日本に来て日本語が全く分からなかったため、弟と同じクラスの中学2年生に編入された。

「中学に入って、弟と同じクラスに編入されて、大変ショックだった。最初日本に来たのも親に無理矢理に連れてこられたこともあって、まして日本に来て弟と同じクラスに入ったなんて、とんでもない話だった。別に弟と仲が悪いことではないよ。僕は中国にいたら、あと半年間で中学校を卒業できたはずなのに。でも、弟と同じクラスでいいこともあったね。2人一緒に、それほど寂しくなく過ごしたよ。日本語が分からなかったから、よくサボっていた。でも、高校受験のとき、やはり弟より中国で英語や数学をたくさん勉強したから、僕は全日制普通科東高校(仮名)に合格したけど、弟は落ちて、最終的に定時制北高校(仮名)に行った。日本の中学校があまり好きではない。勉強の雰囲気はあまりない。先生も優しすぎて、僕と弟が学校をサボっていてもあまり厳しく叱られなかった。」

高校に入学してから退学するまで

2002年4月に全日制普通科の東高校に入学したが、入学してから日本人の子があまり行きたがらない学校だということを知られた。外国から来ている子が多く、中国出身だけでも30人以上もいた。A君は欠席や遅刻が多く、教科に赤点もあったため、原級留め置きにされ、2回高校1年生となった。退学した時（2004年2月）は2回目の高校1年生だった。

退学しようとして初めて思ったのが最初の1年生の時だった。高校に入って6月中旬頃最初の間テストがあって、4月から受け始めていた日本語の取り出し授業が難しすぎたから、試験に出ても点数がとれないだろうと思って、日本語の試験をサボった。それで、担当の先生から皆の前で「進学できないよ」と言われて、同じ中国から来たほかの子からも「お前、馬鹿か。高校は大学じゃないぞ。大学は4年だけど、高校は普通3年だよ」とからかわれて、学校に行きたくなくなった。その時学校を辞めようとして初めて思った。でも、両親から「学校を辞めちゃ駄目。高校ぐらいは出なさい。」と叱られて、日本語の先生が嫌いだったが、他の先生から励まされて、もう一回チャレンジしようと思い、2回目の高1となった。しかし、父親が癌になって、中国に帰って治療するとかで医療費などが大変高くなりました。生活が大きく変わり、毎日学校を終えてから、バイトをしなければならなくなった。時々朝寝坊して学校をサボったりして、とうとう欠席の数がオーバーになり、成績も悪くて、退学せざるを得なくなった。正直に言って、2回目の1年生の時、学校を辞めようと思ったことが一回もなかったよ。だけどバイトで疲れすぎて、朝の1、2時限の授

業にほとんど出席しなかった。

退学してからの生活の様子

朝から晩までアルバイトをするようになった。母は父の看病で体調を崩して、暫く仕事ができなかった。借金の返済で大変負担を感じて、とにかく毎日朝から晩まで仕事をしなくちゃいけないし、長男として責任を果たしたい。休みの時、時々ゲームセンターに行っ
て遊びますが、金額を決めて遊んでいる。大体 3000 円ぐらいにしている。退学した後、元の同級生たちと時間が合わないから、最近はそれほど連絡を取り合っていない。そもそも僕をからかった連中とそんなに仲良くなかったのも事実だし。特に上海や北京から来たやつに「お前ら福建省出身のやつらはお金しか分からない」とか「福建省は全員密入国」とか、いろいろ貶されたこともあって、付き合いたくもない。でも時々連中の子を羨ましく思う。彼らが日本に来たとき確かにブローカに頼んでいないようだ。福建は違う。正規のビザで来日した人でも、来日してのビザの更新時も、ブローカに頼っている。今の友だちは在学時より少なくなっていて、しかもほとんど同じ福建省出身の人だ。

退学したことを後悔しているか

後悔している。一回目の時頑張れたらよかったのにといつも悔しく思う。今は非常に挫折感が大きくて、心の中で敗者のままだ。日本に来る前に、中国の中学校の先生から「お前は本を読んでいる姿が一番格好いい。頑張れば大学まで行けるよ」と言われたことがあって、その話を忘れられない。このまま中国に戻れないし、戻りたくはない。中国にいた時の同級生は今皆高校を卒業したんだ。父親の病死で中国に帰った時、彼らから「日本に
いるだけで」羨ましがられたが、日本にいる俺はどれほど惨めな気持ちを抱いているか話しても信じてくれない。親父の病気の借金を返した後、少し貯金できたら、もう一回高校に入り、勉強するつもりです。

将来の人生設計は

今は人生のドン底にいるが、将来のことはあまり自信がないです。でも日本にはずっと居たくないと思う。貯金が貯まると、中国に帰るつもりです。中国はビジネスのチャンスが多いといわれているが、どんなビジネスのチャンスがあるか分からない。とにかく貯金
ができれば、かえって企業でも工場でも開くつもり。

以上Aくんの退学した理由をまとめてみると、まず来日動機にすでに問題が生じている。本人の言葉で「親に無理矢理に連れてこられた」。その後、中学校・高校に入っても、勉学意欲が低迷のまま、1 回目の中間テストの時、試験までもサボった出来事があった。担当
教員からの不適切な対応—皆の前で「お前はもう進級できない」と言われたことで、1 回

目の高校1年生を断念してしまった。

5-3 事例2－高校中退者Bの場合：友人の不在と家庭の不幸による退学

#B君との出会いのきっかけ：X君

D校に在学している中国北京出身のX君の紹介で、彼の従兄弟であるB君と知り合った。B君は去年の10月に20歳の誕生日の1週間前、帰化の許可がおりたという。正しく言うと、B君は日本籍を持つ中国北京出身者である。X君もD校を訪問した際に知り合ったばかりの子で、彼の来日経緯や今の学校生活などに関しても私はほとんど知らない。D校の取り出し授業に参加して、担当者から自己紹介するようと言われ、出身地や年齢、来日経緯、今何をしているか、何故今日は見学に来たかを紹介した後、退学した知り合いがいるか、もしいたら紹介してほしいと軽い気持ちで話を付け加えた。その教室には5人の外国出身生徒がいて、ペルー1人、韓国1人、中国3人である。3人の中で2人が福建省出身で、方言で意見を交換するようで、私は聞き取れなかった。X君は非常に喜んでいて、「僕は北京出身で、山東省出身の趙先生と同じ北方人^{bei fang ren}です」と、思いも寄らない歓迎の言葉であった。授業後すぐ携帯電話とメールアドレスを交換した。2人の福建省の生徒にも携帯とメールアドレスを尋ねたが、今使っている携帯が古くなったので、すぐ買い替えをしようと思っているところだとやんわりと断られた。その日の夜、X君が電話をかけてきて、「どうすれば大学に入れるのか」と相談された。世間話をしているうちに、土曜日時間があったら、退学した従兄弟を紹介してあげるといきなり言われて、すぐ待ち合わせの場所と時間を決めたが、私はまだ半信半疑だった。実際に行ってみると、X君とB君がいた。

以下インタビュー記録からB君のことを抜粋する。

B君の来日から高校に入るまで

B君が6年前14歳の時、3年先に来日し日本人と再婚した母の呼び寄せで日本に来た。中学校3年生に編入したが、クラスには外国出身生徒は彼しかいなかった。日本語も分からなくて毎日非常に辛かった。母の再婚相手が正式な仕事を持っておらず、居酒屋でパートをする母の収入で家計を支えていた。しかも、再婚相手がしょっちゅうお小遣いを母から強要し、それは全部パチンコに使い込んでいた。B君は学校に馴染まず、母と離れていた3年間の母の在日生活への幻想をこの目で見て、不幸であることが分かった。あっという間に中学を卒業して、全日制普通科のO高校を受験してみたが、失敗した。中国の祖母の家に戻ろうと考えたが、母から「帰化の申請が許可されたら、その日本人と離婚するつもりです」と言われたことを契機に、母のために日本に残ることに変えた。「俺一人が中国に戻ったら、お母さんはあまりにも可哀想。お母さんは先に（中国にいる実の）お父さんと離婚すると言い出して、離婚したから、もう中国に帰られなくなったと言った。俺は帰

化がおきるまで日本にいてあげると思った」。それで定時制 F 高校を受験し、定員割れの状況だったので、F 高校に入学した。

高校に入学してから退学するまで

F 校に入り、相変わらず孤独な学校生活を過ごしていた。昼のバイトを探したが、なかなか見つからず、結局夜のバイトをするようになり、6 月頃退学届けを出した。高校に対する印象は薄くて、あまり覚えていないという。

退学してからの生活の様子

退学してから、母と同じ居酒屋で働くようになった。タバコにもお酒にも手を出した。母から「このまま日本にいるとお前が壊されちゃうから、中国に帰れ」と頼まれた。その時バイト先で、B 君より 6 歳も上の日本人女性と付き合うようになって、暫くは彼女のアパートで同棲した。その後どんな原因で喧嘩になったか忘れたが、バイトをやめることにした。中国に一時帰国しようとしたら、インターネットカフェで知り合ったオーバーステータの人から「中国に残された息子が手術を受けるそうで、手術費用の 200 万円を渡してくれないか。謝礼を出すから」と頼まれ、5 万円のお小遣いをくれた。

「俺はお金を渡すだけだ。他のブツ^注に一切手を出さない。」

そのほかに、国際結婚をした日本人を連れて北京だけではなく、中国全国を旅行するようになった。その中から手数料を取っている。X 君の日本人のお父さんがかつて彼の客であった。

「退学して別に後悔したりしなかったよ。今仕事は順調だし、国籍が日本だから、そろそろ自分の事務所を持ちたい」と、こう言いながらタバコを優雅に吸っていた。「だけど、お前（側に座っている X 君を指差して）は絶対大学に入ろう。国際結婚の斡旋にしても、お金の渡し役にしても、正々堂々とした仕事じゃない。俺はもう将来ないから」と、まだ 20 歳になったばかりの若者がこのように従兄弟の X 君を励ましたのである。

将来の人生設計は

将来のことはよく分からない。

B 君は日本で過ごした 6 年を淡々と語り、「高校に対する印象は薄くて、あまり覚えていない」と言った。どうやって国際結婚斡旋所の仕事に就いたか、お金の運び屋の仕事にどうやって就いたか、本人は口が堅かった。「先生、X 君頼んだぞ。時々学校に行きたがらないけど、叱ってやってよ」と頼まれた。「いいえ、X 君の学校の先生じゃないの」と説明すると、「彼の先生と知り合いでしょう。先生も名門大学で勉強しているし、ひとつ宜しく頼む。」と頭を下げられた。

5-4 事例3—進学先中退者Cの場合：私立大学で人生の目標を失った

#Cさんの来日から高校に入るまで

Cさんは表6の番号で言うとS1、5年前に上海から来た女の子である。父親は来日するまで中華料理のコックとしてドイツで8年間も滞在したことがある。父親がドイツに出稼ぎに行った8年の間、Cとお母さんが上海にいたが、Cの話では「お父さんが稼いだお金で、上海にいた頃かなり豊かな生活を送っていた」という。しかし不幸にも父親が上海に戻り、買ったばかりのマンションが火事になって、何もかも焼けてしまった。そのため、父親が友人に頼み、来日したという。4年後の2000年1月にCと母親が来日し、ようやく家族と一緒に生活をするようになったが、Cは父親と一緒に暮らしたことをあまり覚えてなくて、いつも家に戻りたくなかったと来日当初のころを思い出しながら語ってくれた。

上海で重点中学校に通っていたお陰で、数学も英語も日本に来てからも得意な教科となった。中3に編入され、県立高校の中で上位ランクにあるS高校を受験したとき、受験科目の英語と数学はほぼ満点を取ったことがいまでも伝説のような話としてS校に残っている。国語の日本語はさすがに一年しか勉強しなかったため、点数が低かったが、結果は進学校S校に入った。

#高校生活の回顧

S高校に入り、周りに「頭がいい子」ばかりで、Cさんは次第に成績が悪くなってきた。だんだん日本語力が高くなってきたが、授業中先生の日本語を聞いて、「日本語だけ」が分かるようになったが、話した「内容」がますます分からなくなった。上海にいた時、小さい頃に習っていたピアノはS高校に入るまでいつも回りの仲間たちから羨ましがられていたが、日本に来て狭いマンションに住んで、ピアノどころか、ピアノ教室さえ通えなくなった。Cの話引用すると、「S校に入ってから、美しい白鳥から徐々にみにくいアヒルの子に化けた」。日本の生活に慣れないのは彼女だけではなく、母親も同じだった。長年上海でお金持ちの生活を送った母親が日本に来て、皿洗いの仕事しかできなくて、フラストレーションを感じ、ストレスがどんどんたまっていた。夫と長年別居生活を送ったせいか、夫からも同情を得ずに、よく夫婦喧嘩もするようになった。

こうした中で3年が過ぎて、Cは何とか高校を卒業した。希望した3つの大学を受験したが、いずれも失敗に終わって、滑り止めのつもりで応募した私立G大学にようやく入り、本当の滑り止めとなった。

#大学に入学してから退学するまでの生活の様子

G大学に入って、喜べないCであった。その理由は2つある。1つは入学金と授業料が

とても高く、大学に入るまであれほど大学まで行かせたいと強く言った両親からしきりにお金のことを言われるようになったのである。これは恐らくどの大学、私立であればみんなそうであるが、別に G 大学の事情だけではないようである。2 つ目は、G 大学特有の雰囲気馴染まなかったからである。積極的に周りの日本人の女子学生と付き合いおうとしたが、話題はいつもブランド品のファッションや持ち物だけで、C がそれに全く興味のないため、結局日本人の友だちが作れなかった。中国から来た留学生もいるが、学費を払うために毎日バイト漬けで、学校で会うたびに、バイト先のことやお金のことを聞かされて、C は彼らとも仲良くなれなかった。C はだんだんと何のために大学に行きたいと思ったか分からなくなって、親と相談して、夏休みに入る前に大学を辞めた。

将来の人生設計は

どうすればいいかよく分からない。大学を辞めてから 5 年ぶりに一家揃って上海に一時帰った。上海の変化に目を見張る家族 3 人だった。日本に戻り、母親の愚痴がなくなり、父親も C や母親のことを叱らなくなった。とにかく仕事をして、上海でマンションと車を買えるお金を貯めておこうというのが家族の目標。C は自分の人生がどうなるか分からないと言っている。「時々とても悲しくなるんです。40 代後半の親と同じ目標に向かって頑張っている自分は情けなく感じちゃうんです。私はまだ 19 歳だよ。もう 40 代後半の親と同じように後半生のことを準備するって、空しい」と、C がこう語っている時、だんだん頭が下向くように下がった。

5-5 事例 4—進学先中退者 D の場合：「インターネット中毒」

D 君の来日から高校に入るまで

D 君は表 6 の番号で言うと、S3 で、黒竜江省から来た 18 歳の朝鮮族の男子生徒である。4 年前に来日して、全日制（単位制）総合 J 高校の編入試験に合格して、2001 年 5 月 31 日付で高校 1 年生になった。D 君の両親は先に来日したが、日本に来てから、また女兒を 1 人設けた。D 君は両親と離れて 4 年経て再会した。

高校生活の回顧

J 校には外国出身生徒が 8 人いた。中に中国出身生徒が 4 人で、いずれも男の子である。最初の頃は仲良く遊んでいたが、D 君は中国語の普通話（標準語、俗に北京語と呼ばれる）が上手ではないこともあり、黙り込むことが多かった。うるさく騒ぐ他の 3 人と比べて、静かな性格で、あまり大声を出さない D 君が次第に取り出し授業の教師らに評価されるようになった。しかし、それが仲間割れの原因ともなった。夏休みが明けてから、D 君が 1 人で取り残され、他の 3 人が一緒に行動するようになり、D 君は学校に行くのがいやにな

った。両親に学校でのことを言ったら、男の子なのに、女の子みたいに弱音を吐くなど逆に叱られた。一年生の11月まるきり一ヶ月も学校に行ってなかった。毎日制服を着て、朝ご飯を食べて、「行ってきます」と告げ、家を出る。午後4時までY駅の近くにある中国人が経営するインターネットカフェでパソコンゲームをしたり、チャットで知らない人とおしゃべりをしたりして時間をつぶした。そして午後5時前に家に帰り、晩ご飯を食べながら自分の部屋にこもり、昼間に借りた中国語の武勇伝小説や韓国語の恋愛小説などを読み、親に登校していないことを黙っていた。

しかし、その後担任が家庭訪問をしたことで不登校であることがばれた。その時、欠席日数だけでも既に進級が危なくなると警告された。それで母親が毎朝学校に送り届け、月に1日、息子が出席する教科の授業見学をさせてもらい、D君は母親の愛情を独占できて、何とかして踏ん張って、無事に2年生に進級した。

こうした一連の騒動を起し、教員から「D君は手がかかる子だ」との認識が広がった。それとは裏腹に他の3人の中国人生徒に仲間として認められ、一緒に規則を破るようになった。2年生だけでもタバコの所持や飲酒による謹慎を3回も受け、欠席や遅刻した数はギリギリまでに達して、結局赤点を付けられた教科までもあり、補習を受けて、ようやく3年生にあがった。

3年生にあがっても、一向にも改善を見せず、放課後すぐインターネットカフェにもぐり、ゲームやチャットに熱中した。他の3人の中国人生徒が逆に真面目になり、進学に向けて頑張っていたが、D君は2年生の時と同じように過ごしていた。喫煙したことで謹慎を受け、欠席や遅刻した数はギリギリまで達して、卒業試験をなんとかして通って、無事に高校を卒業した。卒業式が終わってから、進学したいと言い出して、慌てて私立I専門学校に願書を出し、パソコンプログラマー養成コースに進学した。

I 専門学校に進学した時から退学になるまで

他の3人が進学したから、D君も慌てて進学しようと考え、草卒にI専門学校にした。3年間ずっとインターネットカフェに浸かっていたことから「おれはパソコンが好きだ」と思い込んでいた。実際に専門学校に入ってみると、パソコンゲームやチャットを楽しむユーザと全然違う世界で、3年間真面目に勉強したことがないD君にとって、勉強が難解な呪文を解くより難しかった。2ヶ月ほど通い、すぐ退学した。

退学してからの生活の様子

退学してすべての時間をインターネットカフェに使い込んだ。両親から独立生計をするよう厳しく叱責され、父親の友人が経営する中華料理屋でアルバイトをするようになった。現在は朝11時から午後4時までインターネットカフェで時間をつぶし、4時半から夜10時半まで中華料理屋でバイトをする。友達はすべてインターネットカフェで知り合った「同

類」で、神奈川県一円どこの店に新しいパソコンゲームが取り入れられたかに関する情報をお互いに頻繁に交換している。因みに私と D 君との出会いは H3 の紹介で H7 へのインタビューに成功、H7 の紹介で S3 の D 君と知り合い、彼は快くインタビューに答えてくれた。

将来の人生設計は

あまり深く考えていない。高校を卒業してから高校時代の先生たちやその時の友人と連絡を取っていない。今はたくさん友人がいて、毎日楽しく過ごしている。バイト代はきちんと親に渡しているから、以前ほど煩くは言われていない。「我今天快活就行了」=今日は楽しく過ごせばもう十分に満足していると、何回も繰り返した。

事例 4 の D 君のケースでは青年期の自我発達上の危機状態に置かれているのが明らかである。退学後、バイト先とインターネットカフェに固定され、両親は彼の状況を変えようと悩みつつも、適切な支援ができていない。インターネットにはまってしまった状態が高校にいた頃から既に発生しているにもかかわらず、謹慎や補習といった手段だけを使用し、彼の心の奥にある悩みを解こうとしなかった。つまり、学校にいた頃抱えていた問題は卒業と同時に、高校から専門学校へと移動した。進学先での退学を経て、さらに社会や家庭の中へと拡大した。

6. 考察

外国出身生徒のドロップアウトの問題が日本社会から多く関心を集めている。多くの研究や調査によって指摘されつつも、残された課題が多く存在する。ここでは宮島(2002)の研究を紹介しておく。宮島(2002)は神奈川県に在住する南米系 4 人、インドシナ系 5 人、東アジア系 1 人の中学生・高校生 10 人を対象にインタビューし、それをもとに、子どもたちの就学行動や学習態度に及ぼす社会的、文化的諸条件の影響を、文化社会学的アプローチで分析した。その結果、「移民マイノリティの示す適応の戦略は、能力、コスト、そして周囲の差別的反応などに制約され、ほとんど一時しのぎ的に『切り抜ける』という選択に向かいがちである。中卒、さらには中学中退の就職もそれであろう」と指摘している(p140)。

今回の調査で 17 人の退学者へのインタビューに成功して、彼らの「声」をどのように解釈すればいいかは大きな課題である。17 人から聞き取った分厚いインタビュー記録を繰り返して読んでいるうちに、「学業不振とその原因帰属について」「居場所としての学校の意義について」「青年期における生徒の内面的世界について」という 3 つの方面から探る

ことにしたいと思う。

6-1 学業不振とその原因帰属について

4つの事例で示されたように、退学になった理由がそれぞれ異なっているが、共通しているのが4人とも学力の低さである。その背景となったのは厳しい雇用状況におかれている親たちが、子どもたちの教育に十分関与できないのが現状であり、学校に行くことが「子ども任せ」となっている。志水（1991：138）は学校文化からの脱落と捉える視点から不登校現象を考察している。『学校で努力する』ことを放棄する確率が高い『家庭的にしんどい』生徒たちのさまざまな理由による欠席を、「学校や授業の形式、それらをひっくり返して学校文化」と合わずに脱落＝ドロップアウトしていくと指摘している。

事例1のA君のケースはこれに当てはまる。A君は来日動機がないまま親の都合で「連れてこられ」、そこから学校への不適応が生じたと思われる。日本語中間テストをサボり、担当教師から進級できないと乱暴な結論をつけられ、一気に不登校の状態に走った。2回目の高校1年生をスタートさせてから、もう一回がんばろうと誓った矢先に、父親の病気で一家が借金地獄に陥り、働かざるを得なくなり、高校を中退した。家庭が彼の勉学を支える存在ではなく、貧困問題が彼の退学という結果を生んだ。

また事例3のCさんのケースは越境によって社会地位の下降を表した事例とも言える。父親のドイツでの稼ぎによって、母親とCは上海に優雅な生活を享受した。ところが、火事に焼かれ、何もかも無くした。一家3人は新しいドリームを追求するために来日し、中国の重点中学校で身につけた学力でCさんが進学校であるS高校に入ることに成功した。しかし、やはり日本語力が不十分なため、他の教科学習にも支障をきたし、3年の間、Cは「進学校でのおちこぼれ」という劣等感を抱いていた。何とかして私立大学にも進学できたが、回りの同級生と親しくなれず、学習も十分にできていない。なんのために大学に入ったか、大学に入ってから人生の目標を失ったと感じ、大学を中退することにした。

6-2 居場所としての学校の意義について

異質性を持っている外国出身生徒の特徴から学校は彼らにとってただ受動的に適応するところではなく、自らが生きるための手段としての日本語能力を高める場でもあれば、大学への進学やホスト社会への進出のステップとしての重要な場でもあり、異文化環境で成長していく重要な人生の通過点でもある。しかし、そこで失敗して学校を去っていくことになる、日本社会の一員になるために準備する重要な場を失うことになる。

例えば、事例2のB君は既に社会の「非行」集団になりつつある。彼は日本人男性と再婚した母を持ち、学校で友人がいないことで、絶大な孤独感を味わうことになった。友人

の不在が彼の退学をもたらした一番の要因だと思われる。退学した後の生活の様子をみると、彼が非常に危ない状況に置かれているのがはっきりとなった。オーバースターの人のためにお金を運んだり、偽装国際結婚も生じうる国際結婚斡旋所のスタッフをしたり、反社会的行為を繰り返し、既に危険を冒している。外国人犯罪をむやみに拡大宣伝するマスコミから中国籍より日本籍を取得したほうが保護色になると判断して、帰化の道を選んだ。しかし、インタビュー中、余計なことを一切話さないように警戒したB君の様子から、内心に抱えるストレスや恐怖感の大きさも想像できる。こういったケースは今回1例しか取材できなかったが、実情では多く存在しているに違いないだろう。外国出身の子どもたちにとって、学校に入り、学習を継続しつづけることは、居場所としての意義が大きいことが明確にされた。

なお、17人の退学者は退学後元の高校と連絡を保っているのかとの質問に、H1が保っていると答えた以外に、16人も「恥ずかしいから、連絡をしていない」と言っていた。つまり、退学が社会の重要なネットワークを自ら絶つことも意味する。日本語力が足りない外国出身青年たちは日本の社会に住んでいながら、日本の社会の情報を保有しないということが考えられよう。

6-3 青年期における生徒の内的世界について

17人の退学者はいずれも退学といった非社会的行為を取った青年である。越境することが彼にとって何を意味するかインタビューを通してその困難が想像以上大きかったことが分かった。中でも一番の印象に残ったことは、「将来の人生設計」という質問に対する答えである。大半の人はしばらく沈黙をして、口を濁しながら、「将来のことを考えたことがないから、よく分からない」と答えた。それは彼らがアイデンティティの揺らぎを経験しているという結論を出すには、1回か2回だけの聞き取りでは難しい。しかし一方、重要な課題とされる青年期(Erikson, 1959)に異文化間移動を経験することは、二重の意味で自分の存在の基盤を失う危険性が増すこととなる。つまり、青年は、大人社会と子ども社会の間で、さらには、1つの文化と別の文化の間で、自らの存在の基盤を現実社会の中の見出すのかという、課題の解決を迫られている(小澤、2001)。17人の退学者は来日に当たって既に危機が生じ、さらに滞日の長期化につれて、退学という大きな危機に直面することになった。彼らがどのようにそれぞれの危機を克服していくのかは当事者だけの課題ではなく、日本社会に対しても大きな課題を与えている。

7. まとめ

「われわれは労働力を呼び入れたつもりだったが、やって来たのは人間だった」。これはトルコ人移民の増加が社会問題化した頃の旧西ドイツで発せられた言葉である。日本も急増する外国人労働者および家族が問題を多く抱えている。社会の各方面から関心を集められているなか、まず実現させなければならないのは外国出身生徒に学校の門を広くすることである。そして、在学している子どもだけではなく、社会から受けられる支援の少ない退学した子どもたちのことも、今後多くサポートしていかなければならない。退学者に生涯学習ができるような環境を作るのが大事であることは言うまでもなからう。

謝辞：

お忙しい中、貴重な時間を割いて、調査に協力していただいたすべての協力者の皆様に心から感謝する。また、財団法人社会安全研究財団研究主幹渡辺昭一様に日本語の添削をしていただいた。記して感謝したい。ただし、すべての誤りは筆者が負う。

注

- 1 小沢(1993)は、戦前からの在日中国人、在日朝鮮人を「オールドカマー」と呼び、それに対して、1970年代からの中国引揚者、インドシナ難民、80年代に急増した外国人労働者、アジアの花嫁たちを「ニューカマー」と呼んでいる。
- 2 文部科学省によって毎年実施されている「学校基本調査」に、公立学校における外国人の子どもの数が書かれている。しかし、外国人の子どもの不就学状況に関する全国的な調査はまだ実施されていない。最新の動きとしては、asahi.com(2004.9.25)「外国人の子、不就学調査 文科省が戸別訪問で把握」という記事から引用して説明する。「日本に滞在する外国人の定住化が進む一方で、学校に通っていない多数の不就学児童・生徒がいることから、文部科学省は初の実態調査に乗り出すことを決めた。外国人については就学義務がないが、国際条約で日本も批准する「子どもの権利条約」上も教育の機会を確保させることは大きな課題になっていた。同省は、外国人が多く居住する全国 28 の自治体を選んで戸別訪問をして実態を把握する方針で、来年度予算の概算要求に 4700 万円を計上した。」
- 3 詳細は趙 2005 のレビューをご参照いただきたい。
- 4 発達過程における青年期を、「青年前期(思春期)・中期・後期(成人への移行期)を含む生物学的、社会文化的成長の一時期(『発達心理辞典』1995)」と捉え、「こども」を思春期前のものとし、「青年」を 11~12 歳から 22~23 歳前後のものと想定する。

- 5 後者について、近年日本全国各自治体のニューカマーの高校進学率に関する調査データから裏付けることができよう。例えば、神奈川県教育庁の調べでは、神奈川県に在住するニューカマーの1999年の高校進学率は4割程度である(宮島、2002)。また、中国帰国者生徒の高校進学率に関しても、鍛冶(2000)の調査では、1990年以降の10年間5割前後を推移していると指摘されている。鍛冶(2000)と宮島(2002)の研究に先立ち、日本におけるニューカマーの子どもたちの学力について、「もし何らかの方法でその実態が把握されるなら、間違いなく彼らの『低学力』が深刻な問題として認識されるようになることであろう」との志水(1999: 10)の指摘があり、ニューカマー子女の学業不振の問題が徐々に注目されるようになってきている。
- 6 安場 淳「各都道府県による“中国帰国生徒・外国人生徒”の進学保障の現状－公立高校の入試特別措置の設置状況についての調査報告」<http://www.kikokusha-center.or.jp/resource/ronbun/kijo/10/1-30.pdf>を参照されたい。
なお、神奈川県を例にすると、2005年度在県枠が設置されている高校は神奈川県立ひばりが丘高等学校、神奈川総合高等学校と鶴見総合高校、橋本高等学校、有馬高等学校、横浜市立横浜商業の6校である。詳しくは<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/kokokyoiku/kenritu/nyusen/kijun/tokubetsu.htm>を参照されたい。
- 7 「出入国管理及び難民認定法」の改正が施行されたことなどにより日系人を含む外国人の滞日が増加し、これらの外国人に同伴される子どもが増加したことに契機に、文部科学省(旧文部省)が1991年度より隔年で、1999年度から毎年で、日本全国の公立小・中学校を対象に、日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査を行ってきた。高等学校は1995年度から、盲・聾・養護学校は1999年度から調査を実施するようになった。ここで注意したいのは、この調査は日本語指導が必要な児童・生徒に限定しているために、ある程度の滞在期間を過ぎて、日本語指導が必要でないと判断された子どもたちは含まれないため、外国人の子どもたちの総数を把握することはできないことである。
- 8 入試による選抜を通過しなければならない高校において受入れ校が増加している理由として、文部科学省(2000)は「① 高等学校入試における外国人生徒への特別選抜枠等の便宜が図られていること(1999年度17都府県海外子女教育課調べ)。② 一般入試により入学できる程度の日本語力を習得している生徒が増えたこと。しかしながら、その場合でも高等学校での教科学習において日本語指導が必要な生徒がいること」と分析している。詳しくは「1999年度日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査結果概要」文部科学省助成局海外子女教育課(2000年5月現在)。http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/12/06/t1.pdfを参照されたい。
- 9 外国出身生徒が抱える具体的な学習困難に関して、趙(2005b)の論文を参照されたい。

- 10 神奈川県教育庁が公表されたデータによると、平成 16 年度の県立高校進学率は学科別当初募集定員全日制は 99.3%で、定時制は 99.0%に達しているという。詳しくは <http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/kyoikukeiri/chosa/kntoukei.html> を参照されたい。
- 11 学校によって、2 期制（前期：4 月～9 月 30 日、後期：10 月～翌年 3 月）か 3 期制（1 学期：4 月～7 月、2 学期：9 月～12 月、3 学期：1 月～3 月）が実施されている。最近小中学校でも 2 期制に変更した学校が増えている。
- 12 B 君は高校退学者 9 人の中で、唯一日本語の中に中国語混じりで私のインタビューに答えてくれた人である。他の 8 人はほとんど逆で、つまり中国語の中に日本語混じりでインタビューに答えた。B 君の口から「ブツ」との言葉が出た時、私は聞き取れなくて、「え、ブーツ」と聞き返したら、中国語で「菓物の略よ」と淡々と教えてくれた。

<参考・引用文献>

- 阿久澤真理子 1998「マイノリティの子どもたちと教育」中川明編『マイノリティの子どもたち』明石書店 88-116
- 朝倉景樹 1995『登校拒否のエスノグラフィー』彩流社
- 榎井縁 2000「新しい外国人・ニューカマーの子どもの日本語・母語指導について：公立高等学校での受け入れを中心に」山本雅代編著『日本のバイリンガル教育』明石書店 128-164
- 広崎純子 2002「都立高校におけるニューカマー生徒への対応」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』9号 35-45
- 広田康生・藤原法子 1994「外国人児童・生徒のアイデンティティの行方」奥田道大・広田康生・田嶋淳子編著『外国人居住者と日本の地域社会』明石書店 258-303
- 保坂亨 1999「不登校の実態調査：類型分類の観点から」『千葉大学教育学部研究紀要』47(1) 7-18
- 保坂亨 2000『学校を欠席する子どもたち一長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会
- 稲村博 1994『不登校の研究』新曜社
- E.H.Erikson, 1959 “Identity and the Life Cycle” 小此木啓吾（訳編）1973『自我同一性』誠信書房
- 鍛冶致 2000「中国帰国生徒高校進学・言語・文化・民族・階級」蘭信三編『「中国帰国者」の生活世界』行路社 233-290

- 金井香里 2004 「日本におけるマイノリティの学業不振をめぐる議論」『文部科学省 21 世紀 COE プログラム Working Paper』 Vol. 10, 東京大学大学院教育学研究科 基礎学力研究開発センター
- 近藤邦夫 1994 『教師と子どもの関係づくり—学校の臨床心理学』 東京大学出版会
- 久保武・西村秀明 1993 『不登校の再検討：思春期精神保健活動からの報告』 教育史料出版会
- 宮島喬 2002 「就学とその挫折における文化資本と動機付けの問題」 宮島喬・加納弘勝編『国際社会 2 変容する日本社会と文化』 東京大学出版社 119-144
- 森田洋司 1991 『「不登校」現象の社会学』 学文社
- 長尾博 1999 「青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因」『教育心理学研究』 第 47 巻第 2 号 141-149
- 小澤理恵 2001 「異文化間移動に伴うアイデンティティの形成」 東京学芸大学海外子女教育センター 『異文化との共生をめざす教育』 203-219
- 小沢有作 1993 「民族共生の地域づくりへ」『月刊社会教育』 1 月号 p5
- 太田晴雄 2000 『ニューカマーの子どもと日本の学校』 国際書院
- 佐藤郡衛 1998 「在日外国人児童・生徒の異文化適応とその教育」 江淵一公編著『トランスカルチュラリズムの研究』 明石書店 479-497
- 佐藤郡衛 2001 『国際理解教育—多文化共生社会の学校づくり』 明石書店
- 関口知子 2003 在日日系ブラジル人の子どもたち—異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成 明石書店
- 志賀幹郎 1992 「高等学校における中国帰国生徒の統合—日本語教育を手がかりにして—」『東京大学大学院教育学研究科紀要 32』 295-303
- 志水宏吉・徳田構造（編） 1991 『よみがえれ公立中学校：尼崎市立[南]中学校のエスノグラフィ』 有信堂
- 志水宏吉 2000 「裏側のニッポン—日系南米人の出稼ぎと学校教育」『教育社会学研究 66』 21-40
- 志水宏吉 2002 「学校世界の多文化化」 宮島喬・加納弘勝編『国際社会 2 変容する日本社会と文化』 東京大学出版社 69-92
- 志水宏吉 2004 「ニューカマーの子どもたちに対する教育支援を考える—」『教育コミュニティ』 構築に向けて— 研究代表者：志水宏吉 平成 14 ～15 年度科学研究費補助金研究成果報告書『ニューカマーの子どもたちの教育支援に関する研究—教育ネットワーク構築の視点から』 1-10
- 清水睦美・小澤浩明・田房由起子・福島裕敏 1999 「インドシナ系ニューカマーの家族関係と学校適応」 日本教育社会学会第 51 回大会

- 志水宏吉・清水睦美編著 2001『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店
- 鈴木久美子 1997「公立学校における外国人児童生徒教育」『応用社会学研究 39』109-128
- 鈴木久美子 1999「地域の多民族化・多国籍化と学校」『都市問題』90-5
- 恒吉僚子 1996「多文化共存時代の日本の学校文化」堀尾輝久ほか編『講座学校 6 学校文化という磁場』柏書房 215-240
- 恒吉僚子 1998「ニューカマーの子どもと日本の教育」佐伯胖他編『国際化時代の教育』岩波書店 182-202
- 渡辺雅子 1995『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人(上)論文編<就労と生活>』明石書店
- 渡辺雅子・石川雅典・小嶋茂・小林本多ちえみエレナ 2000「在日ブラジル人児童生徒の教育の実態と課題」『明治学院大学社会学部附属研究所年報 30』65-82
- 趙衛国 2004「公立高校に在籍する外国人高校生の学校適応に関する事例研究—日本人教師の関わりとの相互作用に注目して—」研究代表者：志水宏吉 平成 14 ～15 年度科学研究費補助金研究成果報告書『ニューカマーの子どもたちの教育支援に関する研究—教育ネットワーク構築の視点から』101-123
- 趙衛国 2005a 「青年期におけるニューカマーの子どもたちの学校適応に関する研究動向—文化受容と援助の視点から—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 44 巻 311-319
- 趙衛国 2005b「外国から来た生徒の学習上の困難—「家庭科」の学習支援を通して—」『全外教研究紀要』

8. 資料

#資料1 「滞日外国出身高校生の在籍状況および進路状況」に関する調査

「滞日外国出身高校生の在籍状況および進路状況」に関する調査協力をお願い

初秋の候、先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

近年、ニューカマーと呼ばれている在日外国人の長期在籍者の増加と、高等学校の外国出身生徒の受け入れ校が大幅に増えたことにより、ニューカマーの高校生が著しく増加してきております。

在日外国人子女の教育問題において、これまで研究会や団体によって多くの実践記録や報告がなされてきましたが、残念なことに小・中学生を中心に行われているものが多く、滞日外国出身高校生（以下「滞日生」と略す）の現状をめぐる調査はほとんど行われていません。そこで、私たち神奈川県高等学校教職員組合合同小委注は、滞日生の現状を把握するために、在籍人数・出身国・滞日期间と在籍および進路の状況について、皆様のご協力のもとに調査を行いたいと考えました。

現在、皆様が抱えていらっしゃる問題点、また滞日生たちが直面している問題を調査することにより、今後のご指導の一助となれば、と考えております。滞日生の現状を把握するための調査で、生徒やご回答者に不利を与えることは一切ございません。また、調査の結果につきましては、教職員組合レポートの形で皆様にご報告させていただきます。ご多忙中のところ誠に申し訳ありませんが、趣旨をご理解いただき、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、滞日生の在籍状況を想定して、3種類の調査票をご用意致しました。

調査票A：最近5年間外国出身生徒を受け入れていなかった学校

調査票B：2004年度外国出身生徒の在籍者がいないが、最近5年間いた学校

調査票C：2004年度現在外国出身生徒の在籍者がいる学校

貴校の状況をご確認のうえ、該当する調査票にご記入願います。

ご不明な点につきましては、以下の連絡先までご一報いただければ幸甚です。

（調査が既に終了したので、連絡先を省略させていただきます）

調査票 A

「滞日外国出身高校生の在籍状況および進路状況」に関する調査

（最近5年間外国出身生徒を受け入れていなかった学校）

問1. 学校形態 1.全日制 2.定時制 3.通信制

問 2. 設立年次（ ）年

問 3. 全校生徒数は（ ）人。男子生徒は（ ）人、女子生徒は（ ）人。

問 3. 最近 5 年間に外国出身生徒を受け入れなかった理由

以下のうち、該当するものをすべてに○を付けて下さい。該当するものがない場合は、6.の空欄に自由に記入してください。

1. 滞日生の入学希望者がいなかったため。
2. 滞日生の入学希望者がいたものの、学力検査に合格できなかったため。
3. 滞日生の入学希望者がいたものの、面接に合格できなかったため。
4. 滞日生を積極的に受け入れようとしなかったため。
5. 滞日生を受け入れようとしたが、特例枠を設けていなかった。
6. その他

問 4. 滞日生が一部の高校で増加していることについて、どのようにお考えですか。

(数行空欄)

以上、質問は終わりました。どうもありがとうございました。調査の結果について改めてご報告させていただきます。

調査票 B

「滞日外国出身高校生の在籍状況および進路状況」に関する調査
(2004 年度現在在籍者はいないが、最近 5 年間に外国出身生徒がいた学校)

問 1. 学校形態 1. 全日制 2. 定時制 3. 通信制

問 2. 設立年次（ ）年

問 3. 2004 年度全校生徒数は（ ）人。うち、男子（ ）人、女子（ ）人。

問 4. 2003 年度まで過去 5 年間の滞日生徒在籍状況

2003 年度 滞日生徒数（ ）人。うち、男子（ ）人、女子（ ）人

2002 年度 滞日生徒数（ ）人。うち、男子（ ）人、女子（ ）人

2001 年度 滞日生徒数（ ）人。うち、男子（ ）人、女子（ ）人

2000 年度 滞日生徒数（ ）人。うち、男子（ ）人、女子（ ）人

1999 年度 滞日生徒数（ ）人。うち、男子（ ）人、女子（ ）人

問 5. 過去 5 年間の在籍者の出身について聞きます。下記の国以外の場合はお手数ですが、

⑭からの空欄に国名を記入してください。

〇〇国から来ていた	生徒数 (人)	男子 (人)	女子 (人)
①中国			
②ブラジル			
③ペルー			

④パラグアイ			
⑤アルゼンチン			
⑥コロンビア			
⑦フィリピン			
⑧韓国			
⑨ベトナム			
⑩タイ			
⑪モンゴル			
⑫インドネシア			
⑬シンガポール			
⑭			
⑮			
⑯			

問 6. 過去5年間に在籍した滞日生のうち、卒業した者()人、中退した者()人。卒業した生徒は就職()人、進学()人、未定()人。

問 7. 最近5年間で中退した生徒の中退理由について、該当するものすべてに○を付けて下さい。該当するものがない場合は、お手数ですが、⑥からの空欄に記入して下さい。

- ①学力が低かった
- ②友だちがいなかった
- ③日本の学校の規則に慣れなかった
- ④経済状況があまりよくなかった
- ⑤学年途中で帰国した
- ⑥

ちなみに、中退した滞日生の具体的な出身国はどこですか。下記の空欄に書いて下さい。

(数行空欄)

問 8. 最近5年間に就職した滞日生の具体的な出身地と人数・性別について記入して下さい。

国別	生徒人数	男子(人)	女子(人)
中国			
ブラジル			
ペルー			
パラグアイ			
アルゼンチン			
コロンビア			

フィリピン			
韓国			
ベトナム			
タイ			
モンゴル			
インドネシア			
シンガポール			

就職先企業の業種は1. 製造 2. 土木建築 3. 飲食 4. 観光 5. 貿易 6. 警備
7. その他。

就職した生徒の職種は1. 事務 2. 販売 3. サービス 4. 技能、5. その他

問9. 最近5年間進学した滞日生について聞きます。

1) 私学の場合の具体的な出身地と進学先(人数)について下記の表に記入して下さい。

*欄は自由に記入して下さい。

国別	4年制大学(人数)		短期大学(人数)			専門学校(人数)						
	理系大	文系大	保育	家政	*	保育	美容	語学	パソコン	電気修理	*	
中国												
ブラジル												
ペルー												
パラグアイ												
アルゼンチン												
コロンビア												
フィリピン												
韓国												
ベトナム												
タイ												
モンゴル												
インドネシア												
シンガポール												

2) 国・公立大学に進学した生徒について下記の表に記入して下さい。(単位：人)

国別	生徒人数	男子	女子	文系	理系
中国					
ブラジル					
ペルー					
パラグアイ					
アルゼンチン					
コロンビア					
フィリピン					
韓国					
ベトナム					
タイ					
モンゴル					
インドネシア					
シンガポール					

問 10. まだ日本語力の足りない滞日生のために、貴校ではどのような措置をとられていましたか。下記の項目に該当するものすべてに○をつけてください。該当するものがない場合は⑦からの空欄に記入して下さい。

- ①取り出し授業を行っていた。(①を選んだ方は引き続き次の問 11 に答えてください)
- ②外国籍生徒の人数は多くないため、本校では取り出し授業はやっていないが、他校とあわせて学習センターや拠点校などの場所で日本語の補習をやっていた。その具体的な場所は (), 週に () 時間。
- ③外国籍生徒の人数は多くないため、取り出し授業はやっていないが、『国語』科教員は個別に日本語の補習をやっていた。具体的に、週に () 時間
- ④加配教員を設置していた。特に非常勤講師に日本語の授業を依頼していた。
- ⑤具体的に非常勤講師は () 人、日本語の授業は月に () 時間
- ⑥本校では特別に何もやっていないが、ボランティアの方に定期的に来てもらっていた。ボランティアは 1. 大学生(大学院生)・ 2. 主婦・ 3. シルバー人材
月に () 回、毎回大体 () 時間日本語の補習をやっている
- ⑦特別な措置は何もやっていなかった。それはなぜですか。教えてください。
(数行空欄)

問 11. 問 10.①取り出し授業を実施していた学校の方に聞きます。どの教科の取り出しが行われていましたか。(複数回答可)

1. 国語(日本語) 2. 数学 3. 英語 4. 社会科(地理・世界史・日本史)
 5. 理科(物理・化学・生物) 6. 保健 7. 体育 8. 家庭 9. 情報
 10. 福祉 11. 外にあれば、記入して下さい。

取り出しが行われていた教科の担当は(複数回答可)

1. 専任講師だけ 2. 日本人非常勤講師 3. 外国人非常勤講師だけ
 4. 日本人講師と外国人非常勤講師のチーム・ティーチング

問 12. 貴校では 3 者面談の時、どのような形で行われていましたか。該当するものがない場合は、⑥からの空欄に記入して下さい。

- ①通訳の方に入ってもらった形でやっていた。(4 者面談=教師・生徒・保護者・通訳)
 ②なるべく通訳に入ってもらった形でやっていたが、どうしても少数言語者の場合、通訳が見つからない時があった。その時はジェスチャーや筆談も交じえながら、分かりやすい日本語でゆっくり話をした(ここでの少数言語→ 語)
 ③通訳は依頼しなかった。生徒は日本語がかなり聞き取れたので、彼(彼女)が親に通訳して話をした。
 ④通訳は依頼しなかった。ジェスチャーや筆談も交じえながら、分かりやすい日本語でゆっくり話をした。
 ⑤日本人の生徒と同じような面談の仕方で行った。
 ⑥(数行空欄)

問 13. 2004 年度現在、滞日生がいない理由と思われる項目すべてに○を付けて下さい。

該当するものがない場合は、⑤の空欄に記入して下さい。

- ①学校の入試制度・基準が変わったため
 ②外国出身生徒のために取り出し授業を実施していないため
 ③入学希望者はいたものの、学力検査に合格できなかったため
 ④入学希望者はいたものの、面接に合格できなかったため
 ⑤(数行空欄)

質問 14. 今まで貴校の滞日生への対応について何かご意見やご提案、ご随想などがあれば自由に書いて下さい。(数行空欄)

*これで、すべての質問は終わりました。長い時間お疲れ様でした。どうもありがとうございました。調査の結果はまた改めてご報告させていただきます。

調査票 C

「滞日外国出身高校生の在籍状況および進路状況」に関する調査
 (2004 年度現在外国出身生徒の在籍者がいる学校)

問 1. 学校形態 1. 全日制 2. 定時制 3. 通信制

問 2. 設立年次 () 年

問 3. 2004 年度全校生徒数は () 人。うち、男子 () 人、女子 () 人。

問 4. 2004 年度滞生徒数は () 人。男子 () 人、女子 () 人。

問 5. 2004 年度現在の在籍者の出身についてお尋ねします。下記の国以外の場合はお手数ですが、⑭からの空欄に国名を記入して下さい。

〇〇国から来ていた	生徒数 (人)	男子 (人)	女子 (人)
①中国			
②ブラジル			
③ペルー			
④パラグアイ			
⑤アルゼンチン			
⑥コロンビア			
⑦フィリピン			
⑧韓国			
⑨ベトナム			
⑩タイ			
⑪モンゴル			
⑫インドネシア			
⑬シンガポール			
⑭			
⑮			
⑯			

問 6. 現在在籍している滞日生の滞日期間についてお尋ねします。人数と出身国を記入して下さい。

滞 日 期 間	人数	どの国から何人がある
例：来日したばかりから 3 ヶ月までは	3 人	中国から 1 人；ブラジルから 1 人；フィリピンから 1 人
来日したばかりから 3 ヶ月までは		
来日して 3 ヶ月から 6 ヶ月までは		
③ 来日して 6 ヶ月から 1 年間までは		
④ 来日して 1 年間から 2 年間までは		
⑤ 来日して 2 年間から 3 年間までは		
⑥ 来日して 3 年間から 4 年間までは		
⑦ 来日して 4 年間以上は		

問 7. 現在中退した（或いは、中退しようとする）生徒がいる場合、その生徒(たち)がそうなった理由は以下のうち、該当するものすべてに○を付けて下さい。該当するものがない

場合は、お手数ですが、⑥からの空欄に記入して下さい。

- ①学力が低かった
- ②友だちがいなかった
- ③日本の学校の規則に慣れなかった
- ④経済状況があまりよくなかった
- ⑤学年途中で帰国した
- ⑥

ちなみに、中退した滞日生の具体的な出身国はどこですか。下記の空欄に書いて下さい。

(数行空欄)

*今年4月に新しく設立された学校は質問8, 9, 10に答える必要はありませんので、質問11から答えて下さい。それ以外の学校はこのままご回答を続けて下さい。

問8. 昨年度在籍した滞日生は卒業()人、中退()人。卒業した生徒は就職()人、進学()人、未定()人でした。

問9. 昨年度就職した滞日生の具体的な出身地と人数・性別について下記の表に記入して下さい。

国別	生徒人数	男子(人)	女子生徒(人)
中国			
ブラジル			
ペルー			
パラグアイ			
アルゼンチン			
コロンビア			
フィリピン			
韓国			
ベトナム			
タイ			
モンゴル			
インドネシア			
シンガポール			

ちなみに、就職した企業の業種は製造/土木建築/飲食/観光/貿易/警備その他です。就職した生徒の職種は事務/販売/サービス/技能その他です。

問10. 昨年度進学した滞日生について聞きます。

まず、私学の場合、進学先(人数)と具体的な出身地(国)について下記の表に記して下さい。*欄は自由に記入して下さい。

国別	4年制大学(人数)		短期大学(人数)			専門学校(人数)						
	理系大	文系大	保育	家政	*	保育	美容	語学	パソコン	電気修理	*	
中国												
ブラジル												
ペルー												
パラグアイ												
アルゼンチン												
コロンビア												
フィリピン												
韓国												
ベトナム												
タイ												
モンゴル												
インドネシア												
シンガポール												

そして、国・公立大学に進学した生徒について聞きます。

具体的な出身地(国)と人数・性別について下記の表に記入して下さい。(単位：人)

国別	生徒人数	男子	女子	文系	理系
中国					
ブラジル					
ペルー					
パラグアイ					
アルゼンチン					
コロンビア					
フィリピン					
韓国					
ベトナム					
タイ					
モンゴル					
インドネシア					

シンガポール					

問 11. まだ日本語力の足りない滞日生のために、貴校ではどのような措置をとられているでしょうか。下記の項目に該当するものすべてに○をつけて下さい。該当するものがない場合はお手数ですが、⑦からの空欄に記入して下さい。

- ①取り出し授業を行っている。(①を選んだ方は引き続き次の問⑫に答えて下さい)
- ②外国籍生徒の人数は多くないため、本校では取り出し授業はやっていないが、他校とあわせて学習センターや拠点校などの場所で日本語の補習をやっている。その具体的な場所は (), 週に () 時間。
- ③外国籍生徒の人数は多くないため、取り出し授業はやっていないが、『国語』科教員は個別に日本語の補習をやっている。具体的に、週に () 時間
- ④加配教員を設置している。特に非常勤講師に日本語の授業を依頼している。
具体的に非常勤講師は () 人、日本語の授業は月に () 時間
- ⑤本校では特別に何もやっていないが、ボランティアの方に定期的に来てもらっている。
ボランティアは 1. 大学生(大学院生) 2. 主婦 3. シルバー人材
月に () 回、毎回大体 () 時間日本語の補習をやっている。
- ⑥特別な措置は何もやっていない。それはなぜですか。教えて下さい。(数行空欄)

問 12. 問 11.①取り出し授業を実施している学校の方に聞きます。

どの教科の取り出しが行われていますか。(複数回答可)

1. 国語(日本語) 2. 数学 3. 英語 4. 社会科(地理・世界史・日本史) 5. 理科
(物理・化学・生物) 6. 保健 7. 体育 8. 家庭 9. 情報 10. 福祉 11.
外に あれば、記入して下さい。

取り出しが行われている教科の担当は(複数回答可)

1. 専任講師だけ 2. 日本人非常勤講師 3. 外国人非常勤講師だけ
4. 日本人講師と外国人非常勤講師のチーム・ティーチング

問 13. 貴校では3者面談の時、どういう形で行われていますか。該当するものがない場合は、⑥からの空欄に記入して下さい。

- ①通訳の方に入ってもらう形でやっています。(3者面談→4者面談=教師・生徒・保護者・通訳)
- ②なるべく通訳に入ってもらう形でやっていますが、どうしても少数言語者の場合、通訳の方が見つからない時はあります。その時ジェスチャーや筆談も交じりながら、分かりやすい日本語でゆっくり話をしま。少数言語の名前をお手数ですが、教えて下さい。
- ③特別に通訳の方にお問い合わせしていませんが、生徒は日本語が殆ど聞き取れたので、彼(彼女)が親に通訳しています。

④通訳の方をお願いしていません。ジェスチャーや筆談も交じりながら、分かりやすい日本語でゆっくり話をします。

⑤日本人の生徒と同じような面談の仕方で行っています。

⑥ (数行空欄)

質問 14. 今まで貴校の滞日生への対応について何かご意見やご提案、ご随想などがあれば自由に書いて下さい。(数行空欄)

*これで、すべての質問は終わりました。長い時間お疲れ様でした。どうもありがとうございました。調査の結果はまた改めてご報告させていただきます。

資料 2 「女子生徒退学者の語り」 インタビュー記録：紅さんと緑さんのケース

#紅さん(番号 H1) のケース：貧困が原因で退学した。

時間：2004 年 11 月 9 日 pm2:30 ~ pm4:00

場所：JR 横浜駅前の喫茶店

① いつ来日したのか

2001 年 10 月 (中学 2 年 2 学期)

② 誰と一緒に来たのか？

一家 6 人揃って来日した。2001 年 10 月現在、H1 (中学 2 年)、妹 1 (中学 1 年)、妹 2 (小学 5 年)、弟 (小 3 年)。父親の在留資格は「技能」、中華料理のコック。他の 5 人家族の在留資格は「家族滞在」。

③ いつ退学したのか？

2004 年 5 月 (高 2)

④ 中学校での様子を紹介してください。

日本に来てから 2 週間後に、妹 1 と一緒に A 中学校に入った。私のクラスにはほかに外国人が 2 人いて、ブラジルから来たそうです。妹のクラスには彼女以外に中国のハルビンから来た男の子がいて、その人が残留孤児の子どもだそうです。名前も日本風の名前で、小学校 5 年生の時から日本に来たので、日本語がとても上手です。最初持ち物とか学校の時間表とか連絡便りなどはその子が説明してくれて、助かりました。

勉強はほとんど分からなくて、毎日教室に 1 人で座るだけでした。ブラジルの 2 人がどこに行っても一緒に、羨ましかった。妹も同じだった。その残留孤児の子は先生に頼まれない限り、妹に話をしてくれないそうです。唯一楽しかったことは日本語の授業です。学校にいる外国人だけ (その男の子が参加しない) が参加する授業で、学級と関係ないです。週に 2 時間しかないが、私たち姉妹 2 人、ブラジルからの 2 人と 3 年生のタイ人です。タイ人の女の子がおじいさんのお父さんが中国人だそうです。みんなたどたどしい日本語を使って、お喋りをします。先生はとても優しく、親切でした。

だけど、普通の授業に戻ると、プリントとか教科書を見ているなら、漢字があつて、漢字だけのところが何とか分かるが、先生が説明すると、全部日本語で、中国語の漢字の発音じゃないから、かえって何も分からなくなるんです。でも、先生たちはよく私のことを心配してくれたと思う。毎日「大丈夫？」と聞きにくるんですもの。本当は大丈夫じゃないけど、日本語で説明できないから、いつも「大丈夫」と答えていた。お正月になるまでの2ヶ月ぐらいは本当に辛かった。積極的に私と話をしてくれる同級生がほとんどいなかった。その後、だんだんと日本語が聞き取れるようになりました。

⑤ どのようにしてどんなタイプの高校に入ったのか？

中学3年に入って、進路についての面談があつたが、母が忙しく行けなかった。それで、先生が通訳と一緒に私の家に来てくれ、「中学校を卒業したらどうしたい？」と聞いてくれた。「もっと勉強したいけど、日本語がまだ下手なので、ちゃんと行けるかしら」と答えたら、「A高校はね、来日してまだ3年未満の外国人のために特別な枠を用意してくれている。あなたは中国で英語や数学を習っていたから、学力は低くはないよ。受けてみれば」と励まされた。母は「失敗したら、店で働いてもらおう。日本は野菜も高いし、米も高い。何でも高すぎて、困ってるの。」と話した。すると、担任から高校に入ってから、義務教育じゃないから、学費がかかることや、高校生はバイトをしてもいいとか、A校にはたくさん外国人がいて、外国人のために易しい授業を教えられるとか、いろいろと説明してくれました。母は「まあ、受ければ、行かせるつもりですけど」と。

高校受験の時、数学しかできなくて、英語と国語は難しすぎて、ほとんど手を付けていなかった。中国にいた時から、英語が苦手だったんです。

⑥ いつごろから退学しようと考え始めたのか？

高校に入って、2ヶ月ぐらいの頃から学校を辞めたいと考えるようになった。

何故？

一家中国にいた時、すごく貧しかったよ。だけど、楽しく過ごしてた。晩御飯を食べながら、お母さんとお父さんはテレビを見ながら、私たち兄弟に勉強しろとか、喧嘩をやめなさいとか言ってました。あの時一番幸せだった。

しかし、日本に来たとき、手続きのためにお金をたくさん払った。日本に来てから借金がどんどん増えてきて、兄弟がまだ幼いから、稼ぐのが両親だけです。「お金がないのに」「お金が余計にかかっちゃった」と毎日お金のことを親から言われた。親は大変だけど、でも何かあると、すぐ叱られる。例えば、お母さんは体調が悪くなった時や兄弟喧嘩の時、時には天気が悪く、店にあまりお客さんが来なくて皿洗いのパートをした母が早めに家に帰された時でも。私は長女なので、一番多く言われてきた。私は家の掃除や他の兄弟の世話、家事の手伝いを全部やっても、褒められたこともなかった。

高校に入って、すぐ親に「もう高校生だから、アルバイトしなさいよ」と言われたが、日本語がまだ分からなかったのので、何回も面接を受けたが採用されなかった。とにかく家は貧乏だから、親から受けた言葉の圧力や、実際に存在する経済的な負担、この2つは、中身は1つだけど、私に退学したいとの考えをさせて理由だと思う。

⑦ 退学してからの生活はどう変わってきたのか？

実は高1の3学期からほとんど学校に行かなくなった。お正月の時どこでもアルバイト募集の張り紙があって、しかも、日本語も前より聞き取れるようになったし、それで、1つの小さな中華料理の店でバイトを始めた。午後4:30から夜9:30までだったが、忘年会とか毎日込んでいて、すごく疲れていた。

その時の毎日の生活ぶりですか。そうね、3時頃学校が終わって、急いで家に戻り、洋服に着替えて、冷蔵庫にある残り物を少し食べて、すぐ自転車で店に行く。そこで9:30まで働いて、バイトが終わって、家に帰ると、もう10時になる。両親がまだ帰ってきてなかったら、洗濯や家事などをして、下の妹と弟（ゲームばかりやって寝ない）に寝るように注意して、毎日喧嘩してから11時ごろ寝る。翌日疲れて起きられなくて、そのまま遅刻してしまう。だんだん遅刻を重ねてくると、学校に行くのも面倒くさくなった。遅刻や欠席が多くなって、授業も分からなくなった。赤点が付けられて、2年生に上がれないかもしれないと言われた。また親にひどく言われて「学校に行くなら、ちゃんとやりなさい。行きたくなければさっさと辞めて、昼間も働け」と。

かろうじて高2に上がって、クラスも変わって、どんどん落ち着かなくなった。小5になった弟が突然家を出て1週間後、池袋駅前に警察に補導されたこともあって、母親はますます口が煩くなった。その後弟は家出を繰り返す度に、私が八つ当たりされるから、バイト先で知り合った専門学校生の（中国人）お姉さんをお願いして、彼女と同じアパートに住むようになった。家賃も他の費用も半々負担している。ますます学校に行きたくなくなって、高2に入って9月退学するまで、学校に行っていた日は全部足しても2週間にならない程度です。だから、退学しても前の生活とあまり変わってなくて、ただ昼間はもう1つ仕事をやるようになった。朝7時から午後2時までコンビニで働いて、2時から4:30まで昼休みや家事などして、5時から夜11時まで居酒屋でホールをやって、普段休みがない。休まない。

⑧ 退学して後悔しているか？何故？

よく分からない。学校に行っていたころは学校がつまらなくて、仕方がなかったけど、辞めてから、少し寂しくなった。兄弟が多いから、親も大変だなと親のことを恨んだりしてない。時々母と長電話をするよ。電車で1時間もかからないけど、会いたくはない。一番下の妹と弟はほとんど中国語ができなくなって、態度も横柄で、叱っても聞いてくれないとかよく愚痴をこぼされてるよ。私より1歳下の妹（次女）からも「お母さんは全然変わってないよ。うんざりだ！」しょっちゅう電話をしってくる。

彼女は今高1だが、私と同じもうすぐで退学する。お母さんは学校の先生の前で「夫婦が苦労しても、子どもに高校を卒業させたいとか。大学に行かせたいとか」というけど、あれは嘘！家に帰ると、「金がない」ばかり言ってる。

⑨ 将来の人生設計は？

ビザの更新は一年ごとになっている。父親が日本にいられる限り、とにかく真面目に働いて、お金をためる。その後はよく分からない。もしかしたら、中国に帰って、また勉強するかもしれない。日本ではもう勉強できない。でも、いつ帰るか分からない。

緑さん（番号 S7）のケース：家庭が原因で退学した。

時間：2005年1月23日 am11:00 ~ pm2:00

場所：JR 藤沢駅前のレストラン

① いつ来日したのか

2001年9月。B高校1年生に編入した。中国で高1が終わり、高2に入ったばかり。

② 誰と一緒に来たのか？

1人で来た。母が日本人と再婚したから、私より3年も早くに日本に来た。

③ 高校生活はどうだった？

まあまあだった。最初、日本の高校はあまり授業がないのに驚いた。また、生徒は平気に先生と喧嘩することもね、びっくりした。時々日本に来なきゃよかったのになあと思う。

なぜ？

日本に来る前に、日本に対してものすごく憧れた国だった。ドラマとか雑誌とか日本人女性生徒がものすごく綺麗で、かわいいでしょ。だけど、実際に来てみたら、汚い格好をする人がいっぱいいる。

どこが汚い？

学校用のかばんとか、どこでも座れる。化粧も汚い。いろいろ。

緑さんは日本に来る前に誰と一緒に住んでいた？

(母方の) 祖母。(実の)お父さんは再婚したから、毎月会うけど。

④ いつ退学したのか？何故？

2004年6月。原因はいろいろあったけど。彼氏と出会ったからかな。

お母さんは日本に来てものすごく変わった。今のお父さんの前で何でも「はい、はい、はい」って言うのを見て、気持ち悪い。お父さんは普通のサラリーマンだけど、小さい会社での専務をやっているの、いつも威張っているの。気は小さいよ。私の前で何も言わないが、お母さんの前で「みどりは私の実の子じゃないけど、高校も卒業させて、専門学校にも進学させた。」って言うらしい。お母さんは感謝しなくちゃと耳

にたこができるぐらい毎日言っているの。お母さんと結婚したから当然のことじゃない？

またね、これからずっと日本に居るから、名前は変えなくちゃとか、帰化手続きを申請してやるよとか、勝手に決めてるの。お父さんの前でちょっといやな顔、にこにこしてない顔だと、すぐお母さんから「礼儀知らない子ね」とか「恩知らず」とか言われる。家にいるじゃ、もう窒息しそう。中国に帰ろうと思ったけど、おばあちゃんはお母さんと一緒に住んだほうがいいよと、断れちゃって、戻る所もない。

進学したビジネス実務の専門学校だって自分で選んだわけじゃないよ。お父さんが決めたの。最近ようやくお父さんの「そうしたほうがいいね」の意味は「そうしなさい」と同じ。

⑤ 親切なお父さんじゃない？

話を聞くだけなら、親切な人だと思うかもしれない。ものすごく勝手な人よ。家具の設置とか、お金のこととか。毎日お母さんがお父さんからお金をもらっている。私がお金を使いたいとか、お母さんに言っても仕方がない。彼に言わないと。ものすごくケチなの。離婚した前妻への慰謝料や彼の子どもへの教育費とか多すぎたから。何でお母さんはこんな人と結婚したのか。それでも、お母さんは仕事をしなきゃいけないと、面子を保ってるために。

⑥ 彼氏、何をやる人なの？

バイト。あそこの店が見える？そう、あの店でバイトをしているの。中国人よ。今一緒に住んでるの。彼は〇〇専門学校を卒業したのだよ。結局就職できなくて、「専門学校に通っても、意味がない。会社の面接に行ったら、日本語を聞いて、外国人って分かったら雇用してくれない」と教えてくれた。だから、今のうちお金を稼いで、何年か経って一緒に中国に帰る。

⑦ お母さんやお父さんから何か文句を言われた？

いえ、全然。むしろ喜んでたよ。お父さんが。お母さんは泣いていたよ。時々アパートに見に来てくれるよ。

⑧ 退学してからの生活はどう変わってきたのか？

退学してからすぐ家を出た。朝起きれないから、バイトは午後からなの。3時半店に行って、ランチが終わって、貯まったお皿や店の片付けなどをする。夜10時半まで。家に帰って、彼のために晩御飯を用意する。彼は家に着くのが夜の12時過ぎです。2つ仕事をやって、5時までレストランのホール、5時半からパチンコ屋のホール。結婚している人と同じかな。

⑨ 退学して後悔しているか？何故？

今はまだ後悔していない。お母さんと一緒に暮らすより今のほうが幸せだから。でも、人間って変わるもんだね。ずっと中国にいたら、今大学生かな。ならないか、お

ばあちゃんは年だから大学に行かせてくれるお金がないもん。

⑩ 将来の人生設計は？

特にないけど。子どもは絶対生まない。話違うか。

第5章 福建省から日本への移民

グラシア リュー ファーラー
(Gracia Liu Farrer シカゴ大学大学院社会学研究科)

中国からの移民は日本で2番目に多い移民グループを形成しており、その人数は急速に増大しつつある。1984年から2003年の20年間に中国人人口は6万7,895人から46万2,396人に増加し、2003年の日本の外国人居住者全体の24.1%を構成している（法務省、2004）¹。登録されている移民の出身地をみると、福建省からの移民が約3万5,000人で東北3省および上海に次いで5位を占める。福建省からの不法移民はこの数字と同等あるいはそれ以上にのぼると推定される。

本稿は日本における福建省からの移民コミュニティを調査し、密入国とオーバーステイの実態、日本への合法、非合法移民の経済的、心理的および社会的送り出しのメカニズムを検討する。特に移民ネットワークが彼らの日本での居住パターンに与える影響と、彼らが日本で不法移民となる過程を調査する。社会的資本により、移住が促され、移民の生計を支援する半面、移民が日本で様々な選択肢を用いて生活向上を図るための道を閉ざす足枷になり得ることを指摘したい。

1. データ

この研究は主に2004年5月から2005年2月にかけて、日本の関東地方と中国・福建省で行なった福建省からの移民を対象とする47件の自由面接ならびに半構造化インタビューに基づいている。福建省移民ネットワークの調査は、筆者が現在行なっている日本における中国人移民についての研究の一部であり、筆者が2002年初頭以来、収集した定性的、定量的データも本稿で使用する。定性的データは、東京首都圏にある様々な中国系娯楽施設および宗教施設の利用者に対する観察を含む。この定性的データをグラウンデッド・セオリーのコーディング法（Strauss and Corbin, 1990）により処理した。本稿の中心テーマは、インタビュー記録およびフィールドノートに関する開放的および選別的コーディングを通じて帰納的に得られたものである。本稿で用いた定量的データは、筆者が2003年5月から12月の間に企画・実施した218人の中国系移住者を対象とするサンプル調査と、外国人居住者およびオーバーステイに関する法務省入国管理当局および入管協会が公表した統計データからなる。上記調査の回答者の5分の4は、中国系スーパー2カ所、中国系ダンスパーティー1カ所、中国科学技術協会の会合、宗教施設および中国料理店2カ所で無作為に選んだ。これらの対象者はすべて東京に在住していた。400世帯余りの中国人が居住する埼玉県の団地で12件のアンケートを回収した。また、約40人については個人的な関係から得られたものである。

2. 日本で不法滞在者となること

2003年に法務省はビザの滞在期限を超過している外国人数が21万9,418人であり、そのうち中国人は3万3,425人と発表した。この数字は韓国人（4万6,425人）（法務省、2004）

に次いで2位にランクされている。中国人のオーバーステイには地域的な特色がある。韓国人の場合は90%以上が短期訪問者（大多数が旅行者）として入国しているが、中国人超過滞在者の40.2%は学生として日本に来た者である¹。大学進学を目指す者（留学生）と大学進学前の語学学校生（就学生）（法務省、2004）の双方がこれに含まれる。事実上、学生ビザではオーバーステイ全体の80%余りが中国から来ている。

各国のオーバーステイの出身地に関する公式記録はないが、筆者は日本で3年間、中国人の実態調査を行なった結果、中国人不法滞在者のなかでは、福建省の州都である福州近辺から来た者がとりわけ多いと考えている。筆者が行なった調査は、日本にいる福建省からの移民は不法滞在者となる公算が大きいばかりでなく、福建の学生が不法滞在者となる比率は中国の他の地域からの学生よりも著しく高い（表1）。筆者のサンプルでは、2002年以前に日本に来た福建省の学生の58.6%が合法滞在資格を失っており、福建以外の学生で不法移民となった者はわずか11.9%に過ぎなかった。このオーバーステイの地域差は性別、学歴など他の人口統計特性をコントロールした後に著しく大きくなる（表2）。

表1. 入国ビザ部類^aと2002年^b以前に入国した中国人移民の現行身分の相互統計表

入国時の滞在資格	福建省 現在の滞在資格			その他 現在の滞在資格		
	不法	合法	合計	不法	合法	合計
不法入国	14	1	1	0	0	0
就学生	12	8	20	7	39	46
大学進学希望 学生	5	4	9	1	20	21
研修生	0	0	0	1	1	2
就職	1	3	4	0	14	14
日本人配偶者	1	4	5	0	11	11
家族滞在	0	1	1	0	9	9
定住者	0	3	3	0	9	9
その他	0	3	3	0	6	6
合計	33	27	60	9	109	118

注記

- 法務省は27種類のビザを扱っている。表には中国系移住者が通常取得する滞在資格のタイプが表示されている。筆者は9種類の就職関係ビザを1種類にまとめ、「就職」とした。
- 就学生が滞在を認められる最長期間は2年である。筆者は2003年下半期に調査を行なったため、2002年以前に入国した者のみを表に含めた。

表 2. 2002 年以後入国した人がビザ（全種）の滞在期限を超過する可能性に関する性別、学歴および地域の効果のロジスティック回帰係数

変量	B	SE
性別	-.811	.478
学歴 ^a	-.370	.208
地域 ^b	1.808***	.498
定数	-1.008	.724
(観察=163)		

注記

- a. 男性は基準部類となる
- b. その他の地域は部類；*** $p < .001$

福州地区からの渡航者の場合は、オーバーステイの移民に加えて、多数の密入国者がいる。米国では毎年5万人もの中国人が密入国していると推定される (Chin, 1999)。日本への密入国者を算定するのは難しいが、日本で面接調査をした福建出身者の一部は、日本に滞在している福建出身者は10万人を上回り、その半数が密入国者であると確信している。日本の海上保安庁は1990年に中国からの密入国組織を摘発した。それ以来、逮捕された不法入国者の80%が中国人であり、そのすべてが福建省から来ていると推定されている²。1990年代半ば以降、中国からの密入国による逮捕者の人数は毎年1,000人を上回る。表1にみられるように筆者の調査では、福建省から来た移民サンプルの5分の1は法的滞在資格なしで入国しており、他の地域からの密入国者は皆無である。

面接調査をしたオーバーステイの夫婦は、書類を持たないのは「重荷を下ろした（一身軽）」ようなものだが、日本でのビザなし生活は苦しいと冗談まじりに話していた。日本は伝統的に移民受入国ではなく、移民に対しては慎重な政策をとってきた。近年、日本政府は以前より熟練労働者を歓迎するようになり、研修生制度を実施したり、外国人留学生に週20時間の労働を許可し、製造業、建設業、サービス業に不熟練労働者を供給するなど様々なサイド・ドアを設けてきた (Cornelius et. al, 1992 ; Moriya and Sassen, 1994)。しかし、非合法移民に対しては一貫して厳重に取り締まってきた。日本には不法滞在者にアムネステイ（特例措置）がとられた前例がない。そのうえ、不法移民は犯罪と結びつくのが一般的であるため、警察は不法滞在者を一掃する強硬な方針を堅持してきた。密航が90年代初期から横行して以来、特にそうである。2003年12月、「不法滞在が外国人犯罪の温床となっている」と考える日本政府は、日本を「犯罪に強い社会」にする見地から、不法滞在者を5カ年間に半減するキャンペーンを打ち出した (国家公安委員会, 2004年)³。日本の警察は、繁華街、建設現場、特定居住地など不法移民が集中しやすい所を定期的に手入

れしている。私服の刑事が駅やその近辺を巡視して身なりで不審者を尋問している。

このため、滞在証明がないと移民は不安な状態に置かれる。強制送還の恐れから、不法滞在者は日本の労働法規による保護を求めるほか、警察に摘発される危険性を最小限に抑えるよう日常生活を調節せざるを得ない。筆者に情報を提供した不法滞在者は、自転車には乗らず、めったに病院に行かないと述べた者が多かった。福建から来たある友人は私服刑事がパトロールしていると思われる地区で歩くときは緊張すると話していた。不法滞在者の間には奇妙な感覚がみられた。ある被面接者は「今日はここで話をしているが、明日はどこに住むか分からない」と対話を締めくくった。そのうえ、非合法の移民は生活上の資源とサービスの面で個人的なネットワークに大きく依存しており、同じエスニックによる搾取にさらされやすい。筆者の実態調査では、仕事の紹介などのエスニック・ネットワークによるサービスは通常、代償を伴う。不法滞在の夫婦が子供を産む場合には病院の費用、医療保険証の借り入れ、新生児を中国へ送る費用など100万円以上かかる⁴。そのうえ、非合法の移民は犯罪の標的になりやすい。中国人による犯罪の被害者は他の中国人である場合が少なくない。非合法の移民は危険や被害を届けることを極度に恐れている。

ここで問題が生じる。非合法の移民が厳しい状態に直面しているのであれば、多くの福建省人はなぜ日本に密入国したがるのか、あるいは合法的滞在資格を捨ててまで日本で不法滞在者となるのはなぜか。次に、福建省から国際移住をする動機と、日本で大量の不法滞在者が生じてきたメカニズムを考察する。

3. 国際移住の理由

筆者に情報提供した福建省からの不法滞在者は、日本に合法的に渡航あるいは密入国する理由を数多くあげた。これらは移民の新経済学、相対的欠乏説、そしてネットワーク理論の国際移住に関する3つの理論により説明される。これら3つの理論はそれぞれ経済的、心理的および社会的な視野から国際移住の原因を説明している。

3-1 経済的動機付け

労働移動に関する新経済学は移民の母国における資本市場、将来の市場、保険市場の未成熟を考慮し、収入源を分散させて危険分散を図り、新しい生産手段を導入しようとする家族の配慮によって移住が促進されると考える (Massey et al., 1993; 1994)。福建人の被調査者によると、福建には生産年齢人口をまかなうに十分な耕地がない。沿海地域の人達は通常、漁業に従事しているが、近年、燃料油の価格が上昇の一途をたどり、漁業は採算が取れなくなっている。中国の経済改革後は、海を養殖場として販売している地区もあり、地元民は海に近寄れなくなったという。加えて、地理的に台湾に近いと、中国にとって防衛上、戦略的な地位を占めるところから、大型の工業が発展していない。移民は企業活

動と並び2つの伝統的経済慣行となってきた。1949年以前には、福建省民は東南アジア、北米そして日本へ大量に移民していた。中華人民共和国が移民規制を緩和するまで、多くの福建省民がアモイ、広州、上海へ労働や商売のため進出していた。商業融資の代替源がないため、現地人は一族の資金を集めたり、高利のローンを借りたり、頼母子講に加入して当初資金を調達した。国際移住は資本蓄積の代替手段を提供した。

筆者が面接調査をした福建省からの移民は家族の生活と同時に一族の事業への投資に責任を負っている者が多かった。ある男性は兄が工場を経営しており、そこで必要な資金を提供し、投資の一部を負担していた。「これは分業と呼ばれている」と彼は語った。事実、数人の若い中国人移住者は家族が送金をせがむとこぼしていた。彼等の送金は不合理な取引や事業経験の不足が原因で失敗した投資や事業活動の穴埋めに使われるケースが少なくなかった。このため彼らは日本に残ってより多くの資金を貯えることを余儀なくされたという。日本で稼いだ資金を事業で失敗して失ったため、2度、3度と日本に来たというインフォーマントもいた。

福建からの日本移民のなかで目立った現象の一つは、借金を理由とするための移住であった。日本は移民国家ではなく、滞在資格を合法化する大赦や機会を与えないため国際移住にとって理想の目的地ではないと指摘した被面接者が何人かいた。米国、カナダ、オーストラリアは長期居住の観点からより魅力的な国であった。しかし、事業の失敗による負債が原因で日本へ来た。日本は地理的に近く、臨時の仕事が多いと思われていた。特に年配の男性移民は事業不振による借金のため日本へ来た者が多かった。借金による絶望感から密航に頼った者もいた。

ニアンの事例は典型的である。福建省長楽県から来た46歳の移民である彼は、50万人民元（650万円）の負債を抱えて日本に渡来した。彼は90年代の初期から中期にかけて真珠店を経営していたが、100年振りの大型台風によって、一瞬のうちにすべてを失った。「大波がすべてを流し去り、20万人民元（260万円）の借金が残った」という。この災害には保険をかけていなかったため、故郷にとどまって借金を返済するわけにはいかなかった。このため別途20万元を借り入れて、96年に日本へ行くことにした。しかし、この旅は決して楽でなかった。浙江省で船が拘留され、3万人民元（39万円）の罰金を支払った。債権者が怖いため、故郷に戻るわけにいかず、数ヵ月待ち、再び船に乗った。2ヵ月に数回も計画を変更し、やっと船に乗って10日間かかって日本の海岸に到着した。

3-2 心理的動機付け

国際移住の経済的動機付けは別として、一部の社会学者は、人々は世帯の絶対的所得額を増加させるためばかりでなく、地域社会の他の人達に対比して所得を増やすために移住すると主張し、相対的貧困説を唱えた。言い換えれば、国際移住を通じて、相対的貧困の感覚を軽減しようとする。その結果、移住して100ドル収入が増えるという場合、所得分

布が等しい地域社会の貧困世帯よりも、不均衡な所得分布の地域社会の貧困世帯の方が移住意欲が大きくなる (Stark and Taylor, 1989 ; Stark, 1991)。

Liang と Ye (1999) は相対的貧困は福州地区からの国際移住の心理的動機付けをよく説明していると指摘している。福建省福清市および長樂市では、移民の家族が建てた新築高層ビルが彼等の富を誇る記念碑のように並んでいる。移民に将来計画をたずねると、家を新築すると答える者が多い。被面接者の一人は過去3年間、弁当会社に勤め、警察が従業員の渡航書類を検査に来るため社長から解任されるまで、週7日、1日16時間働いたと筆者に語った。彼は1年以内に密航船の料金を完済したばかりでなく、故郷の村に新居を建てた。もう少し時間があれば、家具を整えるための蓄えもできたはずである。福州市からの移民は、外国での身分にかかわりなく、同郷の人達から華僑（在外華人）と呼ばれている。彼等は帰国すると宴会を開き、親戚や友人に豪華な品物を贈り、先祖の廟の建設・改修その他の地元プロジェクトに一般の人の2倍も寄付をして成功を誇示するのが普通である。このような出費は移民にとって追加的な負担となるが、より意欲的な国際移民を生み出す効果もある。

経済面での相対的貧困は別として、個人的な富を得る方途として海外で働くことを望む若者もいる。30歳のリーはガールフレンドと結婚するため中国に帰国したあと日本に戻ってきたばかりだった。彼は5年前、ガールフレンドの家族の反対を押し切って世帯を持つ資金を作るため日本に行くことを決めた。中国で彼は高校に進学せず、商売を始めたが成功せず、25歳までに数万人民元の損失を被った。資金はすべて母親から借りていた。

「事実、私の家族にとっては私のカネは必要なかった。兄が米国で稼いでいた。彼は米国に帰化した。しかし私は自分で事業を経営し、カネを儲けたかった。中国では小売店を開設しようとし、飯場頭（工頭）としても働いた。しかし金にはならなかった。私は負け犬のように感じた。私は妻と田舎に住んで快適な暮らしをしたいと思った。私の村では25歳までに結婚しなければ面目を失うとされている。私の両親は財産を持っており、私のために結婚の支度をすることができたが、私は親のカネをあてにしたくなかった。私自身のカネがほしかったのである。家では母親に借金があり、我ながら寄生虫のように感じた。兄弟は商売の仕方を色々と教えてくれた。私は虎年生まれで、他人に支配されることを好まず、独立したかった。そこで日本に行くことにした」。

3-3 社会学的説明

国際移住に対する典型的な社会学的手法はネットワークを検討することにある。移民の社会的ネットワークは国際移住を生み出し、維持するミクロ・レベルの構造であると理解されている (Massey et al. 1993 ; Massey and Espinosa, 1997)。社会的ネットワーク理論によると、一人一人の移住が追加的な移動を維持するため必要な社会構造を構築する。親族関係、友情、共通の地域社会的起源などの共通認識に基づく相互主義的な援助義務に支え

られた社会的絆を通じて移民と非移民を結ぶ。非移民はこの絆を頼りに海外での雇用を追求する。新たに移民が増えると、友人、親族の移住のコストとリスクが低減する。移住のコストとリスク低減に伴って彼等の移住意欲が高まり、海外との絆を持つ人がさらに増える (Massey et al., 1994)。

福建省は長い海岸線と海外に面する地理的位置のゆえに、東南アジア、北米、南米および日本への移民の歴史が長い。福建の商人は 15 世紀以来、九州地区で活動してきた。日本と中国が国交を閉ざした 16 世紀、17 世紀、18 世紀においてすらも福建と日本の沿海地区の間で密輸が続いた。1980 年代まで数千の福建省民が長崎と横浜の中華街に住んでいた。その大多数は仕立て屋や床屋のような労働者、職人であり、少数が商人であった (Vasishth, 1997)。1969 年に福建出身の移民は 6,193 人にのぼり、中国大陸からの日本への移民グループのなかで最大であった (Taijma, 2003 より引用)。

福建省出身の中国人は別として、日本には福建に起源と関係を持つ台湾人が多い。数 10 年にわたり日本の植民地の住民であった台湾人は第 2 次大戦の終結前に日本に移住した者が多かった。1951 年のサンフランシスコ条約により市民権が消滅したあと、数万の台湾人が日本に残留することを選んだ。1980 年代まで、台湾人は日本の中国系移住者全体の半分以上を占めていた (入管協会)。福建と台湾の古い海外関係は福建から日本への移民経路にとって重要である。数人の情報提供者によると、台湾系華僑が日本に外国語学校を設立し、中国から学生を誘致しており、その学生は大多数が福建省の出身である。

日本の古い華僑社会は海外移民のネットワークの基盤を形成した。しかし福建から日本への移民を維持し、加速してきたのは、福建省からの移民の親族関係に基づく高度に閉鎖的なネットワークであった。福建からの移民は大部分が省都、福州周辺地区の出身である (Liang and Ye, 1999 ; Liang and Morooka, 2004)。そしてこれら地区の村々は 1、2 の宗族により構築され、その家族の名にちなんで命名されている。例えば陳村、李村の住民はほとんどが陳家か李家に属する。村により移民の人数と行き先が大きく異なる。発音は少し異なるが、同じ方言を使っており、他の中国人にはほとんど通じない。こうした特性を持つ福建ネットワークは社会学者が指摘する血縁とファミリーに基づく他の同族ネットワークと同様、部外者には閉ざされているように見受けられる (Waldinger, 1996 ; Sanders, Nee and Serneu, 2002)。

こうした閉鎖的な親族ネットワークを通じて、密航がこの地域で横行することになった。福建からの国際的な密航は、複数の国の地下組織と汚職官吏がからむ巧妙なシステムにより運営されている。密輸グループの成員はあるファミリーまたは大ファミリーあるいは仲の良い友人で構成されているばかりでなく、現地での人集めは常に血縁関係・友人ネットワークを通じて行なわれている (Liang and Ye, 1999 ; Chin, 1999)。福建からの移民が「蛇頭」(マスコミと非福建人にとっては犯罪者と同義) を恐れているかどうか、情報提供者に聞いたところ、「なぜ恐れると思うのか。彼等は同じ村の親戚や住民だ。さもなければ多く

の若い女性が海外に渡航したがるわけがない」と語った。これらの女性は多分、村から出たことがないのだろう。後で分ったことだが、「蛇頭」とは合法的または非合法的に移民を海外に送り出す者を指し、「ブローカー」（仲介）と呼ばれることもある。筆者の実態調査では、「叔父が蛇頭だった」「親戚が蛇頭の友達だった」「蛇頭と親しくしていた」というような発言をしばしば耳にした。被面接者の女性は「蛇頭の役割は難しく、いつも顧客と同じ船に乗り、危険を共にしている」と話していた。福建の学生は大部分が蛇頭を通じて日本の入国ビザを取得している。蛇頭が手配した日本人と偽装結婚して日本に渡航した福建の女性もいた。日本に滞在しているある中国人女性に正式の夫である日本人とどのようにして出会ったかと聞いたところ、日本の男性と会う機会を作ってもらいたいと友人に頼んだら、2週間後に今の夫が彼女に会いに来たと答えた。

福建からの移民の血縁・友人ネットワークは海外移住を促進するばかりでなく、移民が日本に適応するうえでも重要な資源となる。次節で自閉的な移民ネットワークを通じた資源が福建からの移民の新環境への適応を容易にする仕組みと、移民（特に不法滞在者）が頼りにしている実務的サービス提供の実情について述べる。他面、福建ネットワークの閉鎖性から生じる制約が代替的資源の利用を妨げ、移民の生活向上のための合法活動を妨げている点についても述べる。

4. 適応過程における移民のネットワーク資源と制約

移民は新しい国に入ると、移民ネットワークを頼って住宅、雇用、定住のための支援を得る (Bailey and Waldinger, 1991 ; Sanders, Nee and Serneu, 2002)。民族のきずなが不法滞在者の収入増加に役立つ (Aguilera and Maasey, 2003)。ネットワークによる資源はエスニック企業家精神を強化する (Light, 1972 ; Light and Bonacich, 1988)。しかし、エスニック・ネットワークの効用は移民にとってさまざまであり、その優位性と利益はグループにより異なり、時と共に変化するとする研究もある (Hagan, 1998)。同一エスニックのネットワークへの依存は一部移民、特に資源の乏しいエスニック・コミュニティにおける不法滞在者を脆弱な立場に置く。米国での研究は、同一民族が新参者を搾取する事実を明らかにしている (Hondagneu-Sotelo, 1994 ; Mahler, 1995)。エスニックの孤立した経済の効果に関する研究は、移民ネットワークが女性移民よりも男性移民に有利であることを示している (Zhou and Logan, 1989)。筆者は、日本の福建省からの移民社会においては民族ネットワークが生計維持のため不可欠の方策であることを見出した。それがなければ、移民、特に不法滞在者は生存しがたい。しかし福建省からの移民ネットワークの特質から方策のタイプが制約され、一部の移民にとってそのことが重荷となる。

4-1 移民ネットワーク資源

福建省からの移民が直面している最大の実際問題は住宅と仕事である。日本ではアパートを借りるためには保証人が必要とされるのが普通であるため、新参者と不法滞在者は住宅を見つけるのが難しい。筆者が面接調査した福建省からの移民は大部分が親戚か友人と同居していた。日本語学校の寄宿舎を共同で利用している少数のケースを除き、親戚との同居は一義的方策となっている。出稼ぎを唯一の目的とする福建省からの移民（多額の初度借入れを背負っている場合が多い）は到着早々、仕事を必要とするばかりでなく、収入を増やすため仕事を頻繁に変えている。言葉が通じないうえ適切な書類を所持しないことが多いため、福建省からの移民の大多数は親戚と友人の紹介で仕事についている。日本経済の停滞で良い仕事を探すのが益々難しくなっている。外国人犯罪に関するマスコミの報道が不法移民ばかりでなく、合法移民の職探しを困難にしている。従って福建省からの移民にとってはネットワークが一層重要となる。筆者の研究によると、就業している福建省からの移民の5分の4は今の仕事を親戚と友人を通じて見つけている。

その結果、日本に親族ネットワークのない移民や援助を得るため移民ネットワークに頼れない者は生計を維持するのが難しいことがある。イーミンという若い男性の被面接者は彼の村のなかで始めて日本に来住した。彼の就学生ビザは同郷に住む蛇頭と関係のある従兄弟を通じて用意された。彼は福建省からの移民の典型として300万円近い借金を抱えてきた。沖縄の日本語学校で2年間学んだ後、高校卒を対象とする東京の専門学校に入学した。東京に親戚がおらず、知り合いが少ないため、東京に来てから4ヵ月間は職がなかった。月謝と家賃を払うことができなかつたため彼は学校を辞め、寄宿舎を離れた。幸い、彼はカトリック教徒であった。郷土で教会員である母を通じて東京の中華系カトリック教会（主に福建省からの移民が会員）の住所を知った。教会の門をたたいたとき、彼はホームレスで日々一切れのパンで生活していた。かれは教会員と同居し、職を紹介してもらった。当初は日本で大学に進学するつもりであったが、生計を確保できないためその機会を失ったことを悔いている。

福建のエスニック・ネットワークに基づく血縁関係により、不法滞在者にとって不可欠な違法サービスも利用できた。地下銀行を通じる送金はその一つである。ほとんどの福建省からの移民にとって、移民の唯一の目的は送金である。不法滞在者が多い福建省からの移民は合法的な滞在資格をもつ中国人が経営する地下銀行に頼っている。福建省長楽市と福清市からの移民はそれぞれ独自の銀行システムを持っている。手数料は送金額の1%ないし1.2%で、被面接者のほとんどがこの地下銀行を必要としているばかりでなく、その仕事が能率的であると認めていた。委託したカネの安全について尋ねたところ、ある長楽市出身者は「誰とも関係があるからカネを持ち逃げする心配はない。欺けば殺されるだろう」と述べた。

そのうえ福建省からの不法移民は健康保険証も借用し、合法移民の外国人登録証を使って携帯電話を購入している。特に福建省からの移民は、新生児を知り合いの中国人に頼んで中国へ連れて行ってもらって母親が日本で働けるようにしている。このような活動はすべて信頼感の厚い自閉的なエスニック・ネットワークによってのみ可能となっている。

4-2 ネットワークによる制約—不法滞在者となる事例

福建省からのネットワーク資源は居住パターンの選択を制約する面もある。自閉型ネットワークのマイナス効果は不法滞在の普遍化である。Coleman (1990) は、規範は高度の閉鎖性を特徴とするコミュニティにおいてのみ台頭し維持されると指摘した。福建の自閉型の同一エスニック・ネットワークの規範は不法滞在者を確実に掌握している。

偽装結婚と同様、学生ビザは日本に入国する手段に過ぎないと一部の福建省からの移民は考えている。多くの被面接者は日本に来た動機は出稼ぎであると述べた。以前に学生ビザを持っていた福建省からの移民の当初目的は35人のうち14人が「出稼ぎ」（賺錢）、13人が「学問の追求」（学習深造）⁵と答えた。80年代後期と90年代初期に福建省からきた初期学生グループの間では学習に成功を収めた者が多かった。当時は急ピッチの経済成長と深刻な人手不足で学生の働き口が沢山あった。ある被面接者が述べたように、「求人紙のある店に入れば日本語を話せるか否かにかかわらず雇ってくれた」。学生達は仕事をできる時間が限られていたにもかかわらず、その限度を超えて働いた（田嶋、1998;2003）。学校と職場の間で毎日2時間ほど眠っただけだったと述べた者もいた。そのうえ外国人不法滞在者の規制が緩かった。1990年に制定された出入国管理および難民認定法（1989年12月8日通過）は不法外国人の雇用に対する罰則を強化したが、その執行は軽度であった（Morita and Sassen, 1998）。多数の福建省からの移民が学生ビザを取り始めた最初の数年間にビザの滞在期限切れが多数に上ったのはこのためである。

90年代に密入国が増えるに伴い、福建省からの移民は大多数が不法滞在者により構成される社会的ネットワークに頼る傾向を強めてきた。これらの不法滞在者は移民の兄弟、従兄弟、叔父あるいは親友であった。長楽市出身のある被調査者は、日本にいる友人30人のうち合法移民は3人に過ぎず、そのうち2人は福建省外の者であると述べた。

このような社会的ネットワークに落ち込むと、合法的滞在資格を失うことが普通であり、予想通りであるとする考えられるようになる。沖縄の日本語学校に行かずに直接東京に来て働くことにした理由を尋ねると、福建から来た若い男性は「環境の影響による。我々の地域から来ている者はみなそうだ」と答えた。学問を堅持した幾人かの福建省からの移民は、福建からの学生が多い日本語学校からスタートしたが、学生は徐々にクラスから消えていったと回答した。2年間の日本語学校を終了する時までに残っていた福建出身の学生は3分の1以下に減ったという。日本語学校から始めたある女性は当初30人であった福

建の学生のうち大学へ進学したのは彼女1人であったと述べた。

福建省からの移民コミュニティでビザの滞在期限切れが一般化していること、そして多数の福建出身の学生が姿を消したことが、学問継続を希望する者への社会的圧力を加えている。出稼ぎの機会を失うのは愚かであると他の移民から思われるばかりでなく、学校から多数の同郷者が消えたことから社会的影響を被っている。90年代の中ごろには過疎地で学生の減少を補うため外国人の入学を認めた高校があった。福建省長楽市出身者によると東京近県の高校での3年間の学習は惨めであったという。彼は他の28人の福建省からの移民学生と一緒に入学したが、数ヶ月後に冬休みが終わって新学期が始まった時には2人に減ってしまった。学校側はこれに驚き、教師は彼等に対する態度を改めた。「北方人」と呼ばれていた他の中国人は彼を見下し、福建人は「できそこない」と評した。家族の支援がなければ3年の間に何度も退学を考えただろうと彼は語った。この点については後に詳述する。

ビザの滞在期限切れは日本の福建省からの移民社会では一般的だが、大多数の福建省からの移民は合法滞在資格の保持を望んでいることを特筆したい。不法滞在者となったことを多くの元学生は遺憾に思っていた。しかし、学生の滞在資格を維持することには費用がかさみ、将来の不安を生じる。社会的ネットワークが提供する資源は福建省からの移民学生の学問の継続には役立たない。反対にそれは学生に余分な金銭負担と社会的コストを課す。さらに社会的ネットワークによる資源への依存は合法的滞在資格の保持や受入国での社会的モビリティ（移動性）を達成する代替資源への接近を阻害する。

4-2-a 社会的ネットワーク資源を利用することによる金銭負担

正常な情報チャネルをほとんど持たない福建省の農村地方から来た移民はビザ取得に当り、主に「仲介業者」や「蛇頭」に頼っていた。その手数料は過疎地の村ほど高くなる。その結果、福建省からの移民はビザを取得できると高額な報酬を支払うことになる。福州から来たある移民は、学生ビザに授業料を含めて120万円を支払っている。村で一番先に日本へ来た長楽市からの移民は300万円を払い、このうち50万円が仲介業者の手に渡り、50万円が寄託金に充当された（彼はビザを同県に住む従兄弟で「蛇頭」と親しい者を通じて取得した）。代価は一般に10万人民元（1万2500米ドル、130万円）ないし20万人民元（2万5000米ドル、260万円）である⁶。

ビザ取得に伴って資金集めにかかる追加費用がかかる。すでに家族が海外で働いていて初度費用を負担できる家庭は少ない。大多数の福建省からの移民の家族は高利のローン（通常月1%）や頼母子講を利用している。

福建省からの移民の学生は金銭負担が原因で退学を余儀なくされた者が多い。ファンという若い女性は日本の入国ビザと中国の大学の入学許可を同時に受け取った。彼女は大学進学を望んだが、彼女のビザ申請を担当した従兄弟の蛇頭は、彼女のグループでビザを取

得できたのは彼女だけであったとの理由から渡航しなくても 20 万人民元 (260 万円) を払う必要があると脅かした。彼女の家族が借金をして 7 万人民元 (81 万円) を払い、彼女が日本にいる間に残りの 13 万人民元 (170 万円) を払った。日本に到着後、その従兄弟が彼女の住居と仕事を世話してくれた。彼女は次のよう語った。

「従兄弟が仕事を探してくれたのですぐに返済できた。彼にカネを借り、彼は思いやり (人情) を示した。これは純粋な金銭関係であり、フィーリング (感情) が入り込む余地はない。日本語学校の初年度に授業は午前中であったため、午後は働くことができた。しかし 2 年目は授業が午後に変更された。千葉に住んでいたため仕事に差し支えたため退学した。初年度には金利を払うことができず、家族が立て替えてくれた。2 年目は従兄弟がブラック⁷になる (不法滞在する) よう要求した。ブラックになる時期が早いほど彼は資金を早く回収できる。ブラックにならないければ彼の圧力に耐えられなかった。日本に渡航する前に、彼はブラックになりたいのか、それとも学校に通いたいのかと私に尋ねたことがある。私は「ブラック」になるということの意味が分からなかったため、知らないと答えた。私は海外の生活がどのようなものか知るすべがなかった」。

福建省からの移民は通常、学校に残る場合と無証明になる場合の金銭的差異を次のように計算する。学校に 1 年とどまれば、年間 60 万円の月謝を払わなければならない、半日分の給料を失う。従ってフルタイムで働く代わりに学校に通えば年間 200 万円もの損失になる。学校を続ければ授業料は年間 100 万円もかかることがある。早めに中途退学する移民は 3 年間で借金を返済できるが、学問を続けると完済に 6、7 年を要する。

4-2-b 資本が負担に転化する

福建省からの移民は移民生活を定着させるため親戚と友人に頼る。しかし社会的ネットワークに依存することによって移民はより能率的に目標を達成できる正規の資源を利用できなくなる。そのうえこれらの資源は元々合法的であった移民を非合法の地位に転落させることがある。

日本の出生率が低下を続けるなかで、短大と専門学校は数万の中国人学生の授業料を頼りにするものが多い。なかにはビザ工場と化して移民産業の一要素となった学校もある。エスニック・ネットワークにはまり込んで移民産業に利用されるケースもある。福建省からの移民の学生は容易にその被害者となる。S は福清市の学校の教師をしていた。兄弟が彼女の日本渡航を支援し、自分たちが通った日本語学校に彼女を入学させ、彼等のネットワークを通じて専門学校を見つけた。しかしこの専門学校は文部省⁸が規定した要件を満たさなかったため廃校となり、彼女は不法滞在者となった。

こうした社会的ネットワークにはまり込むことによってもたらされるマイナス効果の例としては、R の事例はもっと際立っている。福清から来た彼女は地下組織のネットワー

クをよく知っており、この多くのサービスを容易に利用できた。90年代初期に3年間、日本に滞在し、帰国後99年に離婚した後、偽造旅券を使って再度日本に入国した。彼女は働いていたクラブで32歳の日本人男性と出会ったときはすでに43歳であった。2人は恋仲となり結婚することになった。彼女は自分が未来の夫より11歳年上であることが入国管理当局から偽装結婚であると疑われるのではないかと恐れ、地下組織のネットワークを使って偽の身分証明書を入手し、氏名と年齢を変えた。こうして配偶者ビザを取得したが、4年後に新しい問題が生じた。15歳になる娘が志望した中国の高校に入れず、日本に連れてこようとしたが、以前の偽造文書にはこの娘のことが記載されていなかった。そこで再び地下組織の力で問題を解決しようとした。話がややこしくなり、筆者に詳細を語るのが難しかったが、要するに、彼女はすでに所有しているビザを破棄して彼女の本当の年齢と氏名で再申請したのだが、出生地は福建省外の別の地域にした。このため日本の様々な公式文書上、彼女の夫は年齢、氏名、原籍を異にする3人の女性と結婚している形になった。筆者が面接調査をした時点で彼女は証明文書を持たず、入国管理当局からの電話を5ヵ月も待っていた。

4-3 制約をのりこえる：社会的支援と代替資源

福建からの移民で日本語学校に学びソフトウェア技師となったある男性は、学業の続行と「不法滞在者への転向」のいずれを選ぶかについて悩んだ様子を筆者に語った。彼は午後8時から午前7時までの夜間の仕事を紹介された。作業環境は厳しく、仕事は危険であった。給料は日給1万8000円であった。彼は次のように語った。

「我々学生にとってそれは驚くべき高給であり、非合法滞在資格で日給1万8000円だから月額にすれば大変な金額になる。絶好のチャンスだと思った。問題は睡眠をとれないことだけであった。このため学校を止めようと思った。工場の同僚は中国からの非合法移民が多く、大多数が福建省からの移民であった」。

彼の2人の兄弟はいずれも日本の学校を卒業するために学んでおり、仕事をやめて学校にとどまるよう彼を説得し、彼はそれに従った。

ビザの滞在期限切れは福建省からの移民の間では一般化していたが、彼とその兄弟のように合法移民の地位を堅持し、合法的な生活向上の道を歩む者もいる。彼等を他の者と比べると、2つの特徴が浮上する。1つには社会的資源をもっていたがゆえに、福建省からの移民ネットワークから切り離されていることができた。もう1つは代替資源があったことである。

ソフトウェア技師の出身地である闽清県は移民活動の面では知られていない⁹。このため彼は非合法移民の多い親族ネットワークに埋め込まれてはいなかった。彼の長兄は公式ルートを通じて日本に渡航し大学を卒業し、3人の兄弟のために日本の学校で学ぶための

ビザを申請した。追加的な費用はかからなかった。このため福建省からの他の移民のように重い金銭負担がなかった。

他の社会組織に参加することで代替資源を得ている移民もいる。このような組織の一つが教会である。一部中国人の宗教団体は不法移民が参加者の大部分を占めており、福建からの移民が集中する傾向がある。宗教団体は法的地位と社会的モビリティに資する方策を提供することができる。例えば、筆者が参加したカトリックの集会は90%が福建省からの移民により占められ、ほとんどが不法移民であった。しかし、大学院学生(筆者と他の2人)、大学生、ソフトウェア技師(香港出身)、会社員、自営業者もいて情報源となった。聖職者(大多数が日本人)が数人の学生の学校と仕事探しを支援している。

5. 結 論

本稿では、中国福建省からの移民の特質、移民の動機付けを述べ、社会的ネットワークの重要性と制約について考察した。日本で不法滞在者となっている福建省からの移民に焦点を当て、彼等の閉鎖的なネットワーク内にみられる規範と彼等を支える資源を明らかにした。多数の親戚と友人を含む社会的ネットワークが不法移民を一般化している。このような社会的ネットワークのなかでの資源への依存は移民に追加的負担を負わせると同時に彼等が正規の公共的資源を求めることを阻害する。移民ネットワークは不法移民の受入国での生存を容易にするが、移民の上昇移動(upward mobility)の障害となる。

3年にわたるこの実態調査において、筆者は福建移民コミュニティの規範の変化を感じ取った。この変化の原因は日本政府の外国人滞在者に対する規制強化と、移民の出身地における経済成長にある。日本政府は近年、不法滞在者の強制送還を強化し、不法就労の摘発を強化してきた。これによって日本国内の不法移民の生活が非常に苦しくなってきた。従って不法移民であることは好ましくない選択であるという認識が深まってきた。90年代中頃に不法移民となったある被面接者は悔いを残していなかったが、2000年代初期に滞在資格を失った者はできるものならやり直したいと話していた。90年代中頃に日本に学んだ福建省からの移民学生は大多数が非合法化したが、ある被調査者は98年のクラスの同級生の半数は合法的な地位を保持していると推定している。若手の福建移民は2世が多く、以前の移民世代よりも財力がある。

しかし、日本社会の幾つかの構造的条件と、福建省からの移民ネットワークの特質により、依然としてビザの滞在期限切れが生ずる原因となる公算が大きい。第一に、建設現場やレストランなど、市場には不法移民を受け入れる場がある。第二に、中国人学生を受け入れる日本の学校が増えている。法務省は学校と学生ビザの検査を強化するとともに、通学しているにもかかわらず学生ビザを更新できなかった福建省からの移民の事情聴聞を開始した。福建省からの学生は入学率が高いが(100%受け入れるところもある)、質が悪く、

得体の知れない高月謝料の私立学校を選ぶ傾向がある。こうした学生は入国管理が強化される新風潮のなかで不法滞在者化する運命にある。第三に、不法移民に対する最近の取り締まり強化に伴う強制送還率の上昇は、日本人と福建省民以外の中国人の間で福建省からの移民のイメージを悪くし、彼等は一段と疎外されるようになった。最後に、移民ネットワークは依然として健在であり、福建省から来る人は増加の一途をたどっている。メキシコの多くの村にみられるように、移民は一種のライフスタイルとなっている。特に出稼ぎは資金蓄積の早道であり、事業の失敗による負債に直面している場合は特にそうである。強制送還が行なわれるため、日本は移民先として米国ほど好ましくないが、日本への渡航は費用がかなり安く、移民ネットワークが確立されている。

注

1. 「その他」の部類のオーバーステイは1万4,418人（全体の43%）にのぼる。筆者の実態調査によると、彼らの多くは日本人またはビザを持つ中国人との偽装結婚により渡日した疑いがある。
2. <http://www.kaiho,mlit.go.jp/info/kouhoushi/kouhoushi3.htm>
3. http://npa.go.jp/kouhoushi/biki2/sec03/sec03_07.htm
4. 日本では出産の際に入院費30万円ないし60万円を払う。保険の種類により、政府または所属機構から通常、約30万円を受け取る。日本の健康保険には写真が貼られていないため、在日福建省人の間では料金を払って保険証を借りるのが普通となっている。出産のときは、一定の料金で保険証を借りて病院の料金を現金で払う。保険証の所有者は政府からもらう30万円をポケットに入れる。福建省から来た不法滞在者は誰か（通常、保険証の所有者）に50万円余りを払って新生児を中国の家族にとどけてもらう。
5. 当初のビザの滞在資格に合わせるため日本に来た最初の目的を「一層の勉強のため」と答えた者がいる可能性がある。
6. 2003年の1人当たり平均年間所得が農村地区で3,734人民元（466米ドル、4万8,000円）、都市部で1万人民元（1,250米ドル、13万円）の地域（中国国家统计局2004年調べ）では10万ないし20万人民元は大きな負担である。
7. 合法的滞在資格を失った中国人滞在者を意味する隠喩。
8. 日本文部科学省
9. 日本への密入国者は大部分が福清と長楽から来ている。

6. 資料

<インタビュー記録 1>

リン（28歳）は福建省長楽から来た若い男性である。筆者は東京の宗教集会で彼と会った。リンは1998年に日本で大学教育を受けることを目的として沖縄の日本語学校の学生として来日した。社会的ネットワークとのつながりがないため東京に来て最初の数ヶ月は仕事できなかった。学校をやめてホームレスとなった。カトリック教会に参加して教会員から仕事を世話してもらった。教会員の多くがオーバーステイで逮捕され、数名の幹部会員がいなくなった。リンと面接する前夜、彼と他の会員は夜を徹して教会員の安全を神に祈った。午前10時に彼に会ったとき、彼は起きたばかりのような顔つきで座っていた。この面接調査の時点で彼の望みはガールフレンドを見つけることであった。

G = グラシア（筆者） L = リン（被面接者）

G： 日本へはいつ来ましたか。

L： 1998年に来た。

G： 最初、沖縄へ行ったと聞いたが、東京へ来たのはいつですか。

L： 東京へは2000年に来た。沖縄には1年余り滞在した。

G： 他の人達は沖縄滞在期間がもっと短いですか。1ヶ月だけ滞在したという人もいるとのことだが。

L： いや私の沖縄滞在期間は一番短い。沖縄の日本語学校で学んだ我々のグループの人は皆もっと長く滞在していた。沖縄に来た生徒は私達が最後だった。終電車（末班車）で来たようなものだ。しかし実際に来て見ると思ったより快適ではない。初めは最後まで学習を続けるつもりだったが、東京から来た人が東京の学校を紹介してくれたので東京へ移った。東京へ来てだまされたと気が付いたが、後の祭りだった。

G： 「高授業料の学校」とはどういうものですか。

L： 上海の人が中国人学生の学校探しを支援して料金をとる会社を設立した。もっぱら金儲けを目的として資格にかまわず学生を受け入れる仕組みだ。それを知らず、気がついたときにはビザの滞在期限が切れていた。このため退学せざるを得なかった。

G： カネをとるのだけが目的の学校というわけか。

L： 学校自体は良いのだが、授業料が高すぎて払いきれない。

G： いくらぐらいですか。

L： 現行の基準からすれば非常に高いともいえない。年間70万円だ。しかし、親戚や裕福な友人が支援してくれれば授業料を払えるが、さもなければ生き残るか、ビザの要件

に違反するか、いずれかを選ばなければならない。私には親戚も友人もいなかったので生き残りを選んだ。

G： 日本に来たのは家族のなかで貴方が最初ですか。

L： 家族のなかばかりでなく、村のなかで最初だ。親戚の間では海外へ移住した人が2人いる。1人はシンガポール、もう1人はスペインへ行った。

G： 海外渡航は貴方の村では稀だが、他の村ではどうですか。

L： 我々の地方の他の村では海外渡航は珍しくない。海外移住熱にかかされているのだ。その原因は2つある。第1は、地元には仕事がない。第2に、海外に出稼ぎに行く人は皆金持ちになる。金持ちと極貧の中間層はみな生活向上のため命がけで外国に行く。旅行の費用をどうするかというと、高利で借り入れるのだ。

G： 金利はどのくらいですか。

L： 月利1.2%だ。年間にすれば10%になる。このため学校に通っている私の友達は何金も払えないのが実情だ。彼は近く大学を卒業するが、「君のように7、8年アルバイトをしたが無一文だ」と話していた。カネがないからガールフレンドもない。気の毒な状態だ。

G： 貴方はがむしゃら（盲目）に海外へ出たというわけか。

L： 海外渡航など考えてもみなかった。それは偶然の出会いがきっかけとなった。従妹が町で仲介業者（中介）に会った。彼女は外国に行きたいかと私に尋ねた。仲介業者は学校からパンフレットを取り寄せ、書類をそろえた。ビザが取得され、私は渡航せざるを得なくなった。

G： 貴方は全部でいくら払ったのか。

L： 私は300万円近く払ったが、このうち50万円は仲介業者の手数料、50万円が供託金だった。供託金は20万受け取ったが残りはまだ払い戻しを受けていない。その学校は閉鎖され、他の学校に買収された。事情を聞いたら、「多数の学生を入学させてくれたら、供託金を返す」と言われた。

G： 彼らは中国人学生を食い物にしているのですか。

L： その通りだ。私はすでに1回だまされた。別の人を引き入れてだますわけにはいかない。だから供託金を取り戻すことはできない。

G： 貴方は沖縄へ行った最後のグループなのか。

L： そうだ。私は最後に不法滞在者となった1人だ。私のグループには約50人の学生がいた。少なくともその半分は法的滞在資格を保持していると思う。現在、学生はすべて滞在資格を保持しようと努めている。最近の学生は裕福な家庭の人達であり、そのうえ日本の警察が不法滞在者の取り締まりを強化していることも事実だ。

G： すでに2000年に雰囲気が変わりつつあると感じていましたか。

L： そうだ。そのうえ他に選択肢があるのに滞在資格を捨てたいと望んでいる者はいな

い。私は色々なことをしたいが、滞在資格がないからできない。だが、借金と利息の重荷を抱え、家族に負債を払う資力がなければ、どうすればいいだろうか。

G： 沖縄では収入が少な過ぎたと思うのだが。

L： 私は月 20 万円余り稼いだ。休む間もなく働いている感じだった。午前 5 時にバイクで帰宅し、ひと寝入りして午前 9 時には起床して学校へ行く。学校は午前 10 時から午後 3 時まで。放課後は新聞配達をする。それから皿洗いをして徹夜で働く。借金を返すため、学校への出席を延期して働き、借金を返してから学校に行く人もいたが、今思うとそれが正しかった。滞在資格があれば後で立ち直る（翻身、fan shen）ことができる。

（朝食をとるため休憩： リンは胃潰瘍のためまずミルクを飲まなければならなかった）。

G： 貴方の学生グループは皆、同じ地方から来た人ですか。

L： 知っている人はいなかった。私の村から来たのは私だけだった。

G： 海外渡航を決めたとき、両親は悲しみましたか。

L： 父は国内には私の仕事がないのだから、この際、外地で何かを学ぶ必要があるとの理由から渡航に賛成したが、母は当然のことながら悲しんだ。だが仕方がなかった。

G： 貴方は一人子ですか。

L： 私は長男だ。弟が 2 人、妹が 1 人いる。日本への渡航のとき母は出産する予定だった。

G： 貴方の母は長男として家族を支えるよう頼んだと思うが。

L： その通りだ。

G： 貴方にしてみれば、渡航は難しい決断だったと思う。

L： しかし、私には学習意欲がある。今のような状態で終わりたくない。今でも郷里の教師は私が日本の大学に進学したと思っている。私は日本に来たことを悔いている。

G： 郷里ではよい生徒だったのか。

L： 成績はさほど良くなかったが、良い生徒だった。中学から高校の終わりまで級長だった。学生委員も務めた。先生方は私を好いてくれた。村の人もすべて私を高く買っていた。だが、プライドが高いために惨めな姿で郷里に帰るわけにはいかないのだ。

G： 惨めって。

L： 大学に入れなかったのは打撃だ。あれもこれも失敗ばかりで、あれもだめ、これもだめで落ち込むことがある。

G： 日本での大学進学に大きな期待をかけていたのですか。

L： その通りだが仕方がなかった。日本に来たときは不況で仕事がなかった。日本に 6 年半いるが、この間、9 ヶ月は職がなかった。最初の年は約半年間、働き口がなかった。

G： 沖縄ではどうでしたか。

L： 新聞配達の仕事しかなかった。月給 2 万円で生計を維持するのがやっとだった。東

京へ来た時は最悪だった。4ヵ月仕事がなく、東京では何もかも高い。この時期は餓死寸前だった。この地に知り合いがいなかったためだ。母が日本の知人の電話番号を教えてくれたのはずっと後のことだ。当時は赤羽から王子の学校まで歩いて通った。毎日パン一切れで過ごした。月謝を払ったあと1銭も残らなかった。アパートにはガスストーブもテレビも何もなく、私と本の山だけがあった。

G： それは大変だった。絶望しましたか。

L： いや、このような苦境にあっても絶望はしなかった。神を信じていたからだと思う。私の一家はカトリック教徒だ。しかし郷土にいた頃はこの信仰は誤りだと思っていた。学校では神はいないと教えられた。その礼拝は古めかしく、迷信のように思われた。私は常に矛盾を感じながらも信仰を保持したのは母にこの信仰を捨てないと誓ったからだ。

G： 当地の困難を切り抜けてきたのはひとえに信仰のおかげだったということか。

L： その通りだ。

G： 日本には友達も親戚もないのか。

L： 同級生がいたが、彼は自分のことで手一杯であり、私を援助する余力はない。その上、私は援助を頼むのが嫌いだ。特にあまり親しくない人には頼りたくない。これは損な性格かもしれない。

G： プライドが高いということでしょう。東京での最初の仕事はどのようにして見つめましたか。

L： 教会を通じてだ。教会の人が仕事を紹介してくれた。あとで私達は親友になった。

G： この点では教会が力になってくれたわけだ。

L： そうだ。しかしこれは実際的な生活面の援助よりもレベルの高い救いだ。日常生活の面倒をみることはできないが、心を救ってくれる。そこには心理的な支援がある。我々の日常生活にはあらゆる種類の偏見が満ちている。時には合理的と思われる人が職場で不愉快なことを言うことがある。様々な状況の下で様々な圧力を感じる。郷里の家族が借金から逃れようと努力している我々に対する思いやりを欠く時は特にそうである。中国にいる家族に言ってやりたい。「日本にいる娘が何をしているか、夜働いているのではないか、十分に睡眠をとっているか、尋ねてやりなさい。娘に大きな圧力をかけてはならない」と。

G： 中国には日本にいる娘に大きな圧力をかけている家族があるということか。

L： 沢山ある。私はホステスやマッサージ嬢として働いている少女達を知っている。彼女達は非常に親切だ。なぜこのような仕事をしなければならないのか。家族が出稼ぎを強要しているからだ。娘を金銭製造機のように扱っている。「戻ってくるな。戻るにはカネがかかり過ぎる」「パトロンを見つけてカネを稼げ」という。娘を海外に渡航させたときの初心を忘れているのだ。家族は娘が家族全体の幸福のためではなく、自ら良い生

活をすることを望んでいたはずだ。

G： 貴方は幸運にも合理的な両親を持ったがゆえに他の親達もそうあるべきだと考えるのでしょうか。もっぱら出稼ぎのため日本に来た人達を私は知っています。彼らにとって海外への渡航は金儲けの唯一の手段なのでしょう。

L： 高望みをしなければ、良い暮らしができるだろう。誰も大会社の社長になれるわけではない。しかし、例えば私の従兄弟が日本で電気製品のメンテナンスショップを開き、年間10万人民元（130万円）を儲けたとしよう。賃金の格差があるためこれだけのカネが儲かったと考える人がいるかも知れない。事業を起こすために借金をしたことは度外視する。我々の場合も同じようなことが言える。人々は潜在的利益のみを考え、コストを考慮しないのだ。

G： 貴方は日本での苦難を予想していましたか。

L： 多く働かなければならないと考えてはいた。しかし日本の自然環境については知っていたが、社会環境については何ら知るすべがなかった。私は学生であったから、先生にどのように対応するべきか知っていたが、ネットワークにどのように加わるかを知らなかった。これが私にとって日本での最大の失敗であった。

G： 貴方は中国の学校を卒業して2年間国内で働いたのですか。

L： 学校を出て3年間過ごしたが大して働かなかった。叔父の養豚場経営を手伝い、バイクの修理方法と電気製品のメンテナンス技術を少し学んだ。漢方薬草店の会計係をしながら漢方薬を勉強したこともある。田舎に住んでいるのだから獣医の勉強をしようかと思ったこともある。獣医になっても裕福にはなれないが、平均よりは上の生活ができる。こうした時に日本へ行く機会を得た。

G： 日本へ来たとき夢を抱いていましたか。

L： 我々は皆、何らかの夢を持っている。金を掘り出せると思って日本へ来たが、何もなかったという意味のことをいった同級生が何人かいた。

G： 貴方の村から日本へ来たのは貴方が始めてだと言ったが、他の国へ行った人はいましたか。

L： 海外へ渡航した人はドイツと米国の各1人を含めて4、5人いた。しかし彼らは一族がずっと以前に移民として渡航しており、それに合流したものだ。私の世代では3人ほどいた。最近、故郷に電話で聞いたところではそれ以上はいない。郷里の人達は海外ではなく、中国の別な土地へ行って様々な商売をしている。故郷では生計の道がない。どの家族もわずかな水田を持っているだけであり、家族全員を養っていけない。海や水中の砂洲すらも売られてしまった。

G： なぜ。

L： 政府が売ったのだ。以前はすべての世帯が水域の一部を所有してカニを養殖していた。ところが全水域を買い取った人が養魚場を経営し、利益は地元還元されない。そ

のカネがどこに流れているのか誰も知らない。

G： 貴方の村の経済状態はどうですか。

L： 新聞はいつでも良好だと報じているが、実際にはかなり悪い。出稼ぎに行かないとやっていけない。多くの人が出稼ぎにいており、内陸部の農村よりはましな状態だ。内陸部の農民は我々の町や村で働いている。我々の地域の工場は地元民ではなく、外部の人を雇っている。我々は彼らに土地を売ったがそこに建てられた工場では働けないのだ。

G： 貴方の両親は教育を受けていましたか。

L： 困ったことに全く受けていない。父の世代の人は一般に学校に行かなかった。しかし両親は私が教育を受けるよう望んだ。私の家族は豊かではないが、勉強が嫌いな末の弟を除いてすべて高校を卒業している。これは村では稀なことだ。私の世代は小学校を卒業するか、中学に2年間通うのが普通で高校卒はほとんどいない。私が日本に来るまで、私の村から大学に進学した人はいなかった。中卒を対象とする教育プログラムに加わった者が1人だけいた。

G： 貴方は日本での学業で続かなかったことを後悔していると思うが。

L： そうだ。本当を言うと今でも勉強を続けたいと思っている。

G： まだチャンスはあるはずだ。どのような機会を望んでいますか。

L： 私は30歳に近いので遅すぎる。

G： 年齢は問題ではない。大切なのは滞在資格だ。

L： 違いない。私は、今日はここにいるが、明日はどこにいるか分らない。

G： 不法滞在のことを恐れているのか。

L： 正直いって、送還されるなら、それに従う。結局、これは私自身がしたことだ。だれも（滞在資格からの離脱を）強制したわけではない。私が選んだ道だ。

G： しかし貴方は4ヵ月も仕事がないという困難に見舞われている。

L： もっと熱心に働いていたなら切り抜けることができたはずだ。当時、友達は4万円稼いでおり、私に1万2000円をくれて、「まず家賃を払いなさい」といった。私の家賃は2万円だった。

G： 貴方の学校は住宅を手配してくれましたか。

L： いや自分で探した。当時、四谷に学生の住宅探しを支援する学生サービスセンターがあった。

G： つまり貴方はすべて公式経路を通じていた。親戚と同居し、友人から仕事を紹介してもらっている人もいるのだから貴方は運が悪かった。

L： まったくついていなかった。

G： 東京に来るまでに借金を全部返済しましたか。

L： いや、沖縄では5ヵ月仕事がなかった。7ヵ月間、必死で働いたが、数10万円稼い

ただけだった。最初の上半期授業料 40 万円を払った後、ほとんど手元に残らなかった。2 学期には払うカネがなく、学校に行くのをやめた。授業料をしばらく待ってもらった学生もいたが、私はそれを望まなかった。私の日本語はあまり上手でなかったが、先生方は私に好意を持ってくれた。私を見かけると、どうして学校にこないのかと尋ねた。学校へ行けば授業料を催促されるため行かなかったのだ。こうして私は退学した。

G : 借金、授業料を払い、生活費を支えなければならなかった。そのストレスのため胃が悪くなったのですか。

L : 多分そうだ。1 年前に仕事に出たとき不調に気がついた。運命だとしかいいようがない。

G : 今の仕事は教会の友人の紹介で見つけたのですか。現在は 2 つ仕事をもっているのか。

L : 仕事はすべて友人に紹介してもらった。彼らは私をみて、弟のように扱い、大丈夫と思って仕事を世話してくれた。多分、シスターが私には仕事が必要なのだと話してくれたのだと思う。

(ここで彼は故郷の両親のことについて話をした。両親を慕っており、非常に和やかな家族環境がうかがわれた。彼が中国にいた頃に他界した祖父と一番仲が良かった)

G : こちらに来て最初の 4 ヶ月以後は仕事が絶えなかったわけですか。

L : いつも仕事があった。

G : 毎月いくら送金していますか。収入の半分を送金しているのですか。

L : 私の家族は暮らし向きが良く、もう私の送金を必要としていない。送金をする必要がないのだ。送金しても私のために銀行に貯金してくれるだろう。両親は私に世帯を持ってもらいたいと願っており、「送金はするな」といわれたが、かなりの額を送金してきた。

G : 毎月、貴方自身が大体いくらぐらい使い、どのくらい送金しているのですか。

L : 最近、出費が増えてきた。毎月約 30 万を送金している。収入の半分だ。手元に置くカネが多ければ使ってしまうから意味がない。

G : パチンコに行く習慣がありますか。

L : そういうのは嫌いだ。ギャンブルはすべて好まない。

G : 現在、最大の問題は何ですか。

L : 合法的な滞在資格をもっていないことだ。

G : いつ帰国するかははっきり決めていますか。

L : 誰かと出会うことができるかどうかによる。出会ったなら、神が許すなら、さらに数年、滞在してカネを貯める。誰とも出会わなかったら、あるいはここで結婚するプランがなければ、両親は長くてもあと 1 年、日本に滞在することを許すだろう。両親は私

が 30 歳になるまでに帰国するよう望んでいる。今帰国すれば、少し老けているが、郷里の人は外国に行っていたことを高く評価するだろう。40 代になって帰国すれば、伴侶をみつけることができないだろう。

G： それでも彼女はカネ目当てに貴方を選ぶかもしれない。

L： その通りだ。すべては日本で結婚するか否かにかかっている。結婚すれば 1 年以内に帰国する。もう少しカネを貯める必要がある。両親は今年になって私の貯金を始めた。それまで送金はすべて返済にあてられていた。今では生活が楽になっている。兄弟も結婚している。両親は「これ以上カネを使う必要はない。息子も 30 だ。彼が世帯を持つための資金が必要だ」と言っている。しかし 1 年以内にいくら貯金できるだろうか。月 15 万円として 12 ヶ月で 10 万人民元程度だ。今帰国すれば、結婚するだけでなくってしまう。

G： 町で家を買うとすれば、もっとカネがいるだろう。本当は故郷に帰りたくないのではありませんか。

L： 父は村に 5 階建ての家を建てた。子供がそれぞれの階に住み、最上階と 1 階を共有させたいと言っている。しかし郷里に戻るのは現実的ではない。住宅を手に入れるにはあと 1 年働かなければならない。

G： 町でマンションを買うには 30 万円が必要だ。

L： 私もそう思ってあと 2 年以上ここで働くことを考えている。日本で結婚すれば、後 2 年滞在するだろう。中国に戻るとしてもどこに住むかが問題だ。私の郷里や嫁の村には事実上住めない。

G： 現在ガールフレンドはいますか。

L： まったくない。

G： 「私の村」「彼女の村」というが、貴方はすでに長楽の村の人と結婚することを決めているように聞こえるが。

L： ここにいる人は実際にはすべて長楽か福清から来ている。

G： つまり貴方は教会外部の人は余り知らないということだ。

L： 私の年齢で外部の人は私を敬遠するだろう。

G： 年齢は別として、貴方が教会外部で社会活動を余り行なっていないのは事実だ。

L： 最近、若い日本人と付き合い始めた。日本の若い人は年寄りよりも近づきやすい。第一に言葉の問題があり、第二には年配の人、上流階級の人には気難しい。若者とは議論することができるので親しみやすい。しかし、年配者は若者ができないような支援を与えてくれることができる。

G： どのような支援か。

L： 賃貸住宅などだ。私が今住んでいるアパートは帰国した教会員が借りていた。アパートを借りるのは容易ではないのだ。

G : 賃貸契約は更新しなければならぬのか。

L : 契約更新は問題ない。私は大森に住んでいる。

G : 大森なの。

L : 取り締まりの厳しいところで、最近、同居している仲間が2人逮捕された。

G : 皆が逮捕を恐れているのですか。

L : 恐れていないといえばウソになる。逮捕されて強制送還されるよりは自分の意志で帰国する方がよいことは言うまでもない。

G : 近頃は取締りが厳格なようだが。

L : 毎日、誰かが捕まっている。職場のマネジャーは「君達も気をつけろ」と言っている。

G : マネジャーはあなたが不法滞在者であることを知っていますか。

L : 応募するとき書類を提出したが、知っていると思う。マネジャーは我々の労働を必要としており、経営の都合上、我々を失いたくないのだ。

G : 最近の建設現場は人手不足でしょう。

L : 私は建設現場で働くことはできない。

G : 現場で働かざるを得ない人もいるでしょう。

L : それは知らないが、今では密航して来る人はいないと思う。

G : 今でもいます。

L : 信じられない。

G : 教会員以外に日本人の友達はいますか。

L : いるが職場で付き合いだけだ。彼らに知られたくない秘密があるので一緒にでかけることは避けている。深く付き合いえば、滞在資格がないことがばれてしまう。要するに私は劣等感を持っており、滞在資格のない人と一緒にいる方が気が楽だ。

G : そこでほとんど教会員とばかり付き合いわけなの。

L : そうだ。滞在資格のない部外者も避けている。複雑な事情があるためだ。現在は状況が厳しく、教会員でも外出を控え目にしている。以前にあったことだが、誰かが密告すると沢山の人が巻き込まれる。教会員との付き合いは以前はもっと多かったが、結婚する人が増えて、彼らは家族の世話に没頭するようになった。

G : 友達は大多数が同地区の人ですか。

L : 同じ村の人はいないが、ほとんどが同じ地方の出身だ。私は同級生とも付き合いのない性格だ。私を好いてくれる人、私と同じような経験を分かち合うことのできる人と付き合いたい。私と違うタイプの人とは付き合えない。

G : 同級生とはほとんどが沖縄の学校の人ですか。

L : そうだ。東京では2ヵ月学校に通っただけで、北京、韓国を含む外国の学生もいたが、友達を作るには短かすぎた。現在の私の交際の輪は教会だ。

- G： 東京の人は付き合いやすいと思いますか。
- L： それには違いないが、誰もが親切というわけではない。神父さんもそう言っていた。良い人とそうでない人を見分けなければならない。
- G： それは正しい。日本では中国人は複雑なグループです。
- L： 中国人の職場は建設現場、レストラン、娯楽の3種類に色分けされる。我々のステータスの者は基本的にこの3つしかない。その生活は仕事一点張りで労働時間は私など短い方だ。週7日間働いている。私が働いている工場の同僚は週55ないし60時間働いている。1日12-13時間、1年365日の労働だ。彼らには十分に稼いだという感覚が不足している。あちこちで働く結果、フルに働くことになる。「今日はいくら稼いだ、今月はいくら送金できる、良い仕事はどこにある」というのが彼らの口癖だ。郷里に電話をかけることも忘れない。毎日かける者もいる。
- G： 送金は今でも地下銀行を通じているのですか。
- L： そうだ。この種の業者は中国国内に十分な資金を持っており、送金額をそれで払い、滞在者から預かったカネは徐々に送金できる。リスクはあるが有利な商売だ。
- G： 金利は今でも1万円につき100円ですか。
- L： 100円から120円だ。120円ときは、中国国内で手数料をとらない。さもなければ中国の家族から1万円につき2元(26円)の手数料をとる。正規の銀行並みだ。
- G： しかし彼らは正規の銀行よりも仕事が早いのではないですか。
- L： たしかに早い。普通は2日、特別な場合はもっと早いこともある。日本でカネを払えば、郷里の家族に電話をかけてすぐに受け取れる仕組みになっている。
- G： どこに地下銀行があるのか簡単にわかりますか。送金したい人は誰に尋ねるのですか。
- L： 簡単に分かる。誰でも送金しなければならないのだから。他の地方のことは分らない。我々の地方では数人の送金業者がいるだけだ。そのうち1人がだめなら他の人に頼めばよい。中国国内にも大勢の人が動いており、町ばかりでなく村にも支店があるようだ。
- G： それで正規の銀行よりも能率がよいわけだ。
- L： 日本政府は我々の送金経路を阻止している。正規のルートを通じて送金すれば安上がりだ。以前は郵便局を通じて送金していたが、政府が不法滞在者(「黒戸口」)が郵便局から送金していると指摘したため、郵便局は送金の扱いを中止した。政府が我々の生きる道を閉ざしたのだ。日本は国が小さいので日本人は韓国人よりもけちなのだと思うことがある。韓国にも不法滞在者がいるが、2年前に特例措置がとられたと聞いている。韓国政府はすべての不法滞在者に登録を義務付けたうえで、1、2年は働いた後、自主的に帰国することを認めたという。日本ではこれは不可能だ。特別に許可される場合もあるが、わずかな滞在者が対象となるだけだ。日本には数百万の外国人がいるのではな

いのか。日本人は逮捕に熱心だが、米国ではこのようなことはないと思う。

G： 米国では路上で不法滞在者が逮捕されるようなことはない。貴方は中国人、特に福建省人として日本で差別扱いされたことがありますか。

L： あった。職場では毎度のことだ。求人に応じたとき、福建の旅券をみるなり「いらぬ」と言われた。いらぬと言われて抗議するわけにもいかない。その権限もないし、元はといえば私の地方の出身者の所業に原因があるのだから仕方ない。

G： だが、貴方を必要とする所もある。さもなければ職をみつけれないのだから。

L： 正直いって自分では職を見つけられない。仕事はすべて他人の紹介によるものだ。就職の面接を受ける時、推薦状がないと採用されない。先方は紹介があれば安心する。女性は安心感をもてるから扱いがよい。以前に私が働いていた渋谷のレストランに夜、泥棒が入った。社長が調べると足跡がみつかった。ある日本人従業員が「中国人に違いない」と言ったので、私は「なぜ足跡から中国人であり、日本人ではないといえるのか」と聞いた。私はこのような偏見を経験したことがあるが、同郷の人の所業が原因となってこのように思わせるのだから処置なしだ。

G： マスコミが中国人の犯罪を大きく報じるため恐怖感が生じる面もあるのではないか。

L： マスコミは人々の注意を引き寄せたいので良い行いよりも悪い行いを報じる傾向がある。中国経済が好転してきたことは希望を持たせる唯一の要因だ。中国人が悪事を働かなくなれば、我々の扱いも良くなるだろう。このような問題の解決は貴方のような人に頼るほかない。

G： 貴方の滞在資格の問題を解決できる方法を考えたことはありますか。

L： 日本人か永住者あるいは定住者と結婚して滞在資格を取得するしか方法がない。私は法的な滞在資格を持って来日した。だから滞在資格を申請するため帰国する必要はない。無論、偽装結婚など非合法なことをすることもできる。偽装養子となった者もいるが、聞いたことがあるか。私はこのような違法行為をすることはできない。

G： 日本女性との結婚を考えたことがありますか。

L： （笑いながら）考えなかったこともないが、私にはできないと思う。

G： どうして。

L： 日本の女性はカネ使いが荒いという印象を受けた。

G： 日本の女性は質素な方だ。有名ブランド品を誰もがいつでも買っているわけではない。多分、貴方は本格的に交際したことがないのではないかと思う。

L： 街を歩いている女性が有名ブランド品を持っていたのを見かけたただけだ。私自身は1万円以上の服を買ったことはない。高価な服は必要ないのだ。私がする仕事はその種の衣服を必要としない。最近のように取締りが厳しくなれば、毎日、背広を着ていることもないのだが。

G： 日本女性とはデートしない。つまり社交の輪が非常に狭いということか。

- L： 正にその通り。私だけでなく、私のような者はみなそうだ。だからガールフレンドができない。友達がいらないから悪くなる。避けられないことだ。
- G： 「悪くなる」とはどういうことですか。
- L： 街には遊び場（風俗店）が至るところにある。ガールフレンドを見つけることができないからカネを捨ててに行く者が多い。私の周辺の人々は皆 20 代後半だ。信仰のある人達は違う。我々には信仰による制約がある。マッサージ・クリニックに行くと女性が入ってくれば、私は「女性を目当てにきたのではない」と言うだろう。
- G： ガールフレンドを見つけてくださいと神に祈ることがありますか。
- L： 祈ることはあるが、神がその祈りに答えるかどうか分らない。
- G： 何人かの女性が貴方に興味を示していると聞いたが。
- L： 真剣に伴侶選びと取り組んだことはない。今後の人生を共にするとなれば手軽に結論を下すわけにはいかない。私は内気な方だ。伴侶はもっと陽気な方がよい。さもなければ、2 人とも黙り込んでしまう。
- G： 貴方は家族から圧力を感じたと思う。兄弟も近く子が生まれるそうだが。
- L： たしかに圧力を受けている。言い訳をし続けてきた。去年は家族に来年こそ問題を解決すると述べた。家族は年内解決を迫っている。
- G： 家族は郷里の女性を貴方に紹介しましたか。
- L： 紹介してくれたが役に立たなかった。まだ帰国していないし、会ったこともない。
- G： 食べ物ではないのだから、期限をつけるというわけにはいかない。結婚は強制されてもできるものではない。
- L： 家族は高望みをしないよう求めた。高望みはしてないが、今後の人生を共にするのだから納得できるような人と一緒になりたい。悪い面より良い面の方が多くの方がよい。でも私が好きになっても彼女のほうが私を相手にしないかもしれない。私は無口だし、カネもない。私と共に歩む人がいるだろうか。問題は複雑であり、両親は仲がよいが、あれほど仲のよい伴侶を見つけることができるかどうか不安だ。
- G： 両親は貴方が毎週、教会に通っていることを知っていますか。
- L： シスターが私の村に行くと私達のビデオを見せたので、安心したと思う。私には冒険心がない。もっと積極的であるべきだと思っているが、内気すぎるのだ。
- G： 冒険的な女性が貴方を見つけるかもしれない。
- L： 当地ではそういう人に会ったことがない。
- G： 貴方がどんな人を見つけるかについて両親は何らかの考えをもっていますか。
- L： 両親は何らの条件も示していない。相手が日本人でも中国人でも国籍はかまわない。私が幸福な結婚をしてくれさえすればそれでいいと思っている。
- G： 日本に来る前に教会のことを知っていましたか。
- L： 知らなかった。叔父の友人を通じて教会を知った。彼は東京にいたことがあり、現

在は大阪にいる。国費留学生で日本に来た。彼が叔父に電話番号を知らせ、叔父が母にそれを伝えた。そして私が教会の門を叩いた。しかし誰も答えなかったので、電話をかけた。シスターと電話で話をして礼拝に出席するようになった。

G： 家賃はいくら払っていますか。

L： 非常に高い。8万5,000円だ。今はほとんど私だけが住んでいる。一緒に住んでいたアリンは引っ越した。そのあとジーとその弟（いずれも教会員）と同居していたが、ジーは逮捕され、弟は帰宅する勇気がなく移転した。そのため家賃は私1人で負担しなければならなくなった。

G： そこに住むのは危険なのですか。警察はその地区に中国人滞在者が大勢いることを知っている様子ですか。

L： 警察は内々で動いているようだ。私は網の目をくぐることに望みをかけている。

G： 最後に言わせてもらおうと、貴方は背広がよく似合う。

L： 事情は込み入っており、私は職場に着くと作業着に着替えなければならない。何度も衣服を変える必要がある。面倒だがほかに方法がない。だから背広を着ているのだ。

後記

この面接調査の後、別な教会員は、リンが教会をみつけるのが遅過ぎたと私に語った。もっと早ければ、教会は彼が授業料を払えるように世話をすることができたはずだ。彼は本当は学問を続けたかった。彼には才能があるが、経済的な事情で学問を断念したことが自尊心を傷つけた。

「彼は上野に数ヵ月住んでいたことがあり、教会員が訪れると、上野公園を歩きながら、「私の家に良く来てくれましたね」といって歓迎した」という。彼が最初に教会を訪れたとき、神父は「たいしたことはできないが、お役に立つことがあれば、何でも言ってください」と彼に述べた。そのあとシスターがバッグを彼に渡した。あとで開いてみると、なかには米が入っていた。それを調理する器具もなかったが、彼は感動し、家庭をみつけたような気分になった。

<インタビュー記録 2>

福建省福清から来たワンという女性(46歳)は2番目の配偶者ビザの発給を待っていた。彼女は1990年に始めて日本に来た。中国で離婚したあと、99年に偽造旅券を使って再び来日した。日本ではマッサージ業に従事し、最初はマッサージ師であったが、後にマッサージ店のオーナーとなった。12歳年下の日本人と結婚し、年齢を偽って最初の配偶者ビザを取得した。末娘を呼び寄せるため、身元を偽って本当の年齢で第2の配偶者ビザを申請した。彼女は教育を受けていないが、事業に成功し、日本と福清に財産を持つ身となった。

1. 新しいビザの発給を待つ

ワンは3年前に日本人と結婚し、2006年まで有効な配偶者ビザを持っていた。3年前に配偶者ビザを申請したとき、ある人に頼んで文書を偽造し、年齢を12歳若くした。夫は2歳年下だが、彼の方から結婚を望んだと彼女は言っている。年下の男との結婚は偽装と思われる恐れがあると彼女は考えた(若い夫はなぜ彼女が年を偽るのか理解に苦しんだ)。

彼女は現在、中国で高校に進学しないで看護婦の職業学校で学んでいる末娘を呼び寄せようとしている。虚偽の年齢を申告し、扶養家族がないことになっているため、娘を呼び寄せるのが難しく、弁護士と相談した。彼女はその間の事情を説明しようとした。筆者は理解に苦しんだが、他の地方から別な偽装滞在資格を買い入れたらしい。その際、年齢は偽らず、扶養家族が1人いることにした。このケースですでに30万円を払ったが7月に申請して以来、入管当局から音沙汰がない。

彼女によると、年齢と血縁関係の修正を望んだが、入管当局が許さなかった。そこで日本人と結婚している不法滞在者として申請し直した。筆者は事情が複雑すぎるので、もっと簡単な方法がないものか、福清の人はなぜこのように物事を複雑化したがるのか、と思った。ワンとその夫が本物の夫婦であることは事実なのだ。

ワンは入管当局の係官が訪れるかもしれないと思って毎日自宅で待機している。彼女の父は79歳で重病であり、彼女の帰国を待ち望んでいるという。彼女は父の死に際に会えないのではないかと心配しており、このことを入管当局に言えば、手続きを早め、帰国できるようにしてくれるのではないかとと思っている。彼女は父の世話をできるのは自分だけであり、兄弟は何ら手助けしようとしないと話している。

2. 貧しい家庭環境

ワンは貧しい家庭の出身だ。若い頃、一家7人が父の給与で生活していた。小学3年生の時、授業料が70円から35円に減額されたにもかかわらず、それを払うことができずに退学した。教育を受けたのは通算2年に過ぎない。読みはカラオケから少し学び、姉から文字を習ったがほとんど読めない。

中国内で色々な仕事を手がけ、各地を転々とした。1980年代の初期に一族から集めた30万人民元の現金を持って浙江省に綿花の買い付けに行った。しかし彼女の家族は80年代の末までに裕福になることはできなかった。それどころか事業に失敗して借金が残った。

3. 最初の日本渡航

ワンは1990年に初めて日本を訪れた。彼女の叔父と兄はすでに日本にいた。彼女は学歴と年齢を偽り、語学の学生として来日した。年齢は実際よりも12歳若い22歳ということにした。23人の申請者のうち学生ビザを取得したのは彼女だけであった。

彼女は日本で福清市出身者の移民ネットワークを利用できた。最初はパチンコ店に勤めた。2年と20日間日本に滞在した後、中国へ帰国した。彼女が稼いだ金で夫はガソリンスタンドを開業した。河南省にいる福清出身者の間ではガソリンスタンドは人気のある事業であった。彼らは6カ所のスタンドを所有し、うち3カ所は夫、他の3カ所は彼女自身が経営した。

4. 最初の夫と離婚

彼女の夫は河南省滞在中に愛人を作った。彼女が帰国したとき、この女性は妊娠していた。ワンは非常に失望した。彼女は一家の稼ぎ手を自負していた。夫はよく働いたが、運が悪くて金儲けに縁がなかった。「2人は初めから互いに愛し合っておらず、結婚したのが間違いだったと気が付いた。自分は家族の幸福に全力を尽くしたのに夫に裏切られて途方にくれた」と彼女は話している。

中国での数年間、彼女と夫の間の溝は埋まらなかった。彼女は夫の愛人に2人目の子が生まれようとしたとき離婚を決意した。夫は離婚に反対したが、不義の子2人を世話することに耐えられなかった。

1999年に2人は離婚した。その後、夫は他の女性にも手を出したことを告げた。4人のメイドのうちの3人がこれに含まれていた。彼女は心を痛めた、ガソリンスタンドを売って再び日本に渡航した。

5. 2度目の渡日—偽造旅券と事業

彼女は20万人民元(260万円)を払って偽造旅券を入手した。自身の写真を貼り、他人の名前でビザを取得したもので、入国と同時に不法滞在者となった。

「今はここにいるのだから、金儲けに専念したい。池袋の風俗店のピラを配る仕事をみつけた。危険な仕事だと人は言ったが、彼女は『捕まえるというならおとなしく捕まる』と言った。

「ピラ配りは望むところではなかったが、仕方なかった。後に私は店内のホステス(小姐)となった。年をとっていたが、そうせざるを得なかった。それはイエローショップ(セ

ックスサービスを提供する店) だった。こんなことをしておれるか、と思って店をやめ、自分の店を開くことにした」という。

店に勤めていたころ、客にセックスを要求された。あるとき北京からきた中国人と一緒に入浴し、セックスサービスをするよう求めた。彼女は「同じ中国人なのにどうしてそんなことをいうの。私は貴方の母親の年齢よ。息子は貴方と同じ年頃なの。私に甘えるのは母親に甘えるようなものなのよ」と言ったが、彼は納得せず、“お楽しみコース”を希望し、セックス抜きならお楽しみコースにならないという。私は泣き出してマネジャーに言ったら、上海出身の女性が代わりを勤めたいと言った。彼女はすでにその経験があった。私は彼女に感謝した。彼女は男にセックスに対して1万円の特別料金を請求した。彼がそれを断ったので彼女はサービスをしなかった。男は不満でマネジャーに料金の返済を求めた。マネジャーは6,000円を返した。彼女はマネジャーが弱腰だと思った。彼は警察に訴えられることを恐れたのだ。結局、男は4,000円を払い、その女性は2,000円をもらった。

彼女はセックスサービスを自分ですることを望まず、自分は力仕事のマッサージをしたと思った。そこで5万円を払ってマッサージの仕方を学んだ。この仕事を始めてみると、多くの固定客がついた。年配者が彼女の技量を高く買ってくれた。いわゆる「クリーンショップ」は常連がいないと営業が成り立たない。

6. 自前の風俗店

彼女は2番目の夫と結婚した後、風俗店を開いた。風俗営業は最低でも月50万円から60万円は儲かる。元手もいらない。店と女性達が利益を山分けする。自分の店を持って月300万円を稼ぎ、9人を雇った。なかには年に1,000万円を稼ぐ女性もいた。

「“クリーンショップ”の経営は難しい。クリーンを維持しようと思っても少女達が金儲けに走り、秘密で客にセックスサービスをする。部屋にカメラをつけてもだめだ。私はセックスを禁じる規則を定め、ブラウスと下着を脱いでハンドジョブ(打手槍)をすることは認めたが、少女らは皆セックスを始めるようになった」という。

この風俗店を開いてから、彼女は3回捕まったが、いつもすぐに釈放された。最後は少女と客のトラブルでやくざと警官が介入する騒ぎとなった。100人余りの人が店に集まり、彼女は警察に拘留されたが、夫のコネを使って釈放された。

彼女は店を売り、夫の原籍である東京近県に店舗を購入し、賃貸で生計をまかないたいと思った。しかし、「この仕事は一度始めるとやめられない。ほかの仕事ではこのような満足感は得られない。カネは良いものだ」と彼女は言う。彼女によると、福建省からの移民は依然として風俗店経営者の大部分を占めており、上海からの移民、中国東北からの移民がこれに続いている。この方面では日本人の経営はほとんど姿を消した。

数ヵ月を経て、彼女はこの店舗を3,000万円かけて改装し、風俗店を再開した。「最初はこの場所に風俗店があるのかと奇異の目でみられていたが、この店を買いたいという

人が現れたので売却した。「クリーン」であって欲しいと思ったが、すぐに売春宿（打砲店）になってしまった」という。

7. 老後の自助

ワンは年金や子供による介護を望んでいない。よく働いたので年をとっても生活に困らないという。夫の父は田舎に寿司屋を経営しており、70歳で今も働いている。「中国人は引退後、国の世話にはならないので、老後のための資金を十分に確保しておきたい」と彼女は語った。

8. マッサージ店で夫と出会う

彼女は友人が近県で経営するマッサージ店で夫と出会った。彼は地元のパチンコ店の店長であった。「彼は疲れており、背中がこっていて押すと骨が音を立てた。いつも30分間の追加サービスを求め、5,000円のチップをくれた」と述べた。

彼は定期的に訪れ、「デート」に誘うようになった。マッサージ店は2階にあり、1階は女性がデートに応じる「エスコート・サービス店」（出場店）であった。彼女は何度も断ったが、通常3万円か4万円のデート料を「5万円」に引き上げた。彼女は33歳ではなく、実際には43歳であり、離婚の経験があって3人の子供がいる。男は彼女の年齢を推察していたが、年にはこだわらなかった。

彼女は男をさほど好きではなかったが、彼は毎日のように来店した。カネがなくて店の外に出てくるよう要求したこともある。彼はある日、ひざまずいて結婚してくれるよう頼んだ。

彼女は驚いた。日本人でもっと若い女と結婚する機会がいくらでもあるのに、離婚歴のある自分と結婚したいというのは意外であった。結婚してもまた失敗するおそれもあった。自分で働いて老後に備える方針を堅持しようとしたが、彼は引き下がらなかった。

彼女は日本語が分らなかったので、10年以上も日本にいる叔父に通訳してもらい、自分の進み方を改めて、日本人の妻として振舞うことができないと言って断った。「私の方で貴女に合わせるようにする」と彼は言った。それを聞いて彼女は心を動かされ、「中国人の男でもここまで言うてくれない」と思った。

3年間の結婚生活後、彼女は心底、夫を愛するようになった。「以前なら彼が立ち去っても1日ぐらいいはあわてるだろうけれども、忘れることができた。しかし今では彼が私より若い人を見つけて私から離れて行くなら長い間悲しむだろう」と彼女は語った。

彼女は46歳であったが、夫のために子供がほしかった。しかし夫はそれを望まなかった。彼女は最初に日本に永住するつもりはないと夫に語ったが、今では考えを変え、年をとってから中国に帰るかどうか、確信が持てないという。

8. 夫は普通の日本人とは違う

ワンは日本人は利己的でけちだが、夫は他の日本人男性とは違うという。「日本人の男は料理の好き嫌いが激しいが、夫は私が作った料理は何でも食べるし、へそくりもしない」と述べた。

彼は 3,000 円だけポケットに入れ、残りは彼女に渡す。彼らは金庫を持っていて、100 万円たまと銀行に預金する。預金したカネは引き出さない。

他面、夫はルールを破る癖がある。「10 代の時からイラン人など外国人と付き合いていたせいか、キセル乗りのように普通の日本人のしないようなことをする」という。

9. 情け深さ

ワンは喜んで他人を助ける。筆者が「私の友達は貧乏で学校を中退し、飢え死にしそうだ」と話したら、彼女は「その人を連れてきなさい。悪に引き込む（施下水）かもしれないけれど、よかったら仕事を世話してあげる」と述べた。

ワンは息子の元ガールフレンドの面倒もみている。その女性は彼女自身の娘よりも 4 歳若く、中国の中学に通っていた娘の付き添いをしていた。息子が河南省の学生であった当時知り合ったが、息子は彼女と別れることにした。ワンは彼を叱り、離別しないよう説得に努めたが、結局、別れたため、ワンは少女を気の毒に思い、3 万人民元（39 万円）を与えた。ワンは今も少女にしばしば電話をかけ、自分の娘のように扱っている。

ワンがこの女性を信用しているのは金銭の扱いが誠実であるためである。息子がまだ日本にいた頃、彼女名義で郷里へ送金していた。送金額は数百万円にのぼったこともあるが、彼女は間違いを起こさなかった。そこで書類を偽造し、偽装結婚などの不正手段で彼女を日本に呼び寄せようとしたが、うまく行かなかった。「日本に来られなかったのは彼女の運命だ」とワンは言っている。

10. 違法活動

ワンは違法なパチンコの仕方を詳しく説明してくれた。彼女によると、いかさま（打假）で月 100 万円をかせぐことができる。この方法は福清の出身者が 1990 年に始めた。「電波」（“dian bo”）と呼ばれる手口で普通の中国人がやっているよりも危険でスリルのある方法である。これは法律によって処罰される可能性はあるが、パチンコ店側に見つかると、2 度と来るなといわれるだけである。「店長は警察ではないから逮捕することはできない。警察を呼ぶと面倒になる。ほかに沢山の客がおり、警察が調べだすと、恐れをなして誰も寄り付かなくなる」という。

夫がパチンコ店の店長を辞めさせられたのは、その店でいかさまを手助けするように彼女が仕向けたからである。夫はピンボールマシンに細工したのが見つかって解雇された。

この面接調査をするまで 1 年以上も夫はいかさまパチンコをしてきた。彼女は将来の嫁

となる女性を含めてこの道に数人の中国人を誘い込んだ。

筆者が過去2週間に数人の友達がオーバーステイで逮捕されたと言うと、彼女は「偽造文書を使えばよかったのに」と言った。彼女の長男は警察に2度拘留されたことがある。しかし、ビザ追加は偽造であったが、かれは本物の登録証を持っていたので2回とも釈放された。「警察は偽装と本物を見分けられなかった」のだが、次男は別人の旅券で入国したため、逮捕されて送還された。

1.1. 警察の不審尋問

彼女は数回、警察の不審尋問を受けたことがある。あるとき警官が福建省から来たのかと尋ねたので、「何でそのように結論を飛躍させるのか、私が福建省の出身かどうかは貴方の知ったことではない」と彼女は応じた。

彼女の同郷の知人は警察に呼び止められ、身分証明書を見せるよう要求された。彼は驚いて「私の顔のどこに“外国人”と書いてある。あなたは誰でも呼び止めてそのように尋ねるのか」と聞いたという。

1.2. 悪い福清出身者と悪い長楽出身者

彼女の友人には違法行為をしている者が多いが、福清人は長楽人よりもままだと知ったという。福清人は窃盗や強盗をするが、相手は日本人に限られている。これに比べ、長楽人は同国人に対する盗みもするし、誘拐もする。かれらは知れば知るほど、相手を害する公算が強まると彼女は述べた。

1.3. 子供

ワンには3人の子供がいる。長男は学生として日本に住んでおり、いずれ不法滞在者となる。次男は中国の職業学校を卒業し、偽造文書で来日して2年間滞在したのち強制送還された。末の娘は15歳で高校の入学に失敗して扶養家族として日本に渡航しようとしている。彼女は1990年に初めて日本に来たとき、2歳の彼女を夫の母にあずけてきた。99年に2度目に来日したときは、娘は11歳になっていた。彼女は兄弟と共に生活し、メイド(後に兄の女友達となる)によって世話をされた。彼女はこのメイドと2年間、一緒に過ごした。

1.4. 日本語の能力

ワンは学校で学んだことはないが、日本人と意思疎通できる。しかし、彼女は初めて日本に来たとき、パチンコ屋に勤めたので、日本語はうまくない。「パチンコ屋で知り合った日本人は質がよくなかった」と彼女は話している。

1.5. 商売の発想

ワンは現在、中国式の足マッサージパーラーという新商売を考えている。内装をどうするか、必要な備品をすべて中国から輸入するべきかどうか、といったプランを説明した。駅の近くに8.5平方メートルの部屋を月12万円で借り、そこで開業することを検討している。

ワンは商業用物件を買って新事業に投資することに意欲を燃やしている。郷里に商業用地を購入して月7,000人民元（9万1,000円）で貸している。3,000平方メートルもの土地が売り出されており、彼女はもっと土地を買いたいと望んでおり、息子の許婚と一緒に投資しようと誘っている。

ワンの郷里では大住宅を建てるのが流行っている。彼女の友達は1,000万人民元（1億3,000万円）を投じて豪邸を建てた。そこに住んでいるのは夫婦と息子だけである。彼女は自分の家を建てることは願っておらず、商業用建物を買って家賃を将来の生計に当てたいと望んでいる。

彼女は贅沢な家には住んでいない。古いアパートの小さな2部屋に夫とともに暮らしている。家賃は6万5,000円で、室内には高価な家具はない。夫は月に100万も稼ぐのに3,000円以上の靴は買わないという。

1.6. 中国国内の豊かな友人

中国国内の友達は中国各地にガソリンスタンドを経営したり、不動産に投資して巨額の富を得ているとワンは語った。1,000万人民元（1億3,000万円）の家を建てた友達は3年間に2,000万人民元（2億5,000万円）を儲けた。ちなみに彼女がこれまでに日本で稼いだのは2,000万ないし3,000万人民元（2億6,000万ないし4億円）である。彼女の友達の投資利回りは360%にのぼるといふ。「本当に事業に成功している人は日本には来ない。多額の収入を得られない人達だけが海外に出稼ぎに行く。私達は日本にいるのだから稼がなくては」と彼女は語った。

彼女によると、福清市は生活費が高くつく。金持ちが多く、大金持ちは最早、海外に渡った人ではない。海外出稼ぎは中国で所得の低い人のための手段である。

1.7. 子供の安全のためカトリックの洗礼を受ける

ワンの家族はプロテスタントであったが、彼女の前の夫はカトリック教徒であった。次男が病気になったとき、義母は祈りを捧げ、聖なる水をもらってきた。次男の病は癒され、彼女はカトリックのほうが、ご利益があり、三位一体の信仰が優れていると考えるようになった。最初に日本に渡航する前、あとに残る子供達の無事を祈ってカトリックの洗礼を受けた。

18. 人々の働き方

ワンの見るところでは、彼女と同じ地方から来る人達は最初の3年間は非常によく働く。借金の返済を迫られていることに加え、家族全体の幸福という明確な目標があるためだ。しかし、3年を過ぎると、健康を害して仕事の量が減ってくる。自由時間を少しでも多く自分自身のために使うようになる。パチンコなどの娯楽に耽溺する人もおり、そのため貯金と送金が減ってくる。

(それは筆者が東京地方裁判所で見た男の場合とそっくりであった。彼が日本で貯金したのは最初の3年間だけで、残りの10年間は有り金をパチンコにつぎ込んだ)。

<インタビュー記録 3>

カン は福建省 閩清 から来た 22 歳、大学生 2 年生の 小柄な 女性である。日本に 2 年半 滞在している。東京の有名大学に入る前に 埼玉県 の日本語学校で 1 年学んだ。日本に 数人の 叔父と 叔母がおり、彼女の 学校と 住宅探しを 助けた。彼女は 寿司屋で アルバイトを していた。面接調査のときは 日本人 男性と デートを するところであった。

G : あなたは 高校を 卒業して から 日本に 来たの ですか。

K : そうです、高校を 卒業して から です。

G : いまは おいくつ ですか。

K : 22 歳です。ちょうど 22 歳になったばかりのときに、留学しに 来ました。(高校を) 卒業して、2 年ほど 家にいて、留学を 決めました、もともと 1 年間は 予備校に 通うつもり でしたから。

G : いまは 何を 専攻して いますか。

K : 言語学 です。

G : 卒業したら、どんな 職業につく の でしょうか。

K : いろいろ です。一般的には 教師になっ たり ですが、翻訳を する人も います。

G : さらに 進学を 考えたこと は ありますか。

K : さらに 進学です かと、年齢の ことも あります。卒業する ころは、24 歳になり ますから ね、将来の ことも 考えなければ ならない でしょう。もし 可能ならば、修士 までには 行きたい ですね。

G : 私は 福建省 出身の人を たくさん 知っていますが、彼らに 自分の 考えとか、生活の 状況を 聞かせて ほしいと 言ったら、みんなは あまり 気が 進まない ようです。

K : それは、みんな 来たときの 状況が 複雑です から・・・。いろんな 層の人が いるので、時には あなたに 話を したくない 人も いる でしょう。

G : 面倒な ことを 避けたい の でしょう ね。

K : そうかも しれません。その上、福建省 の人は アルバイトに ものすごく 熱心です ので、時間の とれる 人が 少ないの かも しれません。そうで なければ、話を 聞かせて くれること だって 不可能で はないと 思います。

G : 現在、だいたい 昼間は 学校、夜は アルバイト ですか。

K : そうです。夜の アルバイトが 終わった 後の自由 時間とか、大学でも 毎日 授業がある わけでは ないので、授業と 授業の間の 時間、たとえば、授業の ない 90 分の 時間を利用 して、ネットで 翻訳の 仕事を 探したり します。

G : 主に 翻訳を するの ですか。

K : そうです。通訳は それほど 簡単では ないです から。

G : 翻訳の仕事はよくあるのですか。

K : そんなに多くはありません。競争は激しいですから、特に中国語は。もし他の少数言語が分かるなら、比較的有利です。

G : 翻訳の仕事はどのようなルートで依頼されるのですか。先生の紹介ですか。

K : ネットで探せますよ。たくさんの翻訳ホームページに登録したので、それを通して、仕事が紹介されます。東大からもありますよ。

G : あ、そうですか。東京大学同窓会のホームページにあるのですか。

K : あります。それに登録すれば、ある会社からメールが送られてきます。英語の仕事ならばとても多いです。私にはまとまった自由時間が少ないので、翻訳の仕事だと、電車の中でもゆっくり読めます。読んだ後に指定された納期までに入力します。

G : 昨日の夜は、朝 2 時まで仕事をしていたのですか。

K : はい。日本に来ている人はみんな大変ですが、私の場合は、まだいいほうです。

G : 普通は、何時から何時まで働くのですか。

K : 普通は夕方 5 時から夜 12 時までです。ときどき酔っ払ったお客さんがいるので、遅れたりします。お客さんが帰った後に、やっと帰れます。

G : スナックのような感じですか。

K : すし屋です。

G : すし屋でもそんなに遅いのですか。

K : そうです。営業時間は 12 時までですが、老舗なので、常連客が多くて、サラリーマンも多いのです。近くのお客さんは遅くても飲みに来てくれます。酔っ払ったら、帰ろうとしないし、夏休みのときとかは、3 時まで待つこともあります。

G : それなら、残業代が出ますか。

K : はい、残業代が出ます。だけど日本人はけちだから、店のオーナーは給料を細かく計算します。

G : そうですか。それは大変ですね。もしも帰るのに電車がなくなったら、とても遅くなってしまいますね。

K : 歩いて帰れます。家は店から 30 分程度の距離です。

G : 夜道は危ないじゃないですか。

K : 大丈夫です。度胸がありますから。小さいときから気が強いです。私は長女で、中学のとき、父は外国に何年も行っていましたので、家には、母と私の二人だけでした。小さな弟もいましたが、家の内外のことは、母と私だけでやりました。実をいうと、私と母は親子というより姉妹のような関係でした。

G : お父さんはどこに行っていましたか。

K : シンガポールへ、出稼ぎです。父の妹がシンガポールに定住していましたので、父はそこへ働きに行きました。

- G： あなたはどうしてシンガポールじゃなくて、日本に来たのですか。
- K： シンガポールでは学生が働くことは許されていませんから。家族からの仕送りに頼るしかなく、家族に負担をかけたくないので、日本に来ました。ちょっときついですけど、慣れればどうってことはないです。
- G： 実際、他の国に行きたいと思っているのでしょうか。先ほどもインドに行くと言いましたね。日本にいる人で、インドに行きたいという人は少ないですね。
- K： 通っていた語学学校にはインドの人もたくさんいました。学校の大半の学生は中国人だったので、先生は時に、中国語を使っていました。彼らはみんな聞いても分からないから、私が教科書に書いてある日本語を彼らに英語で説明してあげたことがあります。
- G： それじゃあ、あなたは日本に来たとき、日本語が話せたのですか。
- K： 少しだけできました。
- G： 日本に来てから、ずっと自分で仕事を探していたのですか。
- K： そうです。基本的に自分で探しました。ただ、来たばかりのときは、あまり探しませんでした。語学学校は辺鄙なところにありましたから。東京ではなく、埼玉にありましたので、仕事は見つけにくかったのです。それに、私は小柄で、力仕事はできませんから。
- G： 収入源は主にどこから得ていましたか。
- K： 父親と母方のおじが少し援助してくれました。かなり迷惑をかけてしまいました。日本に来て間もないし、気持ちも適応できなくて、人とも話すこともなく、自分の殻に閉じこもっていました。話す相手といたら、父親やおじだけでした。だんだん慣れてきて、自分の性格も変わりました。
- G： そうですか。ずいぶんと明るくなったのですね。どうして、自分が変わったと思いますか。
- K： 一番大きい要因は生活に迫られたからだだと思います。たくさん日本人に接してきました。たとえば、たくさん日本人の女性を見てきました。生活の面で、彼女らは非常に苦労していますが、みんなよく頑張っています。だから日本人女性のいいところに学ぼうと思いました。
- G： そうですか、普段の生活の中で、付き合いのある日本人女性は多いですか。
- K： いま、学校の寮のようなところに住んでいます。周りほとんど日本人です。外国人といえば、私ともう二人だけです。普通の外国人はその寮に入れません。私の二番目のおばさん（母方）の夫が日本人ですので、その人が保証人になってくれて、寮に入れたのです。
- G： 親戚の多いほうがいいみたいですね。しかも、あなたの家族は互いにたすけあっているようですね。
- K： 実は日本人の親戚はとても熱心で、とても気前よく助けてくれます。なるべく人の

ために何とかしてあげようとしています。

G： そのおばさんの旦那さんですか。

K： そうです、おばさんの旦那さんです。

G： 運がいいじゃないですか、苦労はあるけれど。

K： そうですね、まあまあです。日本で、これといってえらい人と出会っていませんが、騙されるような目にもあっていません。

G： 騙されるようなこともあるのですか。

K： ありますよ。日本人に騙されるのではなく、中国人同士のことです。だから、アルバイト先では中国人と一緒に働くところでは働きたくないです。福建省の人同士でも心の隔たりのがあります。たとえば、日本に来たばかりのころ、彼らはなかなか仕事を紹介してくれません。私はことばを覚えるのが早くて、「私より仕事ができるようになったら、私の立場がなくなるのでは」と思われている雰囲気がありました。

G： そうですか。それはちょっとびっくりです。福建省の人に、「仕事はどこで見つけたの」と聞くと、ほとんどの人は「福建省の友人か、同郷の人から紹介してもらった」というのですが。みんなこうしたネットワークの中にいますね。

K： だけど、正直なところ、福建省の人って、間にお金が絡んでいて、まるで、お前を買ってきたんだぞという感じです・・・

G： それは、バックチャージをもらうということですね、同級生の間でもそうですか。

K： 普通はそうですよ。二人の間に相当な信頼関係があれば、ただで紹介してくれますが。そうでないと、ただで仕事を紹介することはありえないです。福建省から来る人は一般的に福清市から来る人が多いですが、福清の人は特に経済観念が強く、お金にはとても敏感です。だけど、福清人同士は仲がよくて、お互いに助け合っています。

G： そうですか。助けるときには、お金をとるのですか。

K： 詳しくはよく分かりません。

G： そうしますと、福建省から来たといっても、閩清から来た人はちょっと損をするということですね。

K： 福建省から来た人には、福州、莆田、福清などの人がいます。福清の人は自分のコミュニティがあります。閩清の人はなかなかそのコミュニティに入れません。

G： 複雑ですね。友達の中に、長楽から来た人はいますか。

K： 長楽ですか。長楽の人もいますよ。しかし、昨年からは福建省出身の人を制限していますから、現在語学学校で、福建省の人を見つけるのは難しいですね。

G： そうですか。では、あなたが来た頃はどうだったのですか。

K： 私は最後のグループです。もう少し遅れたら、来られなくなったでしょう。

G： そうですか。あなたのビザには特に問題はないのですね。

K： はい。私のビザには問題ありません。

G：なるほど。実際、中国から来た人を細分すると、福建省、東北、上海など、また福建省もいくつかに分けられますが、お互いにつながりを持たないのですね。

K：そうです。みんなそれぞれ自分たちだけのコミュニティがありますから。

G：あなたにとっては、社会的に支えてくれるのは家族ということですか。

K：家族と個人的に信頼関係ができている友人です。

G：友人はインド人も含むのですか。

K：インドやタイなど東南アジアから来た人たちです。彼らは人助けをしても、損得勘定はあまり考えないです。大学では、東北出身の友人もたくさんいて、気前よく助けてくれます。普通の中国人はお金に敏感ですが、彼らは私に何か問題があれば、必ず助けてくれます。お金の問題さえも。頼めば、応じてくれます。

G：お金の貸し借りもですか。

K：便利ですよ。5万、10万でもOKです。その人がお金を持っていれば、まったく問題ありません。だから、本当に驚きました。

G：そこまでするのは、あなたがとても信頼に足る人だからですね。

K：最初福建省から来たと聞くと、その人に対して態度がよくなかったのですが、いくつかのできごとがあって、私も彼女たちに困ったことがあったらできる限り助けてあげて、だんだんとそうになりました。

G：時間が経つと人の心が良く分かるということですね。福建省の友人とは語学学校のと時から基本的に連絡はなかったのですか。

K：そうです、ほとんど連絡しません。語学学校にいたときに本当に深い付き合いがあったのは東北出身の人たちだけでした。

G：福建省の人とはどうでしたか。

K：彼らは忙しいこともあり、私との付き合いはあまりなかったです。一方で、私は福建省の人たちと付き合いにくいと感じました。長楽や福清といった人たちです。

G：彼らのここでの立場などのことで、敏感になっているかもしれませんね。

K：そうです、とっても敏感です。彼らは自分を守る意識が強いのです。

G：もう一つ言えるのは、彼らの多くは進学を考えていないですね。

K：そうです、お金のために来ています。

G：一緒に来た人の中で、お金のために語学学校をやめた人はいないですか。

K：います。日本に来て半年ころ、福建省から来た女の子がいて、まったく学校に来ていませんでした。

G：実際、何年か前に福清や長楽から来た人で、一度も学校に行っていない人も多くいました。

K：そうです。彼らの多くは、日本に来るためにお金を高利で借りているので、やむをえないです。

- G： あなたが来たときは、それほど多くの支出はなかったようですが、それは親戚が学校を探してくれたからでしょうか。
- K： 確かに私はあまり余計にお金を使いませんでした、親戚は学校の人と仲がよかったようですし、先生たちも彼らを信頼していました。だから私を紹介されても、特に問題はなかったのです。
- G： はじめのころは、彼らと一緒に住んでいたのですか。
- K： 最初は、二番目のおばさん（母方）と一緒に住んでいました。普段も日本人との付き合いの機会が幾分多かったです。
- G： いつころから人と交流できるようになったと思いますか。
- K： 大学に入ったころだと思います。
- G： 本当に？
- K： 語学学校は多くの生徒の面倒を見るので、先生が教えるペースも遅かったです。漢字の分からないインドやタイの人まで面倒をみるからです。だから、語学学校で勉強する日本語だけでは大学には入れません。
- G： あなたが後で日本語能力試験の一級に合格したのは、大学に行くためでしたか。
- K： 私たちの学校は日本語能力の一級を要求していなかったのですが、受けなければなりませんでした。だから、授業以外の時間にたくさん勉強しました。本当に日本人とつきあえるようになったのは大学の1年からだと思います。私の日本語の担当教官はいい先生でしたし、彼はいい勉強法を教えてくださいましたし、その上アルバイトの経験もありましたから。
- K： どうしていまの大学を選んだのですか。
- G： 私の情報はあまり多くなかったです。しかもほとんどはおじさんからのものです。彼がいうには、この大学は勉学の雰囲気がよく、ほかの大学との交流が頻繁に行われるとのことでした。確かに、たくさん有名な教授がいました、それはよかったです、たくさんいい先生に恵まれました。
- K： そうでしたか。この大学に受かるのは、難しかったですでしょう。
- G： 留学生試験は、書類選考と面接だけで、ほかの大学のように筆記試験はなかったです。私の学科の面接試験では英語でのやり取りがあり、英語で質問されました。まず、英語での自己紹介、それから、趣味とか、どんな英語の本を読んだとか、読んだ本の簡単な書評まで聞かれました。そのときは頭が真っ白でした。英語がすぐに出てきませんでした。幸いなことに、先生は英語のレベルというより、積極的に人と交流するかどうかを見ているようでした。だから、先生は私のことを特別な女の子だと言いました。ほかの恥ずかしがりやの女の子たちと違って、先生と話すのが好きでしたから。しかも、先生が間違ったことをいうと、すぐ指摘しました。中国で大学を受けなかったのは、中国の教育制度に原因があるかもしれません。中国では、教授が教え、学生は学ぶという

パターンです。授業内容も古いです。学生の創作能力を重視しないです。最後に卒論を書くときには、教授が学生を指導して、課題まで出します、新しいものを作る考えはまったくないのです。だから、日本に来ました。

G： いまの大学では、中国人学生は1人だけですか。

K： 同じ学科にもう1人マレーシア人の学生がいます。同じ学科で1年下の学年には3人の中国人学生がいます。あと韓国人もたくさんいます。どんどん増えてきました。

G： 1週間の授業時間はどのくらいですか。

K： 大学2年までに大部分の授業を終わらせたいと思っていますので、授業をいっぱい入れています。ほぼ毎日3、4コマです。

G： あ、それは大変ですね。毎週20何時間学校に行くわけですね、すごいですね。

K： 3年生になれば、時間は余るので、ほかのことができるようになります。

G： 時間の余裕があれば、なにをしたいですか。

K： 早めに就職の準備をします。それから他のことを学びたいです。専攻が言語だけでは、社会に通用しません。技術的なことを学びたいです。もっと頑張らないといけない。いまは競争が激しいので、将来中国に帰るか、日本に留まるかって考えています。日本での生活が好きですけど。

G： 家族の方はどう思いますか。お母様は帰ってほしいと言いませんか。

K： 両親は私のことを制限したりしません。自分で決めるようにと言います。

G： 卒業後はどうなるか、様子を見ながら決めるのですね。

K： 私は女の子ですから、卒業したら、早く結婚してほしいって父親は言います。私も考えたことがありますけど、ただ自分のやりたいこともありますから。

G： プライベートな質問ですが、今、お付き合いされている彼氏はいますか。

K： あ、それはいますね。

G： 日本人ですか、それとも中国人ですか。

K： 日本人です。日本人と付き合いが多いから。

G： 日本人との付き合いに、抵抗はありませんか。

K： それはないです。そういう偏見はないです。ただ地方出身の人が割と好きです。地方出身者は頑張屋さんですから。

G： しかも、あなたの生活にも共感を持てるということでしょうね。

K： そうですね。東京の流行を追従している若い男の子はあまり好きではありません。男が化粧するのも嫌いです。素朴で誠実な人が好きです。ちょっと私より年上がいいです。

G： いまの彼氏はどこの出身ですか。

K： 沖縄です、両親にも言いました。

G： そうですか、交際はいつころからですか。

K： 夏休みからです。来年の春、彼の誕生日のときに、彼と一緒に彼の母に会いに行く
かもしれません。彼はそう言いました。

G： 不思議ですが、女子大学に、男子はいないですね。どのように知りあったんですか。

K： 大学のたくさんの女の子が彼の会社の人と知り合いです。彼とはカラオケで知り合
いました。

G： 彼はもう社会人ですね。

K： そうです、すでに仕事をしています。彼の年は私よりちょっと上です。中国でいう
数え年 30 歳になります。私より 7 歳年上です。ほかの人と違って彼は誠実な人です。
沖縄出身で、中国の福建省もよく知っています。近いから、福建との交流も多い。建築、
食習慣も似ています。二人の付き合いは、単に私が彼の世界に溶け込むのではなく、お
互いぶつかり合うようなものです。だから、彼も積極的に中国文化と中国語を勉強して
います。

G： それは本当にいいと思います。「相互接近」というのかな。

K： そうです。私は彼氏選びにすごく慎重です。いろんな人と付き合いがありますが、
本当の友人というものは多くないです。

G： 友達で「そんなたくさんアルバイトしないほうがいい」と言ってくれる人はいます
か。日本での生活はこんなに大変ですから。

K： います。体に気をつけましょうとか。それから励ましあいです。

G： 彼も東京で自立していますか。

K： そうです。彼は 5 年前に上京したのですが、自立しています。

G： 彼は沖縄の大学に通っていたのですか。

K： 大学ではなく、専門学校です。誠実な人です。

G： そうですか。高く評価していますね、一人目の彼氏ですか。

K： そうです。語学学校では接した男の子は私より年下の人ばかりで、年下には抵抗が
あります。インドとタイの人もいいですが、両親に反対されて、諦めました。

G： 理性的ですね。

K： 理性的です。両親のいうことをよく聞きます。特に感情面のこととか、両親に相談
します。反対されれば、諦めます。

G： あなたのような女の子は本当に珍しいですね。道理でご両親はあなたが日本にいる
ことを心配していないわけですね。

K： そうです。ほかの女の子と違って、友達が多いけど、親密な人はいないです。

G： 拠り所というか、頼れる人を探すなんて考えたことはありますか。

K： そういう考えはないです、自分でなんとかかなと思います。

G： いつからおばさんの家から出てきたのですか。

K： 語学学校を卒業する 2、3 ヶ月前です。そこで 1 年近く住んでいました。おばさん

の旦那さんにとってはいい人です、普通の日本人は親戚でも、そんなに長く住ませるなんてできないと思います。

G： 大きい家でしたか。

K： 2LDKです。たくさん迷惑をかけました。

G： 確かに容易なことではない気がしますね。

K： そうです。自分のことのように助けてくれました。大学選びとかも、高等教育（大学以上の教育）を受けた人たちですから。

G： おばさんと旦那さんは恋愛結婚ですか。

K： そうです。自由恋愛結婚です。

G： だから違いますね、旦那さんは中国文化とあなたのおばさんに愛情を持っていますね。

K： そうですね。おばさんの旦那さんも地方出身です。もともと東京の人ではないです。

G： おばさんの旦那さんはあなたにも影響していますね。そうでしょう。

K： 地方出身者は本当に違うと思います。例えば、日本史で明治維新の人物はみんな地方出身です。

G： 中国も同じように言えます。北京、上海人には人を見下す傾向がありますね。都会では傲慢に振舞いますが。

G： この点から言えば、外国人と地方出身者は近いです。

K： そうそう、危機意識を持っています。毎日後ろから誰かに追っかけられている気がします。

G： いまの彼氏と週一回会うのですか。

K： 会う機会は少ないです。週一回会えば、彼は幸せだと言っています。

G： アルバイトで忙しいからですか。

K： アルバイトで忙しいこともあります。一方で大学にも通っていますので、学校に通っている間には彼と会わないようにしています。勉強に集中したいです。彼にこう言いました。「学校に行っている間は、あなたとまったく関係ないから、1日2通のメールだけ許します。私に時間があるときなら、1時間くらい電話してもいい」と。私は彼にそう言いました。私は独立志向なので、もし、それはいやだというなら、別れてもいい。私は急ぎたくないし、一人でも生活できます。付き合い始めたころにも、はっきり言いました。「あなたとそんなに早く結婚はできない。お母さんが焦るというなら、ほかの子を探して。私は大学を卒業して、安定収入を得てから考えます。専業主婦はいやだ、主人に養ってもらいたくない。経済的な問題ではなく、大学4年間をむだにしたくない。それから、私は人に束縛されるのがいやだ。2人がいるときには2人の空間だけど、1人のときは私のプライベートの空間があるわけで、私の交友関係に口出してほしくない」と、私はそう彼に言いました。

G: 彼はあなたの言うことを尊重していますか。気に入っていますか。

K: 尊重しています。彼も中国文化が好きです、「三国志」が好きで、何回も読んだそうです。

G: 多くの日本人男性は中国人が好きですね。中国の女の子は自立心が強いです。

K: みんなは中国の女の子はプライドが高いと言います。

G: それだけではなく、日本社会で1人の男の人が家族を養うのに、経済的な圧力はますます大きくなっています。自立心の強い女の子がいてくれると、嬉しいでしょうね。

K: 彼も大変です。非常に努力しています。将来、私を幸せにすると言いました。だから、いまは一生懸命仕事して、お金を稼いでいます。

G: なかなかできないことです。こんなに理解のある人を見つけるのは。

K: 縁があると思います。

G: 日本人はデートで遊園地とかに行くのですが、あなたはどうですか。

K: そうしていません。初めてのデートで、普通の日本人の女の子はちょっと高級そうな、格調のあるところに行くと言いますが、私は彼に中華料理を作りました、角煮を作って、弁当にして、公園で食べました。私が彼に言いました、「感情はお金で買えない、二人に愛があれば、ハンバーグを食べても美味しいし、お金のために、あなたと一緒にいるわけではない」と。

G: 贅沢な生活をしたいと思う女の子ではないですね

K: 普段は非常に節約しています。毎月使うお金をきちんと計画を立てています。

G: そうですか。いまは家にお金を送るなんてまだできませんよね。

K: そうです。家に迷惑をかけない程度のことしかできません。

G: 学費はどうしていますか。奨学金はありますか。

K: 1、2年の奨学金は比較的少ないのですが、一応もらっています。学費は半分免除していただいています。残りは自分でなんとかできます。免除してもらって、1年60万円程度、それほど高くありません。

G: それでも大きな負担です、毎月5、6万円ですね。

K: ええ。毎月の貯金の目標は10万円です。

G: 生活費を除いて、10万を貯蓄するのですか。

K: アルバイトしていれば、店で食べるし、多く食べられないから、普段はあまり洋服も買いません。質素で、食事代を入れても、毎月使うお金は5、6万円、あとは全部貯金に回します。

G: いまは学生だから、確かにちょっと大変ですね

K: 彼氏に言いました、「化粧が好きな女の子が好きなら、ほかを探してください。私は化粧をしません、毎日すっぴんです。質素な生活が好きです。」彼は「いいよ、僕のお金を節約してくれるから」と言いました。

G: そう計算しますと、あなたは毎週 20~30 時間アルバイトしていますね。

K: そうです。大体そんな感じです。月曜日は定休です。火曜日から週末の夜はずっとアルバイトしています。

G: 今日の夜も行きますか。

K: そうです。夜はバイトです。日本で生活すると、強くなります。

G: 日本でつらい思いをしたことはありますか。

K: 泣いたことはあります。実をいうと、東京の地に足を踏み入れたとたん、飛行機で引き返そうと思いましたが、耐えました。その日の夜、泣いていました。家が恋しくて。

G: 家から離れたのは初めてですか。

K: そうです、初めてです。しかも、こんな遠い東京に来てしまいましたから。それまで生活の範囲はずっと福建で、中国の北方にさえ行ったことはありませんでした。日本に親戚がいるとはいえ、両親はとっても心配してくれました。心理的なプレッシャーはないかとか、病気にならないかとかです。ここでの事情を説明したら、安心してくれて、「成長したね」と言ってくれました。

G: (卒業まで) まだ2年ちょっとくらいの時間がありますね。

K: そうです、努力すれば、早く卒業することはできます。早く卒業したいです。

G: 半年の学費も納めなくても済みますね。

K: もし日本人の学生より半年早く卒業できれば、就職に有利です。私は背が小さいので、就職はすこし難があるかもしれません。

G: いまの生活圏で、日本人の女の子は多いですか。

K: 結構多いです。日本人の女の子との交流が好きです。彼女たちも留学生の生活に興味を持っているようです。

G: 普段の生活の中で、最も分かり合える友人は中国人ですか、日本人ですか。

K: やはり中国人です。仲のいい日本人の友人でも、包み隠さず言うことはできません。やはり違う国だと、隔たりがありますから、それほど親密にという感じはまだ持ってません。

G: それは文化の差異ですね。

K: そうです。そういう感じはあります。しかも日本人は人に頼られるのが好きじゃないみたいで、面倒なことに巻き込まれたくないようです。

G: いまは、遊びに行く機会は多いですか。

K: たまには、週末彼女らと一緒にカラオケに行ったり、長い休みに学校で旅行に行ったりします。長野に行ったことがありますよ。長野県の高原が好きです。とても綺麗なところでした。先生の木造の別荘もすばらしかったです。

G: では、日曜日は彼氏と会って、出かけたりするという感じですか。

K: 彼氏ともあまり会いません。住むところも遠いので、週末会いに来るのはちょっと

不便です。しかも、私は女子寮に住んでいて、男子は入るのが許されないので、外で終電まで遊んでいます。非常にすまないと思います。彼に週1回お弁当を作って、彼が帰るときに持たせます。彼は普段時間がなく、自炊しません。かなり大食いです。1回食べる量は私の1日分と同じくらいです。

G： いまは親戚とも会わず、電話するくらいですか。

K： そうです、電話だけです、彼らにも時間はありませんし。

G： 毎週ご両親に電話しますか。

K： 必ず週1回電話します。近況を報告します。最近、両親のほうからよく電話をかけてきます。彼とどうなっているか、どの程度まで進展したかとか聞いてきます。私は相変わらずだと答えます。

G： 弟は日本に来たいと言っていないですか。

K： 言いません。弟には中国で頑張ってもらいたい。

G： 弟はおいくつですか。

K： 中学2年生。私より9歳年下です。私が思うには、中国はこれからどんどん発展していくので、よく勉強すれば、日本に来る必要もないです。

G： そうですか。中国、特に沿海地域では、発展のスピードが速くて、日本にいるたかさんの上海人が帰りたいたいと思っているようです。

K： そうなのです。語学学校に上海から来た先生がいました。彼は会社で仕事する傍ら、語学学校で先生もやっていたのですが、2008年のオリンピックのことを考えて、中国に戻りました。北京で事業を展開するそうです。

G： 将来、中国関連の仕事をする考えはありますか。

K： 考えたことはあります。人と交流するのは好きです。

G： いまは先生たちとうまくやっていますか。

K： 外国の学生は勉強という点において、ハンディはまだたくさんあります。私には文章を書く経験がなく、とりわけ論文を書く経験はまったくありません。日本人の学生は中学でも調査レポートを書く経験があると聞きます。文章の組立て能力はまだまだ足りませんが、テストなら特に問題はありません。

G： いま最も難しいなと思っていることはありますか。つまり最も気持ち悪いことって感じるようなのですが。

K： あります。アルバイト先で、毎日流れるニュース放送が好きじゃありません。お客さんの言うことも何気なく耳に入ります。例えば、最近犯罪が多くて、犯罪率が高いとか、外国人の犯罪が多いとか、特に福建省の人が多いと聞くと、非常に気持ち悪いです。最も心が苦しいと思います。

G： 自分は福建省の出身だということを隠したりしますか。

K： それはいいです。人に初めから自分福建省の人だと言います。アルバイト先

の人にも言っています。確かに、福建省から来た人は仕事を探しにくいと聞きます。店では、お客さんから福建省はどうって聞かれたりします。気分が落ち込むときは、彼らと論争したりします。福建省から来た人もさまざまで、悪いことをする人もいますが、大部分の人は真面目に勉強していることを話します。

G： 彼らはあなたに対してどんな態度を示しますか。

K： 謝ってくれます。「あなたの気持ちを考えないで、ごめんなさい」とか。アルバイトを長くやっていると、私が外国人ってことを忘れられています。

G： 日本語を完璧に話せるからでしょうか。

K： そうではありません。ただ店で使うことばは決まっていますので、慣れています。2年もやっていますから。

G： この仕事はどのくらいしましたか。

K： 2年近くです。

G： あなたみたいな率直に物事を言う人はあまり多くないですね。

K： 本当にストレートです。日本に来て長いのですが、言いたいことを腹に隠せません。

G： いつから一軒一軒飛び回り、仕事を探す性格に変わったのですか。

K： 東京に来たばかりのときはできませんでした。大学に入り、フェミニズムの雰囲気、ある先輩がいました。以前外国へ留学したことがあり、相当自立心の強い人で、「新女性」を目指していました。人を頼るような女ではだめですと。

G： 仕事を探すときに、XX大学の学生ですと言いますか。

K： 聞かれなければ、言いません。

G： 実はXX大学は名門校です。そこに入れたことで、自分の自信にもなったんじゃないですか。

K： それはありますね。日本人の学生も思うようです。そこに入るのは難しいですと。バイト先でXX大学の話をすると、結構尊敬されます。

G： そうですか。日本人の男の子は学識があり、才能のある女性を尊敬しますからね。いまはホールでの仕事ですか。

K： そうです。簡単な料理もできますよ。

G： 仕事的时候は、酔っ払った客がセクハラとか、ヘンなことを言ったりしますか。

K： たまに1人か2人に会います。怒ったところを見せ付けると、向こうは二度とやらないです。お客さんがクラブの姉さんを連れてくることもあります。クラブで働く中国人の女の子にも会ったことがあります。お客さんが紹介してこう言います。「この子もあなたと同じ中国から来たのよ」と。私は「一緒にしないでください、そういうことはあまり好きじゃありません」と言い返します。あるとき、クラブかスナックのママさんのような人が来ました。私に「時間あるときでいいので、来てみなよ。(私たちの店で)働くことを考えたことないの。もっと高い給料を出すわよ」と言いました。私は「単な

るお金のためなら、ここでバイトしません。自分のプライドを捨ててまで、好きでない仕事をしたくありません」とストレートに答えました。

G： あまりストレートすぎないほうがいいですよ。

K： そうですね。ここに来る人はみんな大変ですので、クラブとかで働く女の子を軽視しませんけど。

G： バイト先には自分だけが中国人ですか。

K： そうです、私一人だけです。しかも、普段も私一人だけです、全ホールを担当します。

G： そうですか、いまは相当慣れていますよね。

K： 酔っ払った日本の男の人は、酒の勢いで、でたらめを言います。私に彼氏とかいるのと聞きます。

G： では、自分の彼氏と文化的な隔たりはありますか。

K： 私たちの間の最大の問題は、彼が冗談を言って、私がそれを理解できないことです。やはりことばの問題が一番大きいです。

G： しかし、二人ともお互いの文化に近づきたいですね。

K： そうです。相手の文化の違うところを見つけるのはおもしろいです。

G： 普段の生活の中で、親戚以外に、福建省の人と接触することはありますか。

K： 少ないです。なぜか知りませんが、日本に来てから、故郷の人と付き合いたくないです。

G： それは、多分生活圏の中の福建省の人がますます少なくなっているからかな。

K： そうです。どんどん少なくなっています。まるで同じ池にいる魚じゃないみたいです。少なくとも、こっちの池の水が変わってきたみたいです。私の言うことを彼女らは理解できません。

G： いまも彼（女）らと一緒にいる機会がありますか。

K： 少ないです。年1回あるかないか。語学学校の後輩とかは、大学を受けたいときに電話してきます。

<インタビュー記録 4>

チェンは長楽から来た 36 歳の男性で、以前は高校教師をしていた。日本には 1 年余り滞在している。来日目的は事業への投資の失敗による借金を返済するためである。彼は 200 万円余りを払って日本のソフトウェア会社 C 社で働く名目で労働ビザを取得した。しかし実際には、新聞配達をしながらリサイクル会社で働いた。不法滞在者の親戚と同居し、元学生の親戚から 3 種のアルバイトを世話してもらった。彼は C 社に 30 万円を払い、労働ビザの 1 年更新に成功した。

G： 朝何時から仕事を始めますか。

C： 朝 8 時から最初の仕事をします。資源の回収です。住宅の道路沿いのビール缶を回収します。それを 10 時半までにやります。それから新聞販売会社に行って、新聞配達準備をします。まず、お昼を先に食べて、新聞配達は 1 時ころに始めて、3 時まで終わります。家に帰って、5 時まで休憩します。それから 3 つ目の仕事、夕刊配達をします。8 時ごろに終わります。

G： 3 つの仕事といっても、1 つにつき 2 時間程度ですね。

C： そうです。昼の配達は 4 時間ですが、実際は 1 時間ちょっとで終わらせます。

G： (具体的に) どんなお仕事ですか。

C： 駅ホームの売店まで新聞を届ける仕事です。一束一束を所定の位置に入れます。全部で 9 店舗、800 束くらいです。

G： 一人でやるのですか、監督する人はいないのですか。

C： いません。新聞配達はみな同じですよ。きちんとやって、なにかあれば、会社に報告します。

G： これらのお仕事はいい仕事だと思いますか。夜も新聞配達ですか。

C： 夜の新聞配達も似ています。夜は夕刊、昼間は日刊。ともにスポーツ紙です。

G： きつい仕事ですが、わりと自由ですね。

C： そうですね、結構好きです。中国にいたときもそうでしたが、先生をやっていて、授業を終えると、自分の時間になります。長い間、人の「監視下」にいて、やりたいことができないとあまり気分はよくありません。

G： 3 つの仕事の収入を足していくらくらいになりますか。

C： 1 日合わせても 1 万円にもなりません、8、9 千円くらいです。時間給で言うなら、高いほうになるはずです。

G： 時間のロスは結構多いですね。

C： そうです。移動時間が長い。夜の仕事は合わせて 3 時間ですが、正味働く時間は 30 分程度です。1 時間ほど電車に乗って、途中上野で乗り換え、夕方の 6 時ごろ、ラッシ

ューアワーの時間帯に、新聞を担いで電車に乗ります。

G： 週何日やりますか。

C： 6日間です。夜の仕事はほぼ毎日です。365日のうち、新年の数日を除いて。そういうふう聞いています。私はまだやり始めて、それほど経っていませんから。

G： これらの仕事は最近始めたのですか。

C： そうです。来たばかりですから。ここに来てから最初の3ヶ月間は、やることはなくて、朝の仕事を先に見つけて、それから新聞配達の仕事を始めました。

G： これらの仕事は友達に紹介されたのですか。

C： そうです、友達の紹介です。こっちにいる友人や親戚の人が助けてくれました。彼らはこっちにいる時間が長いから。職業紹介所には行っていません、当初、職業紹介所にお願ひすればよかったのですが。出国のビザがちょっと違うので、日本語を勉強したかったけど、その後、やはり先に仕事をしたほうが良いと感じました。

G： 仕事を探すのに、彼らにお金を払いましたか。

C： 払っていません。友達と親戚でしたから。朝の仕事は私の元教え子が探してくれました。私が来たばかりのころは、まだことばが分かりませんでした。この仕事はことばの要求が高くありません。きちんとできれば、いいわけです。

G： では、最初の3ヶ月間は仕事がなかったのですか、それとも親戚に頼んでいなかったのですか。

C： 基本的に私は探していませんでした。親戚たちは探してくれていました。彼らとここで住み、食べていましたから。妻の弟もいたし、妻の義理の兄もいました。彼らは日本に10何年もいます。ただビザがないだけです。もう一人学校時代の友人もいます。彼は会社勤めですが、私が来たときに、迎えに来てくれたのです。

G： 朝の仕事ですが、車を運転する人は日本人ですか。

C： そうです、この仕事だけは、話す機会があります。その他の仕事は日本語を話す機会がないので、日本語はなかなか上達しません。

G： 朝の仕事は、誰が紹介してくれたのですか。いい仕事ですね。

C： 私の教え子です。いま、彼女はもう帰りました。この間、彼女の旦那が捕まったので、彼女も自然と帰りました。

G： 彼女はビザの期限が過ぎても、引き続きここにいたのですか。

C： 過ぎて何年にもなりますよ。7～8年です。お金もだいぶたまったでしょう。私は中国で11年間教師をしていましたが、彼女は中国にいたときの教え子です。教え子がたくさんいた中で、彼女は特にいたずら好きな子だったから覚えています。

G： あなたはどこの大学に通っていたのですか。

C： 「大専」(専門学校)です、XX校です。

G： 教会にある女の子がいます。日本に来る前に、あなたと同じ学校に合格しましたが、

一方で日本行きのビザを持っていました。どっちに行くかと迷っていましたが、こっちに20万円を払っていたので、こっちに来ました。

C： 基本的に、日本に行くのを選ぶでしょう。日本に行けば、すぐ稼げるし、学校に行っても、卒業して仕事が見つかるかどうか問題です。私たちのところでは、日本に行けば、お金を稼げるというふうに思われています。私の時代でも、就職が決まったにもかかわらず、日本に来る人はずいぶんいました。

G： あなたが学校にいたときは、外国に行く人は多かったですか。

C： 多かったです。学校からとは言わず、とりわけ長楽と福清からは多かったです。教会にいる人たちはほとんどこの2ヶ所の人たちです。

G： あなたの知り合いの中で、身の回りの人で国を離れた人は多いですか。

C： 多いですよ。アメリカに行った人も、日本に来た人も。国を出る人が多いというのは、(外国に)親戚がいるからなのです。もし、一人で誰も知らないところに行っても、生きることは難しいでしょう。

G： 自分の家族が、日本に何人もいるんですか。

C： 妻の弟、妻の姉夫婦はいました。その後、姉夫婦は帰ったし、弟も帰りました。(この話では、姉夫婦はまた日本に来たと言っている)

G： 彼(弟)はあなたと同じ村ではないのですか。そこから来た人は多いですか。

C： 同じ村ではないです。そこから来た人は多いです。

G： もう少し若いときに、こっちに来ることを考えていませんでしたか。

C： 考えたことはあります。ただ私の場合はちょっと特別でした。日本に親戚が多かったのに、私を来させなかったです。なぜかという、妻も学校で仕事をしていましたから。家は学校のすぐそばです。義理の父は早く死んだので、義理の母は一人暮らしです。妻は三人姉妹(弟)ですが、二人が日本にいます。彼女(妻)も日本に行ったことがあります。彼女の弟と一緒に来たけど、来てまもなく、病気で国に戻りました。それから私たちは結婚しました。当時私は卒業したばかりで、給料は100元しかありませんでした。それから私たちのところは経済的に発展しました。特に93年、94年は経済が急激に発展し、私は教師をやめて、どこかに行きたいと思いました。当時は教師の社会地位が低く、外へ流れた教師は非常に多かったです。外国に行くか、商売をやるかです。そのときはみんないとも簡単に仕事をすてました、惜しまずにね。

G： 当時、出国しなかったのは、なぜですか。

C： 彼女らは私を来させなかったのです。妻は持病があり、義理の母は一人暮らしだから、結婚して彼女の家に住んでいました。彼女らははっきりと日本行きに反対するとは明言していませんが、ただ日本にくることを手伝いませんでした。外国に行くとなると、彼女らのツテが必要です。そうでしょう。外国に行くための条件なら、備えています。彼女たちは口では、「外国に行くのなら、手続きするのを手伝おうか」とは言うけど、

手伝ってくれませんでした。こういうこともあって、10年が過ぎました。しかし、よりによって海外に来たわけですが、今回国を離れたのは特別な原因がありました。自分自身の原因で国を離れました。

G： 自分でなにか商売をやっていましたか。

C： 私は教師でしたが、ある人のために資金調達しました。しかしその人は商売で損して夜逃げをし、結局私はその債務を負わされることとなりました。その人は私の親戚で、会社を興していました。私は自分の仕事があるので、管理に関わっていませんでした。本当は損しないはずですが、なぜかうまく経営ができませんでした。妻の財産は私が管理するので、簡単に資金調達ができました。自分はずっとなにか見返りを期待していたわけではないです。だって、自分は仕事もあるし、自給自足ですし、生活の問題を特に憂慮することもありませんし。中国ではお金をそんなに持っていないけど、それなりの生活が送れていました。そうでしょう。だから、日本に来なくてもよかったのですけどね。

G： お金は誰から借りたのですか。

C： 妻の実家から借りました。もともと妻の実家には、柱になる人もいなくて、義理の母も年だし、一緒に住んでいる私がお金を管理していました。家のことも私が任されていました。例えば、家や店を買うなど、自分を信頼してくれていました。

G： 家の管理人のようですね。

C： そういってもいいでしょう。私もばかじゃないし、また少し知識もあるし、妻の実家を自分の家だと思っていました。

G： 妻の弟たちは怒らなかったですか。

C： もちろん怒りました。でも怒っても仕方ないでしょう。これらのことは義理の母は知りません。最初は簡単にポンと金を貸したわけではありません。親戚のプロジェクトに投資する価値があると思い、少しずつお金を出しました、管理に問題があったのですが、お金をどんどん投入しました。すると、損をしていた親戚の人は私にその実情を知らせず、挽回しようとして、泥沼にはまってしまい、ついに耐え切れず夜逃げしてしまいました。逃げられて、私もどうしようもなく、債務だけ背負われました。自分の実家もそんなに裕福ではありません。父親は小さな商売をやっています。私は自分の兄弟姉妹たちを（資金援助などで）手助けしようと思って、この手のことに関わったのですが、このことが発覚した後、一つの考えが浮かびました。外国へ出稼ぎに行こうと思いました。自分の給料だけでは、返さきれません。日本でもいい、アメリカでもいい、外国に行くことを決心しました。そして自分の仕事をやめました。本当に惜しいと思いました。学校では上の人に信頼されていました。中堅だと言えます。2回ほど卒業生クラスも担当しました。私のような教師はそれほど多くなかったです。そのとき、ある親戚の人から、近所だった人が日本の会社において、日本に行く手続きをしてくれると聞

きつけました。ただし、条件は学歴が「大専」以上で、仕事歴 10 年以上、もちろん費用も取られますが、私は自分の書類をその人に預けました。

G： そのときからどうやって外国へいけるか聞き回っていましたか。

C： そうでしたね。そのときから、絶対外国に行くという考えを持っていました。そうじゃないと、お金の問題は解決できません。地元の人には、私が外国へ出れば、お金を返せるという保証があると思うわけですよ。だって彼らは私をどうしようもできないです。親戚でもあるので、法廷に訴えてもね。

G： ましてや、故意にしたわけでもないし、親戚のためですしね。

C： そうです。最初は彼女らには黙っていましたが、つい隠しきれずに事情を明かしました。妻の弟は義理の母を責めました、どうしてお金を管理できていないのかと。後に私は弟に言いました。今回の件は母の責任ではありません。彼女はなにも知らなかったのです。最初は日本に来る手続きをしたことを誰にも話しませんでした。誰も知りませんでした。在留資格（ビザ）を手に入れたとき、妻の弟に話しました。彼はそれを聞いて少し安心したようです。日本に行けば、彼のお金を返せるという希望はあるからです。だから、日本に来たのはお金を稼ぐためというより、借金を返すためです。日本で何年間か働いて、お金を返済したら、国に戻ろうと思っています。ここにはいたくないです。この社会はよくない。多分アメリカほどよくないでしょう。この国の人とはちょっと違う。排他的です。

G： 感じますか。どんなときに感じますか。

C： 感じます。仕事のとくに感じます、メディア、新聞の報道にも感じます。いまは毎日家でテレビを見ています。日本語ができないので、なるべくテレビをみて、日本語を勉強します。

G： 日本に来る手続きするのに、どのくらいの費用を出しましたか。

C： 約 10 何万かな。

G： 来る前に、数 10 万もの負債を抱えているわけですか。

C： そうです。返すすべはありませんでした。なんというか、一か八かで、中国では安定した仕事がありました。教師の地位もよくなりつつありました。しかし、仕方なく、こうなってしまったのです。

G： 帰られた場合、自分の仕事を続けられますか。

C： もうできません。公立の学校なので、出てきたときには、「辞職」という形も取らせてもらえませんでした。「辞職」だと、退職金が生じますので、「自動離職」という形になりました。つまり「除籍」です。帰るとしたら、私立に行く手もありますが、まあ、これもまた違いますから。これは将来のことだから、いまはまだ考えていません。だけど、日本にいていいところもあります。仕事しながら、何かを勉強したいです、日本でうまくやっていけるなら、やっていきたいです。

- G : あなたのビザはもうすぐ期限切れですが、再度更新しますか。
- C : そうなのです。私を招聘する会社は私がすぐ働けると思っていました。しかし私はことばができないので、コミュニケーションができない。会社はそれを知って、どうしようもないという感じでした。多分日本人の仲介会社が間にいるでしょうから、詳しい話は分かりませんが、その後会社は私のビザを更新してくれると承諾しました。少しのお金を出せば済むことです。私の滞在資格は「黒」ではなく、「白」でもなく、「グレー」なのかもしれません。
- G : ビザ無しより、あったほうがいいわけですよ。
- C : 本当は今月手続きするつもりですが、会社の源泉徴収票はまだ発行されていないので、年末まで待たないといけません。だからまだ手続きしていません。
- G : ビザを更新するのに、どのくらいお金がかかりますか、何 10 万ですか。
- C : そうですね、そのくらいです。私もよく分かりません。今回ビザを更新したら、会社を探して就職できないものかと、いま考えています。自分の専門知識を生かして。
- G : これまで、親戚以外の中国人の知り合いはいますか。知り合いの日本人はいますか。生活圏は少し広くなりましたか。
- C : 生活圏は少し広くなりました。教会で知り合った友達とか。それから、毎週水曜日四谷に日本語を習いに行っていました。最初は週 2 回、合計 4 時間勉強しましたが、仕事とぶつかって、行かなくなりました。いまは日本語を話す機会はほとんどありません。朝だけ少ししゃべりますが、ずっとしゃべるわけにはいきません。日本人は車を運転していますし、しかも、絶えず仕事しないといけません。帰りには少し会話ができます。
- G : 自分にとって役に立つ日本人の知り合いはいますか。
- C : ほとんどいないです。知り合ったとしても、ことばの問題で、意思疎通はできないので、友達にはなりにくいです。
- G : ビザ申請してくれる会社はどんな会社ですか。
- C : ソフト会社です、人材派遣もやるとか。
- G : 日本人の会社ですか、それとも中国人の会社ですか。
- C : 日本人の会社です。
- G : そこで働く可能性はありませんか。
- C : しばらくは無理です。ことばの問題もありますし、入国申請の書類はたぶん半分偽ものもありますから。
- G : この会社はもともとそういうことで儲ける会社なのかもしれません。
- C : それは違います。担当の人から聞いた話ですが、売り上げは結構高い会社だそうです。
- G : プログラマーつまり SE として招聘されたのですか。ほかの人もいますか。
- C : いるはずですが、具体的にどうやっているのか、私も分かりません。

- G： 家族と離れるのに、それなりの決心が必要でしたよね。
- C： そうです。できることなら行かないでくれと彼女らは望んでいました。
- G： 奥さんはあなたの経済状況を知っていますか。
- C： 知っていますが、具体的なことは知らないはずです。妻の弟には告げました。お姉さんに言わないでくれと。彼女は体が弱いし、それに私の責任で、彼女と関係ない。彼女に言ったって、彼女もどうしようもない。もともと彼女はなにも知らなかったし、私の過ちで、ほかの誰とも関係ない。私にも手立てがない、どうすればいいのか、なるようになるしかない。だから、いま考えているのは、日本でうまくやっていたら、日本で頑張るし、だめなら、何年か稼いで、借金を返済したら国に帰ります。中国で仕事を見つければと思います。
- G： 家にPCはありますか。
- C： あります。親戚からもらったのです。インターネットのプロバイダーにも申請しました。仕事が終わったら、ネットで「本」を読んだり、資料を見たりします。中国にいたときもそうでした。PCは独学です。好きですから。物理学を専攻していたので、中国でも結構早い段階でPCに触れました。私のケースはちょっと特殊ですよ。
- G： あなたの場合は特殊だと言えません。日本に来た少し年齢の高い人は、事業で失敗し、借金返済のために来たという人が多いです。ただ、唯一特殊といえるのは義理の弟からお金を借りたところです。
- C： 個人のお金を無断で使いましたから。それから、私の妻の姉夫婦も商売で失敗し、負債を抱えていて、日本にきて、10何年働いて、結構稼ぎましたが、またしても養殖業で失敗して、再び日本にきています。
- G： いまは1ヶ月の家賃はいくらくらいですか。
- C： いまは親戚と一緒に会社のアパートに住んでいます。相棒は会社のエンジニアなので、社長にも目をかけられていて、もともと家賃を払う必要はないですが、彼が社長に相談したら、住むところのない私を入れてもいいという許可をもらって、家賃は1万5千円ずつ出しています。
- G： 部屋の大きさは。
- C： 約6畳です。二人の男は持ち物がなく、住むのに十分です。時間のあるときは、PCの使い方を彼に教えます。ネットでニュースをみたり、中国語のテレビを見たり、いま彼は毎日PCを見ています。彼は「行動が不便」だから。私の言う意味をお分かりですね。買い物とかは、基本的に私が行きます。
- G： 現在日本での生活はどうか。
- C： このままいけば、比較的安定しています。良いとは言えないけど、悪いとも言えません。給料は高くないですが、仕事はそれなりに満足しています。
- G： どこかのレストランで働きたいと思いませんか。

C： レストランなら、もう少し稼げるかもしれませんが、時間も倍以上かかります。だから、行きたいとは思いません。他にしたいことがなければ、このままで行きたいと思えます。それに、何かを勉強したいので、時間をいっぱい使うと、勉強する時間がなくなりますから。

G： いま最も難しいと思うことってなんですか。

C： やはりことばだと思えます。

G： 家が恋しいですか。

C： もちろんです。最近はずっと本を読んでいます。「聖書」を研究したり、宗教や哲学の本とかを読んだりします。いまは本当に希望を持ってなくて、もし結婚していなければ、「修道僧」になるかもしれません。唯一心配しているのは、私の娘です。

G： ちょうど思春期ですよ。

C： そうですよ。もしそばにいれば、いろいろと違ってきます。私はよく知っています。彼女にはなにが必要か、なにをどう与えればよいかも知っている。彼女のことがよく分かる。彼女は特別に聡明ではないが、素直な子です。(なにもしてあげられないのは)最も残念なことです。ただ毎日ネットで彼女に会えます、ネットで宿題のやり方を教えることもできます。

G： 今日はここまでにしましょう。

<参考文献>

- Aguilera, Michael B.; Massey, Douglas S. 2003. "Social Capital and the Wages of Mexican Migrants: New Hypotheses and Tests." *Social Forces* 82(2): 671-702
- Bailey, Thomas, and Roger Waldinger. 1991. "Primary, secondary, and enclave labor markets: A training systems approach." *American Sociological Review* 56: 432-45.
- Coleman, James. 1990. *Foundation of Social Theory*. Harvard University Press.
- Chin, Ko-Lin. 1999. *Smuggled Chinese: Clandestine Immigration to the United States*. Temple University Press, Philadelphia.
- . 2001. "The Social Organization of Chinese Human Smuggling," in D. Kyle and R. Koslowski (eds), *Global Human Smuggling: Comparative Perspectives*, Johns Hopkins University Press, Baltimore: 187-215.
- Cornelius, W. A., P. L. Martin and J. F. Hollifield. 1994. "Japan: the Illusion of Immigration Control," in *Controlling Immigration: a Global Perspective*, edited by W. Cornelius, P. Martin and J. Hollifield. 375-414. Stanford University Press.
- Hagan, Jacqueline. 1998. "Social Networks, gender, and immigrant incorporation: Resources and Constraints." *American Sociological Review* 63(1): 55-68.
- Hondagneu-Sotelo, Pierette. 1994. "Regulating the Unregulated? Domestic Workers' Social Networks." *Social Problems* 41: 60-64.
- 入管協会 (Japan Immigration Association), 2004 年, 『在留外国人統計』
- Liang, Zai and Wenzhen Ye. 2001. "From Fujian to New York: understanding the new Chinese immigration," in D. Kyle and R. Koslowski (eds), *Global Human Smuggling: Comparative Perspectives*, Johns Hopkins University Press, Baltimore: 187-215.
- Liang, Zai and Hideki Morooka. 2004. "Recent Trends of Emigration from China: 1982-2000." *International Migration* 43(3): 145-164.

- Light, Ivan. 1972. *Ethnic Enterprise in America*. University of California Press.
- Light, Ivan, and Edna Bonacich. 1988. *Immigrant Entrepreneurs: Koreans in Los Angeles, 1965-1982*. University of California Press.
- Mahler, Sarah. 1995. *American Dreaming: Immigrant Life on the Margins*. Princeton University Press.
- Massey, Douglas, Rafael Alarcon, Jorge Durand, and Humberto Gonzalez. 1987. *Return to Aztlan: The Social Process of International Migration from Western Mexico*. University of California Press.
- and J. Arango, G. Hugo, A. Kouaouci, A. Pellegrino and J. Taylor. 1993. "Theories of international migration: a review and appraisal," *Population and Development Review* 19(3). 431-466.
- 1994. "An evaluation of international migration theory: the North American case," *Population and Development Review*, 20(4):699-751.
- Massey D. and K. Espinosa. 1997. "What's Driving Mexico-US Migration? A Theoretical, Empirical, and Policy Analysis." *American Journal of Sociology* 102(4): 939-999.
- Morita, Kiriro and Saskia Sassen. 1994. "The New Illegal Immigrant in Japan, 1980-1992." *International Migration Review* 28(1): 153-163.
- Sanders, Jimmy, Victor Nee, and Scott Sernau. 2002. "Asian immigrants' reliance on social ties in a multiethnic labor market." *Social Forces* 81(1): 281-314.
- Stark, Oded and J. Edward Taylor. 1991. "Migration incentives, migration types: The role of relative deprivation," *The Economic Journal* 101: 1163-1178.
- Stark, Oded. 1991. *The Migration of Labor*. Cambridge: Basil Blackwell.
- Strauss A. and J. Corbin. 1990. Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques. Newbury Park, CA: Sage.
- 田嶋 淳子 1998. 『世界都市東京のアジア系移住者』東京、学文社.
- 2003. "Chinese Newcomers in the Global City Tokyo: Social Networks and

- Settlement Tendencies.” *International Journal of Japanese Sociology*. 12: 68-78.
- Vasishth, A. 1997. “A model minority: the Chinese community in Japan,” pp. 108-139, in *Japan's Minorities: The Illusion of Homogeneity*, ed. M. Weiner. London: Routledge.
- Waldinger, Roger. 1995. “The ‘other side’ of embeddedness: A case-study of the interplay of economy and ethnicity.” *Ethnic and Racial Studies*18(3): 555-581.
- Zhou, Min and John R. Logan. 1989. “Returns on human capital in ethnic enclaves: New York City’s Chinatown,” *American Sociological Review*, 54(5): 809-820.

(参考文献は英文名にもとづくアルファベット順)

中国系移住者からみた日本社会の諸問題

平成 17 年 3 月発行

発 行 財団法人 社会安全研究財団

〒101-0047 東京都千代田区内神田 1 丁目 7 番 8 号

(大手町佐野ビル 6 階)

電話 03-3219-5177 Fax 03-3219-2338

企画・編集 財団法人 社会安全研究財団内「外国人問題研究会」

代表 田嶋淳子

本報告書を引用する際は、出典を明らかにし、転載された刊行物、公表資料などを財団法人 社会安全研究財団までお送りください。